

糠塚遺跡

糠塚遺跡発掘調査報告書

1982

高山市教育委員会



踏磯b式土器「列孔浅鉢」

序

縄文時代の土器、石器散布地として岐阜県遺跡台帳に記載されている片野糠塚遺跡を含む地区で、糠塚地区土地改良総合整備事業が計画された。そのため遺跡の滅失が懸念される状況となり、工事に先立ち緊急発掘調査を実施することになった。

調査にあたっては、主任調査員として日本考古学協会員大江命氏を委嘱し、多数のかたがたのご協力を得て学術的成果をあげ、発掘調査を完了することができた。しかも住居址内から全国的に数少ない列孔浅鉢が完形で出土したことなどは、飛騨地方の考古学研究発展に役立つ貴重な発見である。

報告書刊行にあたり土地所有者をはじめ、調査に従事、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げますとともに、本書が今後歴史解明に重要な資料となり、文化財保護思想の普及に大きな役割を果たすものと確信するものである。

昭和58年3月

高山市長 平 田 吉 郎

本文目次

序	
例言	
第1章 遺跡の歴史的環境と地形	1
第1節 糠塚遺跡の位置と環境	1
第2節 糠塚遺跡の研究史	3
第3節 糠塚遺跡の地形と地質	6
第2章 発掘の経過	8
第3章 遺構	13
第1節 縄文時代の遺構	13
第2節 歴史時代の遺構	17
第3節 土 壇	39
第4節 B区の遺物包含層と出土状態	45
第5節 その他の遺構	47
第4章 遺物	51
第1節 縄文時代の遺物	51
第2節 弥生時代の遺物	88
第3節 歴史時代の遺物	96
第5章 総括	110

挿 図 目 次

挿図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
2	赤木清の発掘地点を含めた遺跡見取図	2
3	地形と地質模式図	6
4	調査区域の遺構全体位置図	9
5	調査区域グリッド区画図	10
6	A区遺構全体平面図	11
7	C区遺構全体平面図	12
8	第1号住居址(SB1)実測図	14
9	SB1遺物分布図	15
10	第9号住居址(SB09)実測図	16
11	第2号住居址(SB02)実測図	18
12	第3号住居址(SB03)実測図	19
13	第4号住居址(SB04)実測図	20
14	第5号住居址(SB05)実測図	22
15	第6号住居址(SB06)実測図	23
16	第7, 8号住居址(SB07, 08)実測図	25
17	SB07内ピット(P ₁ , P ₂)断面図	26
18	SB07, 08カマド実測図	26
19	第10号住居址(SB10)実測図	27
20	第11号住居址(SB11)実測図	28
21	第12号住居址(SB12)実測図	30
22	第13号住居址(SB13)実測図	31
23	SB13のカマド実測図	32
24	第14号住居址(SB14)実測図	33
25	第15号住居址(SB15)実測図	34
26	第16号住居址(SB16)実測図	35
27	第17号住居址(SB17)実測図	36
28	第1号建物址実測図	37
29	第2号建物址実測図	38
30	第1号土壌(SK01)実測図	39
31	第2号土壌(SK02)実測図	40
32	第3号土壌(SK03)実測図	41
33	第4号土壌(SK04)実測図	42
34	第5号土壌(SK05)実測図	43
35	第6号土壌(SK06)実測図	43
36	第7号土壌(SK07)実測図	44

挿図37 B区遺構全体平面図	44
38 B区の遺物包含層と出土状態	46
39 第1号集石遺構実測図	47
40 第2号集石遺構実測図	48
41 A区の溝状遺構断面図	49
42 C区の溝状遺構実測図	50
43 第1号住居址出土遺物 (小形列孔浅鉢)	58
44 " (土器)	59
45 " (大形列孔浅鉢)	60
46 " (土器)	61
47 " (石器)	62
48 第9号住居址出土遺物 (土器)	65
49 " (石器)	66
50 第2号土壇出土遺物	66
51 " 土層断面図	67
52 第5号土壇・大ビット出土遺物	69
53 大ビット2土層断面図	69
54 一括土器①	70
55 " ②	70
56 遺構外の遺物 (土器)	75
57 "	78
58 "	79
59 "	80
60 "	81
61 "	82
62 "	83
63 遺構外の遺物 (石器)	89
64 "	90
65 "	91
66 "	92
67 "	93
68 "	94
69 "	95
70 歴史時代の遺物	106
71 "	107
72 "	108
73 "	109
74 歴史時代の遺物 (土師)	105
75 " (寛永通寶)	105
図1 スダレ状押型文の原体	73

図版目次

- 図版1 遺跡全景，発掘状態
2 A区全景 “
3 第1号住居址
4 第2～8号住居址
5 第9～13号住居址
6 第13号住居址
第14～17号住居址
第1号建物址
7 第2号建物址
第1～5号土壌
8 第6，7号土壌
B区の遺物包含層
第1，2号集石遺構
9 第3号集石遺構
A区，C区の溝状遺構
C区発掘状況
A区P内出土遺物
10 遺物出土状況
11 第1号住居址出土遺物
12 “
13 第2，5号土壌出土遺物
大ビット出土遺物 一括土器
14 遺構外の遺物（土器）
15 “ （ “ ）
16 “ （石器）
17 “ （ “ ）
18 “ （ “ ）
19 歴史時代の遺物
20 “
21 “
22 “

例 言

1. 本書は、昭和57年4月26日から8月14日まで発掘調査を実施した、岐阜県高山市片野町糠塚地内の糠塚遺跡発掘調査報告書である。
2. 糠塚地区土地改良総合整備事業により、本遺跡が破壊されるため発掘調査を実施したものである。本遺跡発掘調査は、土地改良総合整備事業（一般・糠塚地区）補助金（昭和57年12月10日付 農計第438号の11）文化庁補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金・昭和57年6月17日付 委保第71号）及び岐阜県補助金（岐阜県文化財保護費補助金・昭和57年6月21日付 教文305号）の交付を受けて実施した。
3. 調査は下記の調査団によって実施した。

団 長	高山市長	平田吉郎	事務局	高山市教育委員会
副団長	高山市教育長	長瀬正三		事務局 長 中屋政二
主任調査員	日本考古学協会員	大江 命		社会教育課長 増井淑郎
調 査 員	日本考古学協会員	石原哲弥		文化財係長 小林 浩
	岐阜県考古学会員	寺地茂雄		主 任 田中 彰
	岐阜県考古学会員	藤本健三		
	岐阜県考古学会員	野村宗作		
	岐阜県考古学会員	吉朝則富		
	高山考古学研究会	会 員		
	仏教大学OB	住 寿美子		
	関西大学学生	徳田誠志		

4. 本編の執筆は、大江命、石原哲弥、吉朝則富、藤本健三、徳田誠志が行った。
5. 本編の挿図作成、図版の写真撮影は上出己吉、竹内弘次、岩花秀明、中井良幸、田中彰が行い、遺物の復元及び実測図の拓影の整理は野村宗作、吉朝則富、住寿美子、岩花秀明が行った。
6. 調査にあたり、岐阜県教育委員会文化課、波多野寿勝氏のご指導を得た。
7. 調査にあたって、京都国立博物館考古室長 八賀晋氏の助言、協力を得た。
8. 発掘にご理解とご協力をいただいた地元土地所有者のかた、土地改良組合に深く謝意を表す。（調査協力者）片野長寿会、松倉中学校「野焼の会」、片野土地改良組合
9. 遺構の略号は竪穴住居址をSB、土壌をSKとし、調査順に番号を付けた。挿図中、焼土は地紋で表した。
10. 方位は磁北とした。

第1章 遺跡の歴史的環境と地形

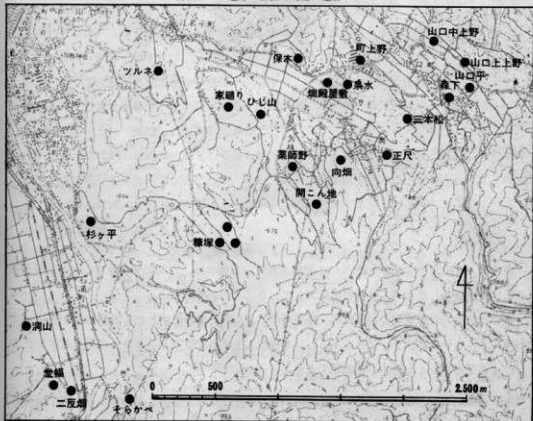
第1節 糠塚遺跡の位置と環境

本道跡は岐阜県高山市片野町字糠塚に所在する。後背の急峻な大西山（俗称、海拔1027m）の山麓で、北西方向にひろがる緩やかな扇状地に位置している。この地域は江名子町と片野町にまたがり、一部に石浦町の飛地も混じっており、「江名子糠塚」、「片野糠塚」と区別しているが、一般にはただ「糠塚」と呼称されている。

糠塚のはば中央に「牛方道」と呼ばれる古くからの道があり、急坂の大西峠を越えて、大野郡久々野町大西へと通じている。

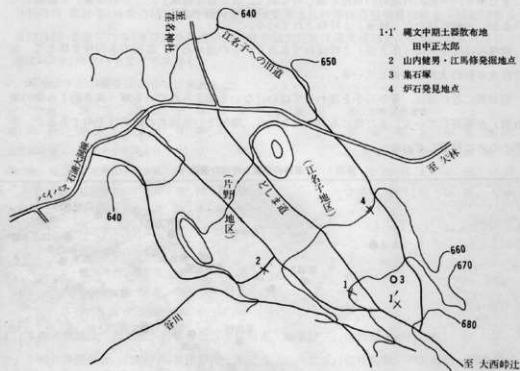
扇頂部に近い畑に、昔から手を加わえてはいけないと伝えられている塚（高さ約1m強の集石墳）が現存している。まだ他にもあったという。糠塚という地名の由来は不明であるが、参考のために付記しておく。

挿図1 遺跡の位置と周辺の遺跡



遺跡への道は、高山市南部の石浦町区内で、国道41号線から国道158号線につなぐバイパス（石浦・大洞線）を東に入り、坂口地内から丘陵地帯にさしかかる坂道を進むと、急に眼前の景色が開ける平坦地に至る。このあたり一帯が糠塚である。約100haの広い畑地の牧歌的な景勝地で、東方には笠ヶ岳を中心に北アルプスが望まれる。道路はやがて下り坂となり、江名子町矢欠林へと通じる。

挿図2 赤木清の発掘地点を含めた遺跡見取図



(註1)
赤木清の「江名子糠塚の土器(一)」に記載されている地点は、当時の発掘地点の説明を手がかりに現地調査をした結果、片野町に位置していることが判明した。
(註2)

大西山を含めた分水嶺の山麓には、江名子町、山口町、塩屋町にわたる丘陵地帯が発達しており、「江名子ひじ山」(註3)、「ツルネ」(註4)、「薬師野」(註5)を始め26箇所という多くの先史遺跡が分布し、「遺跡の丘」ともいべき地域である。

(註1) 赤木清「江名子糠塚の土器(一)」ひだびと3の3昭和10年。

赤木清は、江馬修のペンネームである。

(註2) 上記の論文で、発掘地点と遺物出土の状況の文章を實際にたどり、文章中の中西(中谷が正しい)安右衛門氏の持増を確認し、子孫の方の聞き伝えより発掘地点が判明した。

(註3) 山内清男「江名子ひち山の土器について」飛騨考古学会々報2の1 昭和9年

森本六郎「江名子ひち山土器の問題其一」石鏡2の3 昭和9年

赤木清「江名子ひち山の石器時代遺跡(1)~(8) ひだびと4の4~5の3 昭和11年~12年

(註4) 高山市教育委員会「ツルネ遺跡発掘調査報告書」昭和54年

(註5) 高山市教育委員会「薬師野遺跡発掘調査報告書」昭和56年

第2節 糠塚遺跡の研究史

糠塚遺跡は飛騨における最初の縄文土器発見の遺跡として著名である。高山市出身の田中正太郎は明治23年(1890年)4月19日に、糠塚を通り大西峠を越えたとき、峠の辻で石鏡3個を採集した。^(註1) 前年に益田郡萩原町尾崎で石器を採集し(飛騨における遺跡の初発見)、遺跡の立地条件をのべている彼は、帰路、山麓の糠塚に遺跡の存在を予想して探索し遺物を発見。その後、何回か発掘を試み遺物散布の面積が広大なることから、太古は盛大な集落があったのではと想像するに至った。^(註2)

同年10月には、この発見を東京人類学雑誌6巻55号に「飛騨国ノ貝塚土器」と題して報告している。その一節を引用すれば、

「(前略)屢々発掘ヲ試ミ種々ノ遺物ヲ採集セリ、中ニ就テ余ノ最モ注意ヲ引キシモノハ、実ニ数百片ノ貝塚土器ニテアリシ……(中略)……此価値アル貝塚土器ノ飛騨国ヨリ発見セシハ実ニ之レ嗚矢ニシテ……(後略)」と記してある。

飛騨は江戸時代から石器出土地として知られていたが、石器、土器の遺物と使用した人々の生活を関係づけた論考として注目される。また、20歳の青年田中正太郎の発見の喜びと、遺物に対する詳細な記述にその力量が伺えるのである。

採集遺物は次のように記載してある。

打製石器 石鏡50余、石錐5、天狗飯ヒ2、石鎌1、粘板岩製の石斧10余

黒曜石凡100片

磨製石器 石斧2折半、石斧砥2、扁円石3片、白石ノ有孔小石器、石器ヲ

磨キタル如キ痕アル砂岩1

土器 祝部土器、貝塚土器、朝鮮土器、各数百片

また、石器16点と土器9点のスケッチ図版に説明を加えている。土器のスケッチは隆線の渦巻紋様で縄文中期の遺物と推定できる。1地点だけの採集ではないが、前述の「江名子糠塚の

遺物⁽¹⁾では、田中正太郎の採集遺物を中期土器としてその地点を扇頂部付近と推定してある。広大な遺跡であるが現在の知見でも、今回の工事区域外の柳手茂太郎氏所有の畑を中心として縄文中期の遺物包含地を確認している。

田中正太郎は明治28年に、アイヌ研究を志して上京したが、かつての高山中学校（斐太中学校の前身）時代の恩師大野延太郎（雲外）宅に寄宿して、東京大学理学部人類学教室の雇員となった。坪井正五郎門下生として、「日本石器時代人民遺物発見地名表・第一版」の編集に林若吉とともにあたった。飛騨での151箇所の発見地点の殆んどは彼の調査によるものであった。

^(註3)
翌29年押上森蔵の關係で台湾に渡り、公務のかたわら人類学探究に努めたが病で帰国し、32年10月に29歳で死去した。東京人類学雑誌によせた最後の論文が「飛騨の石冠について」14巻156号 明治32.3であり、10年間に約20篇の論考を遺している。青春の情熱を人類学・考古学に注いだ飛騨における先覚者である。

糠塚遺跡はその後、40余年間、とくに研究の対象とされることなく経過した。

再び糠塚遺跡が着目されたのは、昭和8年8月、山内健男（山内清男の弟）による糠塚での発掘が契機となった。その年の秋、当時縄文土器編年研究の推進者であった山内清男は、江馬修に発掘土器が諸磯式類似であることを指摘し、厚手式以前の土器解明を要望した。^(註4)

昭和9年8月には八幡一郎が来飛、学会への報告をすすめた。

江馬修は9年秋、前年に山内健男が発掘した地点をさらに東側へ7 尺ばかり拉げて発掘し、多くの遺物を得て古式縄文土器の編年研究を進めた。10年には「江名子糠塚の土器⁽¹⁾」（ひだびと3巻の3）のはしがきて、

「（前略）かくて私は、飛騨に於ける糠塚及びその系統に属する土器は、一面に於いて関東諸磯的であるが、それにも増して河内国府式に近似しており、同時にそれ自身かなりの程度に地方的な特殊性をもったもの、つまり糠塚式土器とも称すべき一形式を構成するものであるという見解に達した。（後略）」と書いている。

江馬修はその編集による雑誌「ひだびと」（「会報」、 「石冠」の改題）によって、飛騨の縄文早期、前期、中期、後期、及び弥生土器の編年及びその研究成果を発表した。

飛騨考古学協会編集の「飛騨石器時代地名表」昭和10年3月（遺跡327箇所）では、次のように記載されている。

糠塚 縄文式土器、弥生式土器
石錐、石錘、打製石斧、磨製石斧、環状石斧、石鎗、石匙
石鎌、石錘、石皿、凹石、管玉、曲玉、紡錘状有孔石器

昭和12年には「考古学遺物と用途の問題」（ひだびと5巻9号）という論文を発表し、当時の土器編年偏重を批判している。「（前略）住居址によってはその型式のみならず、更に家族

と聚落の状態を追及し、土器や石器類のような生産用具に於いては、その用途一性質と機能を探究することによって、私たちの目的へ肉薄しなければならぬ(後略)」これに答えた八幡一郎の「先史遺物用途の問題」と題する論文等は、「ひだびと」論争として日本考古学史に位置づけられている。^(註5)

昭和14年の「飛騨石器時代に於ける糠塚式文化の研究1」(ひだびと7巻4号)では「大規模な発掘をしなかったので、住居址などには全然触れられなかった。これなど今後の調査で特に集中的に試みねばならぬ重要な操作であること、言うを俟たない」、また、「徹底した研究を纏める日は、おそらく私の生涯には期待し得ないかも知れない」という一文がある。当時彼は「山の民」の著述に没頭していた。

「ひだびと」は出版物統制のため、昭和19年5月廃刊となり、江馬修は遺物を知人に託して上京し、考古学研究から遠ざかった。

大野政雄は戦後昭和26年、吉城郡国府町村山で住居址一基を発掘した。県下で最初の竪穴式住居址の発見であった。糠塚式土器と同時代の縄文前期を主体とする遺物で、約一万点の土器片と石器約200点が出土した。山内清男(東京大学人類学教室)の指導を得て、報告書「村山遺跡」(昭和35年)を刊行した。^(註6)かつて山内健男が糠塚で発掘した土器片のうち、13点が図版で紹介されている。

また、大野政雄は江馬修の糠塚式土器の研究を受け継ぎ、徹底した実証と精緻な土器編年研究を進めた。それは、現在も飛騨地方のみならず、全国的な縄文前期研究の重要な文献となっている。とくに東西両系文化の交流について、関西系と関東系の土器が8:2の比率になっていることを明らかにした。

明治23年の田中正太郎による糠塚遺跡発見の文献が、46年後の昭和8年、山内健男の発掘につながり、東京大学人類学教室の新進の学者、山内清男の指摘が、江馬修の糠塚式土器の編年設定へと進んだ。戦後、山内清男の指導を受けた大野政雄の糠塚式土器の精緻な研究で、さらに視点が拡大されたという学問発展のつながりをたどることができる。

今回の発掘は、こうした先学のすばらしい研究を生みだした糠塚遺跡を対象としたものであり、山内、江馬両氏による昭和初期の発掘地点もおぼろとなった半世紀あとの発掘調査であることを深く銘記しておきたい。

(註1) 田中正太郎「飛騨石器」東京人類学雑誌第4巻37号 明治22年3月

(註2) 田中正太郎「山中発見ノ石器」東京人類学雑誌 第9巻95号 明治27年2月

朝戸高山「田中探古生」新飛州第7号 明治33年10月

大野雲外「余が飛騨に関係ある理由とその歴史」飛騨史壇第1号 大正3年8月

(註3) 陸軍中将、退官後郷土史研究に従い、岡村利平と共に飛騨史壇会を結成する。

明治21年に東京人類学会に入会している。その後、日本歴史地理学会、日本考古学会の会員であった。

「金森氏論考」「飛騨国分寺関係研究」の著者や論考「紙魚のやどり」検訂がある。昭和2年1月没。

(註4) 赤木清「江名子糠塚の土跡(一)」ひだびと3巻の3号 昭和10年3月

(註5) 甲野 勇「遺物用途問題と編年」ひだびと5巻の11 昭和12年11月

八幡一郎「先史遺物用途の問題」ひだびと6巻の1 昭和13年1月

大塚初重「日本考古学を学ぶ(1)」有斐閣選書 昭和53年

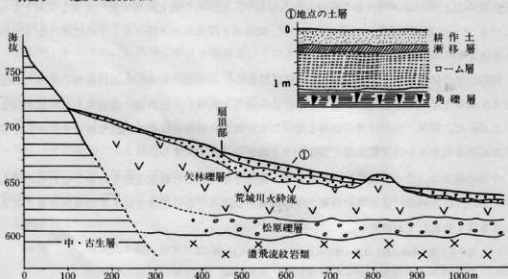
(註6) 塩屋雅夫「村山遺跡」昭和35年11月

大野政雄

第3節 糠塚遺跡の地形と地質

高山盆地南部の分水嶺山麓には、分水嶺の形成に関係する江名子断層（活断層）^(註1)が、石浦町飯山付近から塩屋町にかけて走っている。この断層北側の江名子町、山口町一帯には、丘陵地形が発達している。盆地沖積面から比高約60~70mの定高性をもち、丘陵の高位面は荒城川火砕流と呼ばれる溶結凝灰岩からなっている。その周辺には粘土層をはさむ矢林礫層と呼ばれる^(註2)崖錐性の礫層からなる中位面の段丘が発達し、いづれも厚い火山灰土に覆われており、野菜を中心とする耕作地となっている。多くの遺跡は中位面に分布している。

挿図3 地形と地質模式図



糠塚地域は高位面、中位面の地形を開折した谷に、後背の山地から供給された崖錐性の堆積物による小規模な扇状地形である。扇頂部の高度約680m、扇端部までの距離が約700mで高度差約40m、平均傾斜約1000分の57である。

地表面から下部へは、黒褐色の耕作土、漸移層、粘土質の黄褐色の火山灰層、火山灰土に混じった崖錐性角礫層、粘土層をささむ矢林礫層、基底部は荒城川火砕流（両輝石安山岩質溶結凝灰岩）となっている。

火山灰層は町方ローム層で、高位面と中位面に分布している高山軽石層は見られない。江名子薬師野遺跡の地形面^(註3)に対比できる。糠塚地域でも谷川に近いB地区には火山灰層はなく沖積層である。

扇頂部に近いほど、表土も火山灰層もうすい。扇尖部付近より扇端部にかけては表土も火山灰層も厚くなっている。二ヶ所の小丘は荒城川火砕流と、矢林礫層の残丘である。なおC地区で頭を出していたチャートの露岩は、後背山地から押出された巨礫である。 (石原)

(註1)「江名子断層」鹿野勤次 岐阜県地学教育15号 昭和54年

(註2)「高山市付近の第4系」梶田豊雄、石原哲弥、地質学論集14号 昭和52年2月

(註3)「薬師野遺跡」地形と地質 高山市教育委員会 昭和56年

第2章 発掘の経過

昭和54年、埋蔵文化財包蔵地糖塚遺跡を含む糖塚地区の土地改良総合整備事業が計画された。遺跡の破壊を懸念した市教育委員会は、関係機関と協議を重ね、54年4月29、30日の2日間にわたり高山考古学研究会の協力を得て予備調査を実施。その結果、縄文式土器、須恵器等の破片、石器などの遺物が確認され、発掘調査の必要な範囲が定められた。土地改良事業は5年計画で進められるため、遺跡を含む部分の施工に合わせて57年度に発掘調査を実施することになった。

昭和57年4月26日、現地において鍬入れ式を行い、発掘調査に着手。8月14日に現地調査を完了し引き続いて報告書作成作業に入る。

調査方法は遺跡をA、B、Cの3区に分け、4mグリッドを設定。表土除去、床土排除、遺構検出、遺構実測、写真撮影の順で作業を進めた。表土が20~30cmと薄いためセクションベルトは表土から残し、住居址の中央に位置するようにした。以下、調査日誌により調査経過の概要を記する。

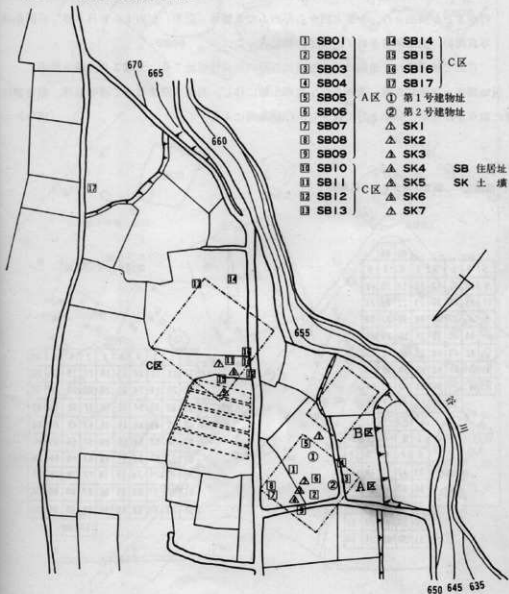
(A区) 4月26日 クイ打、表土除去作業開始。5月12日 表土除去完了、床土排除開始。34~37、41~45グリッドは表土からロームまで50cm以上で、攪乱されていて土質変化をつかむのが難しい。5月25日 第1号住居址から遺構検出作業開始。5月27日午後4時 第1号住居址から列孔浅鉢(無文)が底部を上完形で出土。5月28日午前9時 第1号住居址のセクションベルトから半截竹管で文様を施した列孔浅鉢(完形品)出土。調査員一同調査の前途に大きな期待を持つ。6月4日 第2号住居址の掘り込み東壁のピットから内容物の残る土師器出土。6月7日~ 第3号~第9号住居址の検出作業を進める。6月9日 第4号住居址の掘り込みの外から異形部分磨製石器出土。6月18日 第6号住居址は、一辺6.4mの方形住居址と確認する。7月13日 A区全域のあぜ除去開始。7月16日 第2号土壌の検出中、最下層の茶褐色土層から楕円押型文土器、チャート製スクレーパーが出土。7月23日 A区全域のあぜ除去が完了し、全体写真撮影完了。掘立柱の建物址2基を確認。7月26日 遺構の実測を終え、かまど等の検討開始。

A区で検出された遺構は、縄文前期の竪穴住居址2基、古墳時代以降の竪穴住居址7基、建物址2基、土壇4基、溝1箇所、集石遺構2基。かまどが良く残っていたのは第7号、第8号住居址であった。

(B区) 4月27日 クイ打、表土除去作業開始。ロームの堆積が弱く表土に礫が混じり苦

勞する。5月12日 表土除去を完了したが、遺構らしきプランは検出されず、B区中央部に土質変化が見られた。6月4日 B区の地形、土層を検討。7月15日 B区中央に南北、東西方向の幅1mのトレンチを入れ、土層の検討開始。押型文土器が出土。8月10日 セクションベルトを取り去り、検出を進めたが住居址は確認されなかった。押型文土器を始め、縄文時代の土器、石器が出土。

挿図4 調査区域の遺構全体位置図



B区で検出された遺構は、不明遺構1箇所のみであった。

(C区) 5月13日 表土除去開始。近年の耕作により、地山ローム層まで深耕農機が達している。C区東側はローム層が薄く、礫層混じりのローム層となっていた。6月26日 表土除去、床土排除を完了し遺構検出開始。表土除去の段階では、土師器、須恵器がほとんどで、縄文土器は少数。住居址覆土の上に厚いロームの攪乱層があり、プラン検出に苦勞する。7月1日 第10号住居址の検出開始。続いて第1号～第16号住居址の検出作業を行った。7月12日 第14号住居址から鉄器(刀子)出土。8月7日 第13号住居址から複式のかまどが検出され、かまど内から杯のふた2個体(完形)が出土。8月9日 C区全体写真撮影、遺構測量を終了、補足作業に入った。

C区で検出された遺構は、古墳時代以降の竪穴住居7基、土壇3基、溝2箇所。

現地調査が完了した後、遺物を高山市郷土館に移し、当館2階事務室で遺物整理、報告書作成に取りかかった。58年2月に校了し、印刷準備に入る。

(田中)

挿図5 調査区域グリッド区画図

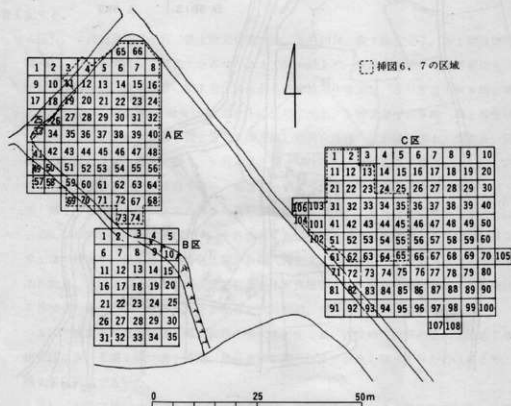
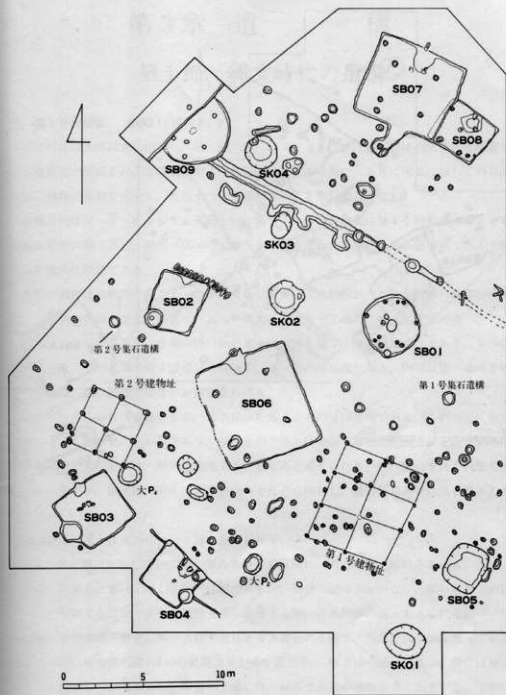
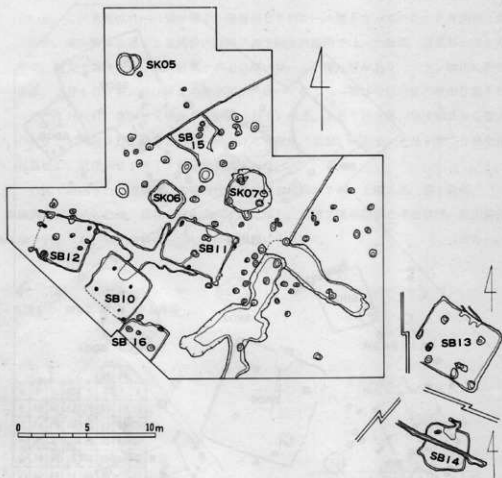


插图6 A区遗址整体平面图



挿図7 C区遺構全体平面図



第3章 遺 構

第1節 縄文時代の遺構

1. 第1号住居址 SBO1(挿図8.9)

本住居址はA区の東に位置し、30、31、38、39グリッドにかけて住居址のプランと推定される土層変化が確認され、この覆土中より遺物の出土がみられた。さらに床面に接して列孔浅鉢土器二個体が完形で出土し、注目すべき遺構であることが認識された。

主軸方向はN-5°-Eを示す。東西3.5m、南北4mのやや南北に偏する円形のプランを有し、南側は矩形に張り出し、径85×65cmの大ピットが存在する。黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

北及び西側は比較的明瞭であったが、東及び南壁は土地の傾斜のためか壁面の輪郭が明確でない。遺構の基盤となる黄褐色ロームへの掘り込みは5~7cmで、や、西壁部が深い。

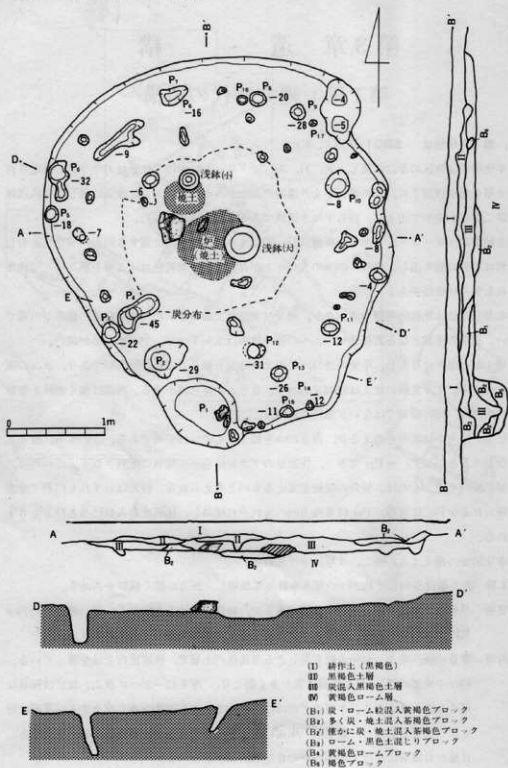
焼土が2箇所存在し、中央の径71cmの焼土は床面を掘りくぼめた地床炉であり、5cmの灰層を有する。すぐ北隣の焼土は径34×41cmで、ロームの棒状塊が残る。内部は強く赤味を帯びる。床面は、特に顕著ではないが識別され得る。

ピットは大小48箇所を数えるが、深さ10cmを超えるものは16箇所である。このうち、柱穴とみなしうるものはP₂~P₁₃であり、住居址のプランに沿って環状に配列される。この外に、壁面に接して並ぶものは、竪穴の壁面を支えるものと考えられる。柱穴はいずれも円形で垂直に掘られるがP₄は南西、P₁₂は東南方向へそれぞれ傾斜し、住居址の入口に当る柱とも考えられる。

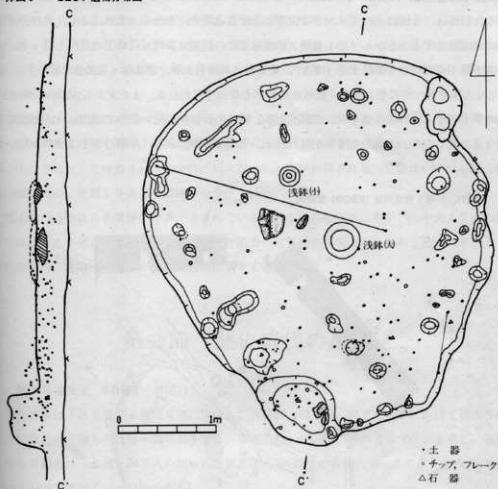
本住居址の覆土は次の様に、3層に分けられる。

- I層 表土層は平均して約20cmの厚みを持って堆積し、西方に緩く傾斜をみせる。
- II層 黒褐色土層はI層からの漸移層であるが、耕作の受け方が少なく、厚い部分で約10cm欠陥する部分もある。遺物を多く含有するが、近世陶器の混入もみられる。
- III層 多量の灰、焼土、ローム粒を混じえる黒褐色の土層で、住居址内全域を覆っている。特に中央部の径1.6mの範囲は炭が多く混じり、厚さ15~20cmに及ぶ。炭には棒状に残るものが多くある。本層の上部には、破片であるが遺物を多く出土する。下部に行くにつれて量を減じ、最下部の床面に接する部分で2個の完形列孔浅鉢を包含する。II層からIII層にかけて10cm内外の自然礫25個が散在する。

挿図8 第1号住居址(SBO1)実測図



挿図9 SBO1 遺物分布図



覆土中の遺物は（挿図8 土層断面C-C'、挿図9）Ⅱ層からⅢ層上部にかけて集中し、Ⅲ層下部から床面にかけては完形浅鉢2を除いては見るべきものはない。ただ削片（チップ）が床面近く、あるいはピット内に顕著に見られた事と、それらの加工台と思われる方形の白石1が床面上に置かれていた。

大形列孔浅鉢は黒褐色の炭混じり層内に完全に覆われ、底部は地床炉に半分かかって床面に接着し、ほぼ水平に置かれた状態であった。土器内部にも炭塊と黒褐色土が詰まり、土圧でひび割れを生じていたが、欠損部はほぼ皆無であった。

小形列孔浅鉢は前者の北方80cmの焼土部分上位に、底を上にして僅かに傾斜して出土した。表層下26cm、土器の下はすぐ焼土であり、約3cm床面をくぼめた地床炉となる。

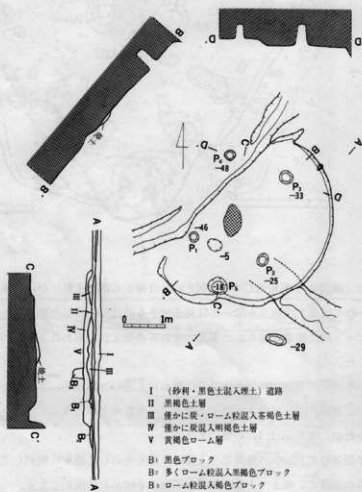
Piは、床面からの深さ31cmで内部に2個の自然礫を見る。土器片、チップを多く含み、Ⅲ層の黒褐色土下に焼土と褐色の粘質土の層がある。

2. 第9号住居址 SBO9 (挿図10)

本住居址は、A区11・12グリッドに位置し、新農道部分にあたる。文献による江馬修発掘地点にはは該当することから(第1章第2節糠塚遺跡の研究史参照)、道路下の発掘を行った。

第I層・砂利混じり黒色土層(埋土)、第II層・黒褐色土層、第III層・茶褐色土層の下に、炭混じりの第IV層・明褐色土層が、住居址の輪郭となって現われる。また東から巾80cm、深さ17cmのV字溝が、住居址の壁を破って西へ走る。道路の西側縁に近い部分で地山ロームが段をなして急に低くなり、人為的な攪乱が伺われる。先の文献中にある「草路の左手はやや小高い麦

挿図10 第9号住居址(SBO9)実測図



畑、右手は一尺も掘り下げられた大根畑」の表現がこれにあたるものと思われ、旧農道の西側縁であろう。江馬修の調査の痕跡と思われる土層の攪乱部分が、この線に沿って、巾30cmで南北に通っている。また、「巾3～4尺」、「長さ7尺」を掘ったという記述通りには確認されなかったが、200点以上の遺物を検出している点により住居址の覆土に該当する部分を発掘したと考えられる。

本住居址は、直径約4.5mの円形プランを有する竪穴住居址で、その3分の1あまりを失うが、20～30cmの垂直の壁を有し、床面の硬化も認められた。主柱穴4箇所と、南壁部にビット1箇所（入口方向か）が検出され、中央に、40×78cmの地床が残される。主柱はいずれも深く垂直に掘られる。東西より南北の間隔がやや広い。

覆土中の遺物は、第Ⅳ層中に多く含まれているが、本住居址東側に集中し、中央より西の部分ではほとんど見られなかった事は、やはり過去の江馬修の発掘によるものと思われる。

須恵器片1を除くすべてが、縄文前期に属する遺物である。

第2節 歴史時代の遺構

1. 第2号住居址 SBO2 (挿図11)

本住居址はA区を横切る農道東側に位置し、A区27、28、34、35グリッドにかけて検出された。住居址の主軸方向はN-24°Eを示す。東西3.1m×南北3.5mの方形プランを有し、基盤となる黄褐色ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。周壁の黄褐色ロームの掘り込みは、東壁で20～34cm、西壁で10～21cmを測る。

北壁のほぼ中央部にカマドの痕跡が認められた。その焼土及び炭片が約70×40cmの範囲に見られた。また、住居址北面の地山面まで近代農業の機械力である耕作機（プラウ）によって掘り反され、数条の溝が南北に走っていた。

カマドの焚口前の床面は僅かに硬化し、周辺部へ行くほど軟弱になり、P₁には貼床が検出された。

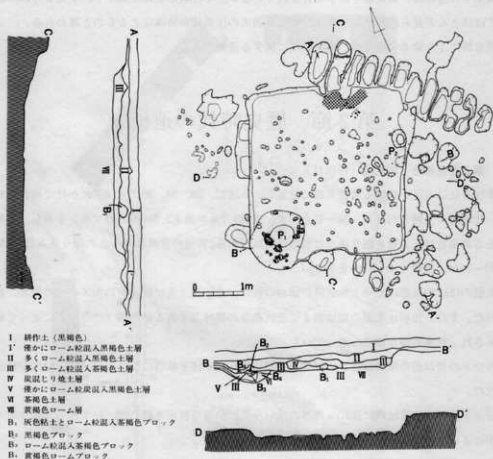
ビットは、本住居址内に径10cm内外の浅い小孔が84箇所検出されたが、いずれもゴボウ等の耕作によるものであった。柱穴は確認し得なかった。

P₁は本住居址の西南隅にあり、東西1.18m×南北1.22mのスリバチ状をなし、一部にブロック状のローム塊が残る。P₁内からは礫、炭片とともに縄文前期の土器片が出土し、時期の異なるビットに貼床を行ったことが知られた。本住居址の外側にも多数のビット状の遺構が存在するが、その性格は明確でない。

本住居址の覆土は3層に分けられる。第I層は黒褐色表土層（約20cm）、第II層は少しローム粒が混入する黒褐色土層（平均18cm）、第III層は多くローム粒が混入する茶褐色土層（平均16cm）と、下部に行く程ロームを混じえる度合いが強い。III層上部には径1m範囲の焼土が厚さ15cmの層をなして残り、また多量の礫がIII層上部に集中して114個存在する。多量の礫は、住居址が廃棄された後に投入されたものと考えられる。

覆土中の遺物はII層内に縄文前期の土器を多く含み、III層、床面上にまでも検出される。本住居址に属すると思われる遺物は、カマド内部とP₂から出土した須恵器片、土師器片の合計11点にすぎない。

挿図11 第2号住居址(SB02) 実測図



2. 第3号住居址 SBO3 (挿図12)

本住居址はA区南側中央に位置し、51, 58, 59グリッドにかかる。主軸方向はN-37°-Wを示し、東西3.8m×南北3.5mの方形プランを有する。南西に傾斜をもつ黄褐色ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。

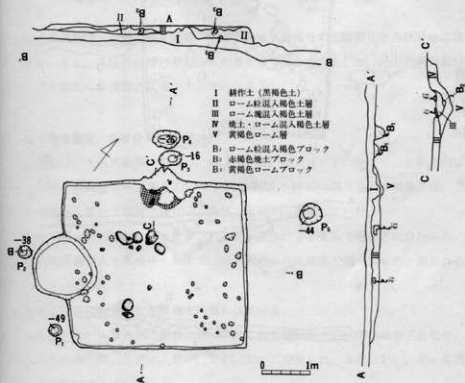
周壁は、東壁で34~36cm、西壁で5~7cm遺存し、西壁中央部には皿状にくぼんだ部分があり、よく踏み固められている点より出入口であったと考えられる。

カマドは、北壁のほぼ中央に、その痕跡としての焼土と灰層をとどめるのみで、本体は欠失している。焚口部に浅いピットが確認された。また、北壁部に構築されているカマドに使用された、凝灰岩の15~40cm大の礫が6個床面に散在していた。

床面は全般にわたって硬化面が見られ、その床面に不規則に径10cm内外の小孔が53箇所検出されたが、柱穴と思われるものは確認されなかった。本住居址外に遺存するP₃、P₄、P₅のピットは縄文時代のもので推定されるが、P₁、P₂の性格は不明である。

本住居址の覆土は3層に分けられる。I層は黒褐色の表土層(15~21cm)、II層はローム粒が混入する褐色土層(9~31cm)、III層は多量のローム塊を含む褐色土層である。

挿図12 第3号住居址(SBO3)実測図



かり、主軸方向はN-42°Eである。東西3.06m×南北2.89mの隅丸方形プランを有する竪穴住居址である。

南方への緩い傾斜地に、黄褐色ローム層を掘り込んで構築されているが、近年まで農道が本住居址を横断していたため、ローム基盤に達する車輛の轍痕が残る。

周壁は、北壁部で20~22cm遺存しているが、南壁は明確でない。周溝は、北壁西半部から西壁にかけて僅かに観察される。

カマドは北壁中央よりやや東よりに位置し、広い範囲に焼土が流れている。また、その焼土範囲にはカマド本体に使用したと思われる7個の礫(13cm~35cm)と42cm×35cmの両輝石安山岩質溶結凝灰岩(俗称ドベ石)、焼けた粘土の塊が散在する。7個の礫のうち2個は75cm離れているが接合して長円形の礫となる。

床面は不明瞭で、部分的に貼床の痕跡が残る。

柱穴は、北東隅の深さ30cmのP₁と、これに対応する形で他の3隅に10~12cmの浅いピット(P₂~P₄)が存在する。東壁中央沿いに見られたP₆は、本住居址内側部分をローム混じり黒褐色の貼床で覆われている(挿図13 土層断面A-A', D-D'参照)が、他半分の褐色粘質土より、鋏形鏝、半月形スクレパーを出土し、縄文早期のピットであることが確認された。

本住居址の覆土は、攪乱、混入が顕著で、褐色土、黒色土、黄褐色ロームブロックが複雑に堆積する。

覆土中の遺物は、少量の縄文早期~前期を除く2個体分の土師器片が本住居址に該当するものである。なお、本住居址外の東方1mの表土層下部から出土した、完形の異形部分磨製石器はP₂より出土した遺物と関連がうかがわれよう。

4. 第5号住居址 SBO5 (挿図14)

本住居址は、A区東南隅に位置し、63, 64, 67, 68グリッドにかかり、主軸方向は、N-25°Eを示す。黄褐色ローム層を2.6×2.6mの範囲で約10cm掘り込んで構築され、この部分にII層の茶褐色土層がブロック状ロームを混じえながら堆積していた。

周壁はI層中にあったものと推測されるが、耕作による攪乱で確認されなかった。従って、該当期の生活面である黒褐色土が床面に踏み固められた状態で残ったものと思われる。焼土は検出されていない。

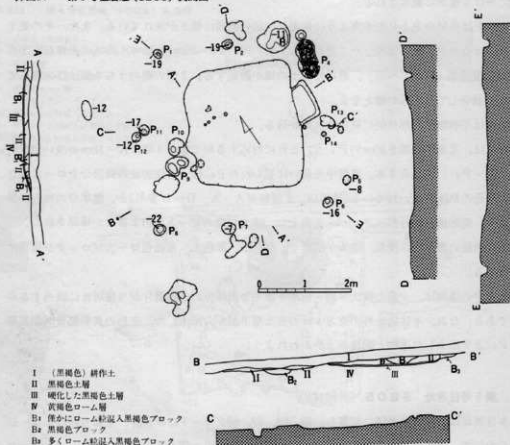
床面は、全体に硬化した黒褐色土に覆われている。

ピットは、ローム掘り込み部外において、これを囲む形で約20箇所検出されたが、柱穴と推定されるものは、P₁、P₂、P₆、P₈、P₁₁が見られ、また、P₇、P₁₆も浅いが、この柱穴の配列に添っている。

東側の長方形の土境及び礎入りピットは、後世のものである。

覆土中の遺物の中で、II層より出土した台付片口鉢1個体、及び土師器1点が、本住居址の時代を位置付けるものである。この外、覆土中に少量の縄文時代の遺物もみられる。

挿図14 第5号住居址 (SB05) 実測図

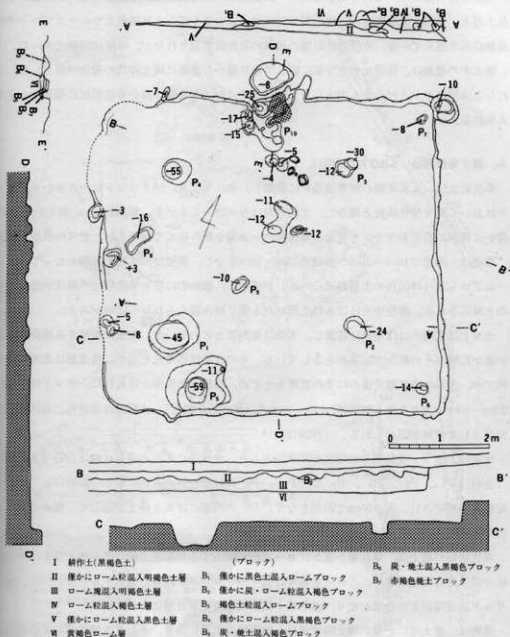


5. 第6号住居址 SB06 (挿図15)

本住居址はA区の中央に位置し、36, 37, 44, 45, 52, 53グリッドにかけて検出された。主軸方向はN-20°-Eを示し、東西6.6×南北6.4mのほぼ方形のプランを有する。本遺跡の住居址の中で最大のプランで、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は、東壁45cm~48cmで西壁は多くが失われ、部分的に5cm程の立ち上りが見られる。カマドは北壁のほぼ中央に構築され、焼化粘土及び焼土が残るが遺存状態は悪く、原形は確認できない。

挿図15 第6号住居址(SB06)実測図



床面は、本住居址東側で比較的硬化面がみられたが、西側は凹凸が激しく、貼床の痕跡がみられる。先行する時代の遺構が存在した可能性があり、僅かに柱穴の配列と思われるピットが残る。

主柱は4本で、P₁は径99cm、P₄も59cmの径を持ち、P₂、P₃と比較して著しく大形である。P₆とP₇は支柱であろう。

本住居址の覆土は、東側で第Ⅱ層のローム粒混じり黒褐色土層、第Ⅲ層のローム粒混じり黒色土層と、整然と堆積するが、他の部分ではロームの多く混じる黄褐色土やロームブロックが複雑に入り組んでいる。本住居址以後の遺構の存在は想定されたが、確認は困難であった。

覆土中の遺物は、住居址の東半部に偏して第Ⅱ層から多量に縄文時代の遺物が出土した。これらとは別にカマド付近から出土した土師器片9点と、須恵器3点が本住居址に帰属すると考えられる。

6. 第7号住居址 SBO7 (挿図16, 17, 18)

本住居址は、A区北側の新農道沿いに位置し、6, 7, 8, 66グリッドにかかる。8グリッドにおいて第8号住居址と複合し、主軸方向はN-25°-Eを示す。東西5.8m×南北4.95mの僅かに横長の長方形プランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は、南壁で18cm~21cm、西壁で15cm~18cmをなし、東壁は、性格が問題となっていたロームブロック(挿図16の土層断面G-G')が遺存し、最終的に第8号住居址の貼床が乱れたものと推定される。南壁中央には入口と思われる硬く踏み固められたくぼ地がある。

カマドは北壁のほぼ中央に位置し、本体は原形をとどめないが、北壁に接触する部分に粘土が僅かに残りその断面がU字形をなしている。その表面は赤褐色を示す。煙道部は北方に長さ約50cm、巾15cmの状態が僅かにその痕跡をとどめ、内部は赤色面が見られた。カマド付近には、23cm~30cmの大きな礫3個の外、8cm~15cmの12個の石が散在し、大部分は赤褐色に焼けていて、使用された痕跡が認められる。(挿図18)

床面は、カマド焚口部分の硬化が顕著にみられ、全体的に床面の遺存状態は良好であった。

主柱はP₁、P₂、P₃、P₄で、P₃、P₄には石が詰められている(挿図17)。P₅は貯蔵穴と推定され、深さ50cmで円形をなす。P₇の内部には炭と焼土が混じり、極めて硬いものであった。

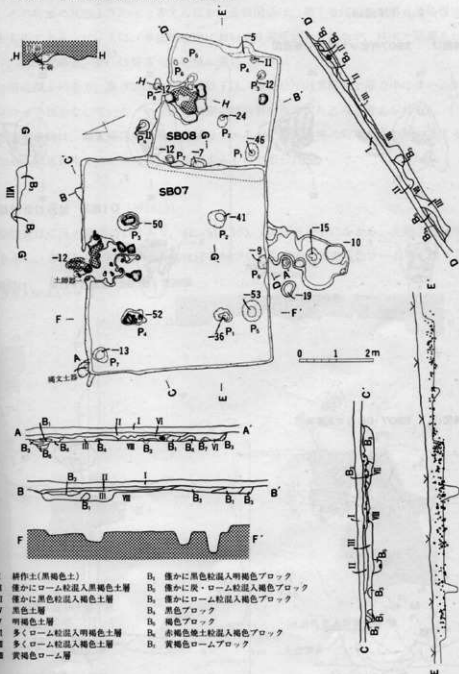
本住居址の覆土は、第Ⅱ層が僅かにローム粒が混入する黒褐色土層、第Ⅲ層が僅かにローム粒が混入する褐色土層で、これらを基本に種々のブロックが複雑に混入する。また、7, 8グリッドの北端部を旧農道が走り、礫を敷き詰めた部分が第Ⅱ層にある。

遺物は、覆土中に多量の縄文時代遺物と弥生時代土器片少量、そして3個体分の土師器片、須恵器片9点、鉄器1点が検出された。

7. 第8号住居址 SBO8 (挿図16, 18)

本住居址は、A区北側に位置し、第7号住居址と複合している。7, 8, 15, 16グリッドにおいて検出され、主軸方向はN-37°-Eを示す。東西3.6×南北2.8mの横に長い長方形プラン

博図16 第7・8号住居址(SB07・08)実測図



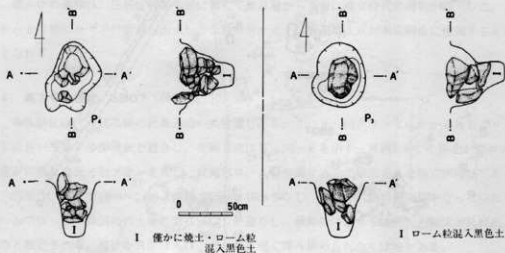
を有し、黄褐色ローム層を約25cm掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は、東壁で25~27cm、南壁で15~27cmで、西壁は検出されなかった。

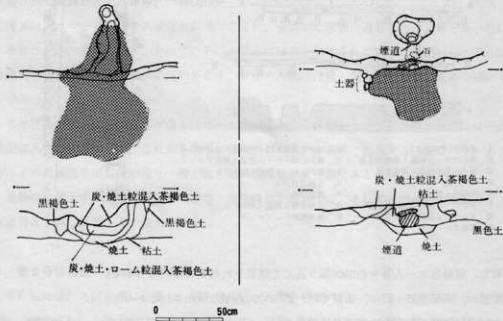
カマドは北壁の中央やや東寄りに構築され、八の字に開く掘部や、焚口ピット、煙道等、比

較的よく原形をとどめている。煙道の天井は2個の平石で覆っており、約20cmで外のピットに連結している。(挿図18)

挿図17 SB07内ピット(P₁, P₂)断面図



挿図18 SB07・08カマド実測図



第8号住居址と第7号住居址の複合する部分に黄褐色ロームがブロック状に伸びている。これは、その断面の状態より貼床と考えられる。先後関係は、第7号住居址が第8号住居址に先行するものである。ピットは、本住居址内において9箇所認められたが、柱穴と認識されるのはP₁、P₇である。P₁は貯蔵穴の性格が強い。

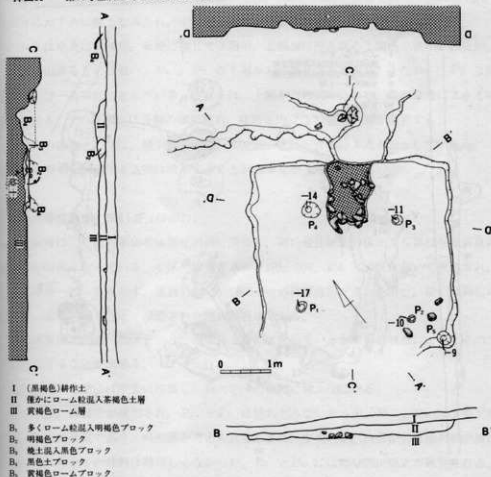
本住居址覆土の中で、厚さ20cmの第I層以下は、礫混じりの黒褐色土層の中にロームが混じり、ブロック状をなしている。いずれも東側の傾斜面からの流れ込みと考えられる。

覆土中の遺物は、縄文時代のものが大部分であるが、把手付碗の破片1点を始めとする土師器片20点、須恵器片1点が本住居址に所属するものと思われる。

8. 第10号住居址 SB10 (挿図19)

本住居址はC区の農道沿いにあり、41, 51, 101, 102グリッドにかかる。主軸方向はN-36°-Eを示し、東西4.1m×南北3.8mのほぼ方形プランを有する。黄褐色ローム層を掘り込んで

挿図19 第10号住居址 (SB10) 実測図



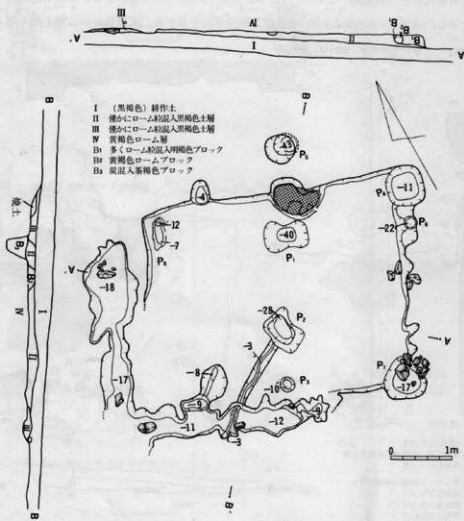
構築された竪穴住居址である。

周壁は、北壁で28cm～30cm、東壁で19cm～21cm、南壁は検出されなかった。

カマドは、北壁ほぼ中央に位置し、広い範囲に焼土と灰層を残している。覆土中には、東壁側とカマドの焼土部分の2箇所に集中して礫が散在し、約80を数える。焼土中の礫は、カマド本体に使用されていたものが含まれる様で、焼けた両輝石安山岩岩質溶結凝灰岩（俗称ドベ石）が大部分である。本住居址北側には、C区を東西に横断する漆黒腐植土の溝が走り、その一部は分岐して本住居址のカマド部分を削平している。

床面は、全体に僅かに硬化がみられ、カマド焚口周辺は硬化が顕著であった。ピットは、主柱穴4箇所と、東南隅に1箇所が検出された。主柱のうち、P₂ はやや南方にずれる感がある。

挿図20 第11号住居址 (SB11) 実測図



本住居址内の覆土層は単一で、ローム粒を混じえる茶褐色土層によって満たされる。

覆土中の遺物は、縄文、弥生時代のもを少量含むが、本住居址の時期に直接及び間接的に関連するものとして須恵器片が16点出土し、その中で比較的器形の知られるものは坏身片で、約3分の2の器形をとどめている。土師器片は17点出土している。

9. 第11号住居址 SB11 (挿図20)

本住居址はC区の第10号住居址の北東に隣接し、その床面は第12号住居址の床面より48cm高くなっている。

42, 43グリッドにかかり、主軸方向はN-24°Eを示す。東西4m×南北3.5mの東北に長い隅丸長方形のプランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は、東壁で20~25cm、西壁と南壁はほとんど失われている。特に南壁部には東からの溝状遺構が走るため、破損が著しい。本住居址の覆土は、ローム粒混入黄褐色土層とロームブロックによって構成される。床面は硬化が認められ、比較的検出が容易であった。北壁中央やや東寄りにわずかに焼土がみられ、かまどの痕跡が残る。

ビットは中央に3箇所、東壁に接して3箇所、北西端に凹み状の1箇所が検出されたが、柱穴と断定出来るものは無い。P₄、P₇はI層からの掘り込みであり、またP₁、P₂と住居外のP₅は一直線状に並んでいる。これらは、上部からの掘り込みで、桑の栽培によるものと考えられる。P₇上部には9個の礫が集石、住居址内には10数個の礫が散在する。

覆土中の遺物としては、縄文期の石匙、スリ石、フレーク等計7点が出土しているが、この住居址の時期を推定する遺物は検出することが出来なかった。

10. 第12号住居址 SB12 (挿図21)

本住居址は、C区の第10号住居址の西に隣接し、第10号住居址の床面より第12号住居址の床面は約30cm低くなっている。C区の拡張グリッド101, 103, 104, 106区において検出され、主軸方向はN-23°Eを示す。東西3.6m×南北3.8mのほぼ方形プランを有し、緩く傾斜した黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は東壁で29cm~32cmを測り、西壁は完全に欠失しているが床面の状態によってそのプランを推定することが出来る。

カマドは、北壁ほぼ中央に位置し、48×63cmの範囲に焼土が広がる。

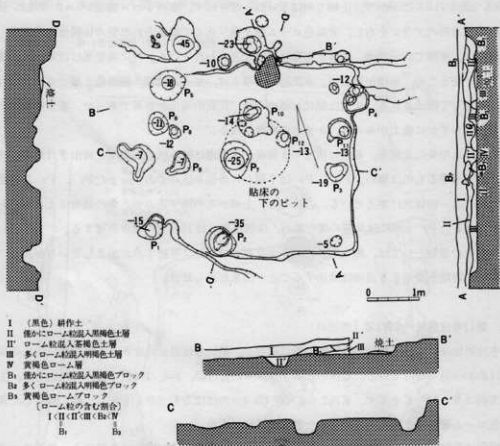
ビットは、12箇所が検出され、P₁~P₆は柱穴とみなしうるが、P₁とP₆は土質が黒褐色で、他とは異質であり、時期差が考えられる。また、中央のP₇内部からは桑の根が検出された。P₇とP₁₀の性格は確認しえなかった。P₁とP₁₁には部分的に焼土が観察される。本

住居中央には、径1.2mの範囲に色調の変化があり、ローム混じりの茶褐色土で貼床がなされていた。

本住居の覆土は、第I層の黒色表土層(10~20cm)の下に、ローム粒の混じる茶褐色土層が堆積し、下層になるほどローム粒の混入度は高くなる。

覆土中の遺物は、石鏃1点、土師器片8点、須恵器片3点、鉄器(刀子)1点がすべてである。刀子はP₁内部から、土師器片とともに出土した。

挿図21 第12号住居址(SB12)実測図



11. 第13号住居址 SB13 (挿図22, 23)

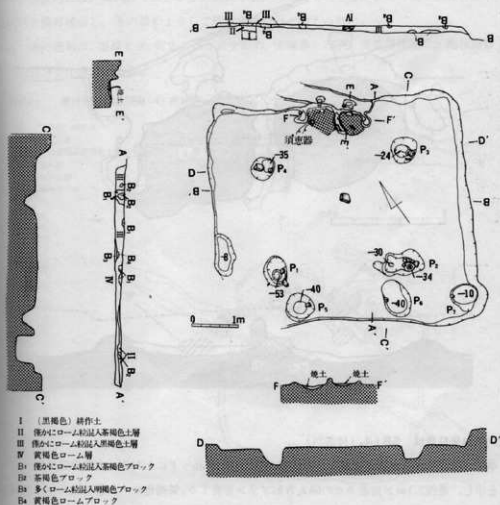
本住居址はC区の東端に位置し、C区の住居址の中で標高が海拔663.1mで最も高所にある。A区の第3号住居址の床面より3.4m高所に立地する。70、105グリッドにかかり、主軸方向はN-30°-Eを示し、東西5.5m×南北5mのほぼ方形プランを有する。南西に緩く傾斜した地

形の黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は、東壁で38～41cm、北壁で29～31cm、西壁部では10～12cmとなる。南西隅の壁は遺存状態が悪く、明瞭でなかった。

北壁中央部に複式のかまどが構築される(挿図23)。巾約50cmの焼土範囲をもつかまどが並列し、中央と両側に粘土塊のかまど壁が残る。それぞれに煙道を有し、長さ20cmで地表に開口する。かまどに使用されたとと思われる焼石もいくつかみられ、また小木炭片が灰に混じって残存する。床面は全体に硬化しており、カマド焚口周辺、本住居址の中央部に硬化面が特に顕著に検出された。

挿図22 第13号住居址(SB13)実測図

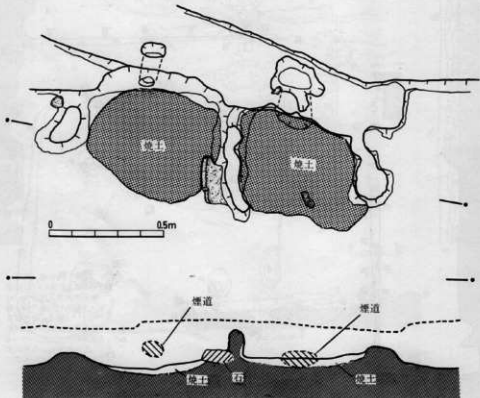


ピットは主柱4、南壁部に2箇所、東南隅に1箇所の計7箇所が検出された。P₇のみ皿状で、やや新しい陶片2が出土した。

本住居址の覆土は、第I層褐色表土層(20cm)の下に第II層ローム粒混入黄褐色土層が南西部に偏して約10cm堆積し、さらに第III層ローム粒混入黒褐色土層(5~20cm)となる。第III層は東側が厚い。

覆土中の遺物は、石鏃、凹石、縄文時代の土器、弥生時代の土器、土師器、須恵器、施軸陶器、瓦片など種々のものがある。西側のカマドの壁内には、完形の須恵器环蓋2点を始め、土師器片、須恵器片が出土しているが、この資料により本住居址の時期を推定出来る。

挿図23 SB13のカマド実測図



12. 第14号住居址 SB14 (挿図24)

本住居址はC区の南端に位置し、97、98、107、108グリッドにかかる。主軸方向はN-8°-Eを示し、東西3.1m×南北3mの隅丸方形プランを有する。黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は、東壁で18~29cm、南壁で11~17cm遺存している。西壁は10~14cm遺存し、一部が張り出しているが、この部分は発掘調査時の所見によると、本住居址に伴う張出部でなく、本住居址廃棄後の攪乱と考えられる。

かまどは北壁のほぼ中央に構築される。100cm×50cmの範囲でローム塊と焼化粘土が残り、原形はとどめないが炭、焼土が観察された。床面は、さほど著しくはないが硬化が認められる。ピットは検出されず、北東部に僅かな凹みが1箇所あるのみである。

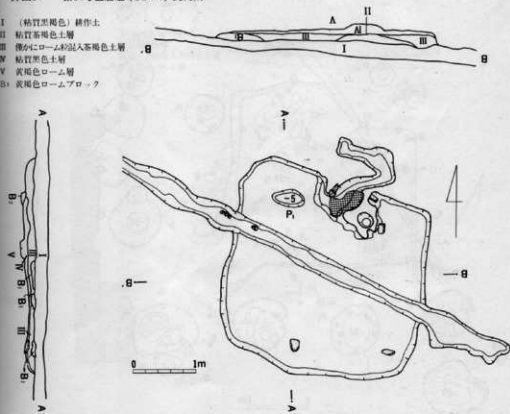
本住居址を東西に横断して、巾25~35cmの溝が走る。溝は東西壁と床面5cmを破壊して西方へ下る。覆土の観察では、攪乱の度合の強い第II、第III層下に、住居址全域をおおう第IV層粘質黒色土層が堆積し、溝の土と土質を同じくすることから、住居址が廃棄された後の早い時期に、この溝が掘られたと考えられる。

本住居址内には、溝内に4個、かまど部に3個、床面とその上層に2個の礫が散在していた。後者の2個は接合し、その器形よりして作業用の白石と考えられた。

覆土中の遺物は、削器1点、弥生土器3点を始め、土師器片26点、須恵器片22点、施釉陶器2点、鉄製刀子1点等がある。

挿図24 第14号住居址(SB14)実測図

- I (粘質黒褐色) 耕作土
- II 粘質茶褐色土層
- III 薄かにローム状混入茶褐色土層
- IV 粘質黒色土層
- V 灰褐色ローム層
- B: 灰褐色ロームブロック



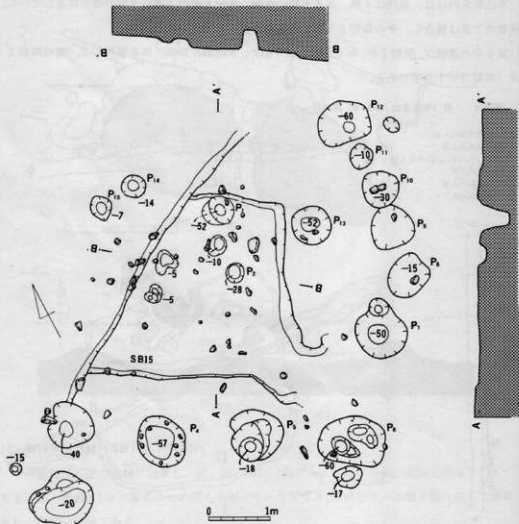
13. 第15号住居址 SB15 (挿図25)

本住居址は、C区の第6号、第7号土壌の北方に位置し、22グリッドにかかる。主軸方向は $N-30^{\circ}-E$ を示し、プランは方形と推定される。南北で2.8mを測るが、東西は南壁の遺存部分で2.7mまで確認された。黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁の遺存状態は悪く不明な点が多いが、東壁で10~14cm、南壁で5~7cm遺存するのみである。本住居址西側の3分の1が、近年の耕作によって削り取られ、段をなしている。床面の遺存状態も悪く、23個の礎が露出している。ピットは、 P_1P_2 が確認され、3箇所に深さ10cm未満の浅いくぼみがみられる。

覆土中の遺物は、少量の須恵器片と土師器片、鉄片2点をみるのみである。

挿図25 第15号住居址 (SB15) 実測図



14. 第16号住居址 SB16 (挿図26)

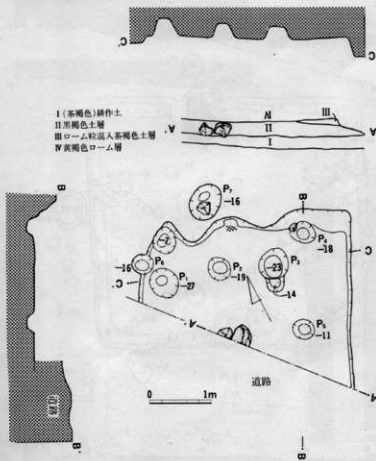
本住居址は、C区の農道沿いに位置し、第10号住居址の東に隣接する。51, 61グリッドにかかり、主軸方向はN-26°-Eを示す。東西は3.4mを測るが、南北は東壁が2.8mまで確認された。本住居址の南西半分は、道路の下にあるため、検出できなかった。黄褐色ローム層を掘り込んで構築された方形プランの竪穴住居址である。

北壁中央には、かすかに焼土が観察された。床面は硬化が認められ、北西部で第12号住居址と僅かに複合し、床面が切られている。ピットは6箇所に検出され、P₁, P₂が主柱と推定された。

本住居址の覆土は、茶褐色の表土層(約20cm)下に、第II層黒褐色土層が堆積し、住居址中央で24cmの厚みをなす。東壁部分には第III層ローム粒混入茶褐色土層が流れ込んでいる。

覆土中に遺物は見られなかった。本住居址の時期は不明である。

挿図26 第16号住居址(SB16)実測図



15. 第17号住居址 SB17 (挿図27)

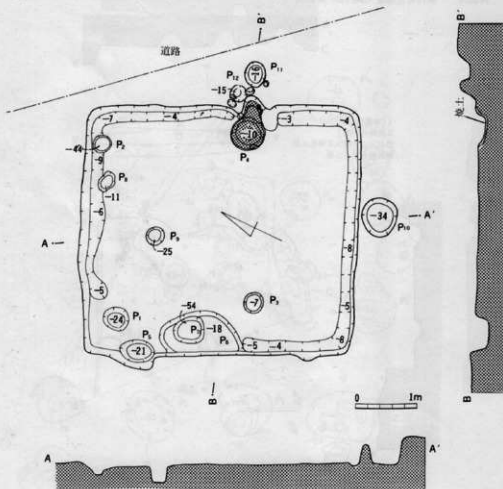
本住居址はC区の東方79mに位置し、C区の東端より6.62m高い畑地に検出された。主軸方向は、E-23°-Nで、他の住居址とは違い、東を示している。東西4.5m×南北4.1mのほぼ方形プランを有し、黄褐色ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。

周壁は、南壁で30cm~41cm、西壁で10cm~30cm、東壁で15cm~34cm、北壁で10cm~30cmを測り、南壁は深く、垂直である。壁面に沿って、幅約18cm、深さ3~10cmの周溝が遺存する。

カマドは東壁中央のやや東寄りに構築され、石の入った側壁、焚口ビット、煙道の一部、焼土が遺存する。床面は、全体に僅かに硬化している。

ビットは本住居址内に9箇所、住居址の外に3箇所検出された。西壁中央の大ビットP₄は深さ18cmの皿状で、更に深さ36cmの円形ビットP₇が重複する。P₁とP₂は柱穴と推定される。

挿図27 第17号住居址 (SB17) 実測図



覆土中の遺物は、縄文式土器107点、弥生式土器2点、土師器5個体以上32点、須恵器9個体14点、鉄片1点、石器6点、剥片7点である。

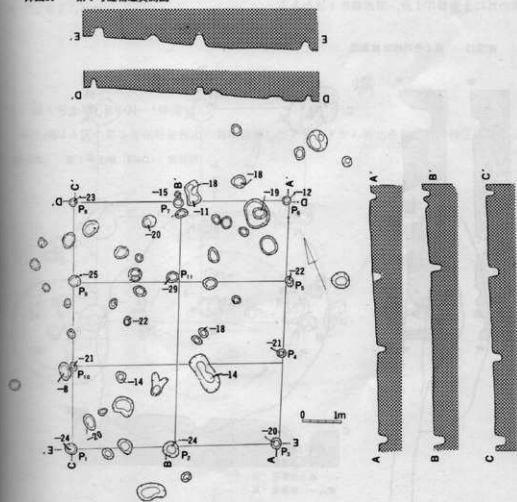
土師器と須恵器が本住居址に附属する遺物である。

他の遺物、特に多量の縄文式土器の出土は、かつて遺構が存在したことを伺わせるものである。(吉朝)

16. 建物址

A区では、竪穴住居址と各遺構間にピットが多く認められたが、この中に規則的配列を持った孤立柱建物址を2棟確認することが出来た。しかし、確認された事実からでは、竪穴住居址、その他の遺構との関係は十分に把握できず、直接遺構と関連を示す状態での遺物等を伴わず、

挿図28 第1号建物址実測図



時期等の問題を検討するに至らなかった。

(第1号建物址) (挿図28)

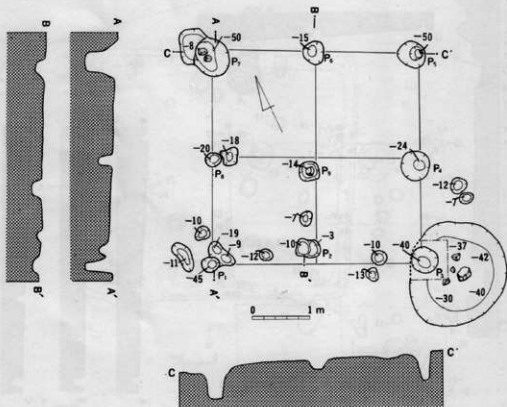
本建物址は、A区第6号住居址の東南1.5mにあって、西方に緩く傾斜した地形に位置し、A区54, 55, 62, 63グリッドにかかる。

形態は、桁行3間(626cm)×梁行2間(547cm)で、主軸方向は桁行でN-25°-Eを示す。桁行の西側の柱間は、北側から205+212+209cm, 東側の柱間は209+182+230cmを測る。梁行の北側の柱間は、西側から271+276cm, 南側の柱間は257+270cmを測る。

本建物址は11本の円筒状ピットで構成され、そのうち9本が20cmを超える深さを有する。

ピットの径は16~33cmであり、深さは最も浅いP₆で12cm, 最も深いP₁₁で29cmである。本建物址は平均の厚さ20cmの黒褐色土層(表土)下の黄褐色ローム層上面で検出された。この黒褐色表土層中の遺物は、54, 55, 62, 63グリッド中に縄文前期, 中期の土器少量, 石鏃8点, 削器2点等の外に土師器片1点, 須恵器片1点がある。

挿図29 第2号建物址実測図



(第2号建物址) (挿図29)

本建物址は、A区第6号住居址の西方4mに位置し、A区42、43、51グリッドにかかる。24箇所の大小ビット群の中で、配列が明確で建物址と推定される柱穴が9箇所認められる。

形態は、桁行2間(376cm)×梁行2間(362cm)で、主軸方向は桁行でN-26°-Eを示す。桁行の西側の柱間は、北側から191+185cmを測り、東側の柱間は193+175cmを測る。梁行の北側の柱間は、西側から178+184cmを測り、南側は366cmを測り、中間部に柱穴は認められなかった。

4隅のビットP₁、P₂、P₃、P₄は40~45cmと深く、その他のビットは14~24cmと浅い。ビットの径はまちまちで、特にP₁は炭とチャート礫12個を含む黒褐色の土が混入し、攪乱が認められる。また、P₃は縄文早期の遺物を出土した大ビットP₄に重複し、その覆土を掘り込んでいる。

床面は凹凸があり、攪乱が著しい。本建物址の覆土は黒褐色土層下の黄褐色ローム層上に検出された。黒褐色土層中の遺物は縄文前期のものが出土しているが、この建物址に関連する遺物とは考えられない。

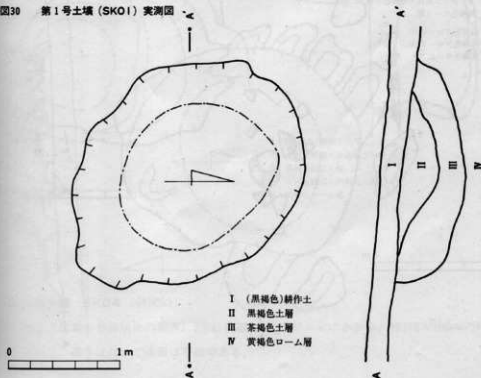
(藤本)

第3節 土 壌

1. 第1号土壌 SKO1 (挿図30)

本土壌はA区の第5号住居址検出の為に拡張したグリッドから検出され、67、74区にかかる。

挿図30 第1号土壌(SKO1)実測図



約20cmの表土層下の黄褐色ロームを約60cm掘り込んで作られ、長軸2.4m、短軸1.8mの楕円形プランを有する。本土壌の掘方は、東側は急に、西側は緩く、皿状に掘り込まれている。

内部はローム粒混じりの黒褐色土（第II層）と褐色の粘質土層（第III層）で構成され、第III層は下底で粘質の度合いがより強くなる。第III層上部において礫が2個見られた。

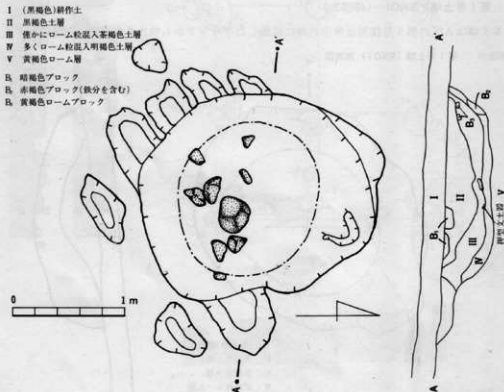
覆土中の遺物は、縄文土器片1点、下呂石（ガラス質の黒雲母石英安山岩、以下下呂石と呼称する）製スクレパー1点、下呂石製チップ1点及び炭化物1点が全てである。

2. 第2号土壌 SKO2（挿図31）

本土壌はA区の第6号住居址の北方に位置し、29グリッドで検出された。部分的に耕作機械によって破壊されているが、東西175cm、南北205cmの円形プランを示す。深さ90cm、壁は約50°の傾斜で、底部はほぼ平坦である。

本土壌の覆土は、第II層・黒褐色土層、第III層・ローム粒を僅かに混じえる黄褐色土層、第IV層・ローム粒を多く含む明褐色土層で、第II層内には暗褐色ブロックが、第IV層には鉄分を含む赤褐色のブロックが存在する。

挿図31 第2号土壌（SKO2）実測図



第Ⅲ層下底において、礫9個及び押型文土器片10数点がみられ、大部分は接合した。

柱穴等の痕跡は検出出来なかったが、やや硬化した底面や礫の存在に生活臭が感じられ、居住に使用された可能性が強い。ちなみに、内部面積は1.7㎡である。

覆土中の遺物は、石鏝1点、フレーク4点、土師器・須恵器片各1点、スリ石片1点である。

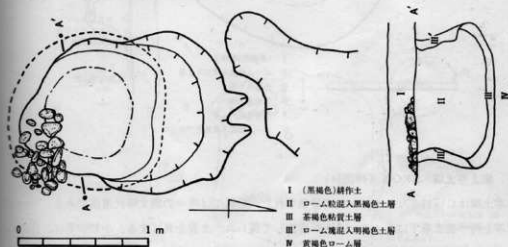
3. 第3号土壌 SKO2 (挿図32)

本土壌はA区の第2号土壌の北方に位置し、21グリッドにかかる。黄褐色ローム層を110cm掘り込んで作られ、径95×100cmの円形であるが、底部において118×118cmの広がりをもせる袋状ビットである。

南東の肩の部分に35×60cmの範囲で集石があり、スリ石と撥型打製石弁各1を含んでいるが、後世の擾乱によるものと思われる。

本土壌の覆土はローム粒混入黒褐色土層で満たされ、下部において粘質の褐色土層が薄く堆積する。覆土中に遺物は見られなかった。A区の住居址に付属する貯蔵庫であろう。

挿図32 第3号土壌 (SKO2) 実測図



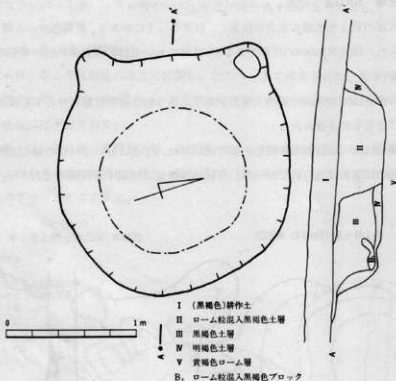
4. 第4号土壌 SKO4 (挿図33)

本土壌はA区第9号住居址の東方1.2mに位置し、13グリッドにかかる。径178×180cmの円形プランを有し、深さは70cmで底面は平坦である。

第IV層・明褐色土、第III層・黒褐色土の堆積に切り込む形で第II層・ローム混じり黒褐色土層が混入する。

本土壌の覆土中の遺物は、玉髄製フレーク1点のみである。

挿図33 第4号土壌(SK04)実測図

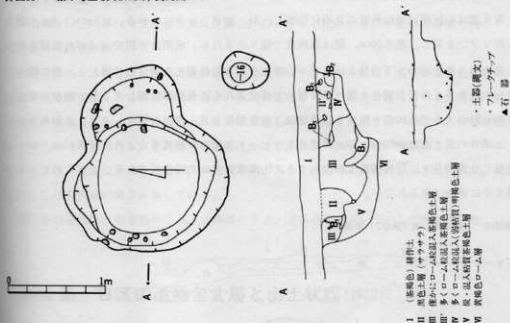


5. 第5号土壌 SK05 (挿図34)

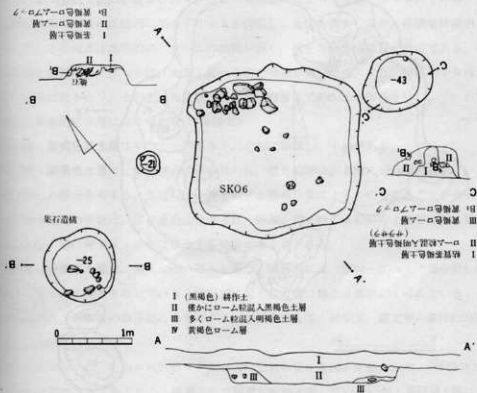
本土壌はC区11グリッドにおいて検出された、C区では唯一の縄文時代遺構である。22cmの厚みを持つ表土層下に大小のビットが重複して現われ、土質を異にする。小ビットは、径79cm深さ30cmで、C区に一連の桑の根によるものと考えられた。大ビットは、径1.7m、深さ60cmで底部は径約1mの平坦面となる。第II層は第I層からの掘り込みによるサラサラの黒色土層第III・第IV層は黒色土とロームの混合土層で、ローム粒の混入度合によって色調の変化をもつ。第V層の粘質褐色土層において炭が混じり、遺物の出土をみる。基盤は礫を含む黄褐色土層である。

覆土中の遺物は、底面に硬く張りついた状態で、縄文土器20数片と、石鏃3、スクレパー1、チップ31が出土した。土器は縄文早期に所属する。

挿図35 第6号土墳 (SK06) 実測図



挿図34 第5号土墳 (SK05) 実測図



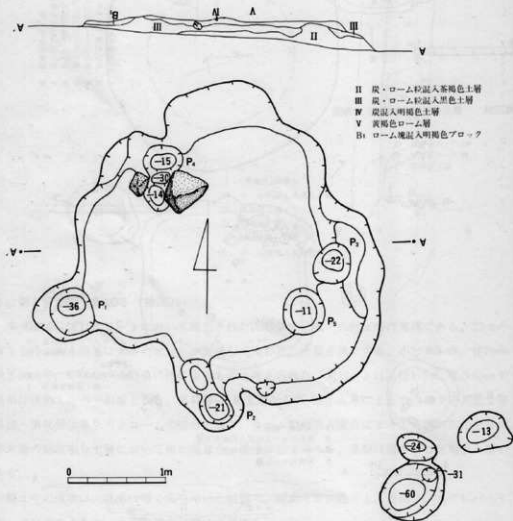
6. 第6号土壇 SK06 (挿図35)

本土壇はC区第11号住居址の北西に位置し、31、32グリッドにかかる。2.3m×1.8mの隅丸方形プランを有し、深さ20cm、壁は急角度で掘り込まれる。底面は平坦で、4.5㎡の面積をもつ。

表土層(厚さ20cm)下の覆土は、ローム粒を少量含む黒褐色土層(第II層)と、壁に沿ってローム粒を多く含む黄褐色土層(第III層)で構成される。東壁部に偏して多量の礫が存在し、5cm~31cm大まで約80個を数える。遺物は、須恵器片2点、下呂石製フレーク2点がある。

土壇外の東と西に、50cmと17cmの径をもつピット2箇所が隣接する。P₁は深さ43cm、ローム粒混じり黄褐色土に粘質褐色土が混入する。P₂は深さ21cmの円柱状である。これらのピットの覆土中に遺物は見られない。

挿図36 第7号土壇(SK07)実測図



7. 第7号土壌 SK07 (挿図36)

本土壤はC区の第11号住居址北東に位置し、33グリッドにかかる。不整形の遺構であるが、住居址の可能性が高い。

表層下にローム混じり黄褐色土層があり、その下に小さなローム粒を混じえる黒色土層がほぼ均一に堆積する。さらに黄褐色の層が、床状の底面を5cmの厚さで覆っている。底面は若干の硬化が認められる。東壁の立ち上りは30°の角度を持ち、最も深いところで27cm、両側は浅くなって6cmの深さである。第Ⅲ層から底部にかけて、31個の大小の礫が散在する。

ビットは5箇所が検出されたが、本土壤の隅にあたる部分の4箇所のビットP₁~P₄は、柱穴とみなしうる共通の深さを有している。

覆土中の遺物は、須恵器片5点、土師器片3点、下呂石製スクレパー1点が出土した。

第4節 B区の遺物包含層と出土状態 (挿図37、38)

B区はA区の南側に隣接し、谷川に面する段丘上にある。谷川よりも約6m高所にある。B区はA区よりも約1m低い位置にあり、近世の畑地造成によって平坦に削平されている。

東西20m南北28mの区画内に35のグリッドを設定し、全区を調査したが、住居址は検出されなかった。この地点は地形的に、ロームの堆積が弱く、礫を含む矢矧礫層が地山である。従って、北列と南列の各グリッドは、地表下20cm未満で礫層が見られた。また、同区の中央付近は礫層が谷状に低くなり、その上に堆積層が見られ、礫層まで約60cmの深さを持つ。

層位は基本的に3層に分けられる。(挿図37)

第Ⅰ層・黒褐色表土層は平均20cmの厚みで、全面に堆積し、平坦である。

第Ⅱ層・黒褐色土層は、中央付近にのみ見られ、厚さ約20cm。各所にビットを構成し、また鈔利を敷いた部分を有する。これらは、桑を植える際の作業によるものであることが判明している。出土遺物の半数は、第Ⅱ層内に包含され、時期も縄文時代各期から土師器に至る種々のものを含む。特に押型文土器片は接合する個体が多く見られる。

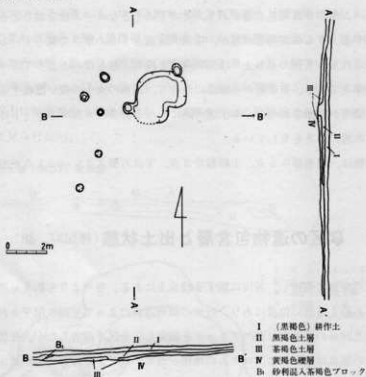
第Ⅲ層・茶褐色土層は、最大30cmの厚みをもつ。同層内には、5cm~20cm大の礫が見られた。本層の下部は地山礫層となっている。挿図38に見られる様に地山は皿状にくぼんでいる。

出土遺物は、第Ⅲ層の最深部に当たる19グリッドに集中して、押型文、縄文等の細片約100点が出土した。

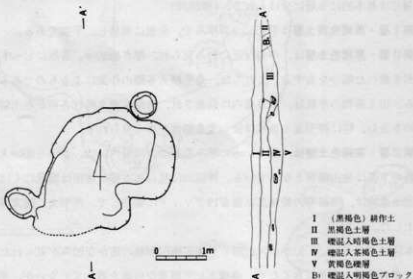
本区19グリッドに、3.28m×2.25mを測る楕円形状の僅かな凹みが見られた。(挿図38)それは、遺存状態があまり良くなく、遺構として顕著な痕跡を残していないが、第Ⅲ層上部に縄文

早期の遺物が検出された点と、第三層が人為的な変動に起因するものでない点から、この時期に近い時期の遺構と考えられる。

挿図37 B区遺構全体平面図



挿図38 B区の遺物包含層と出土状態



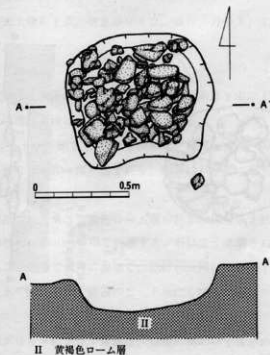
第5節 その他の遺構

1. 集石遺構

(第1号集石遺構) (挿図39)

本遺構は第1号住居址の南東約4mに位置し、A区48グリッドにおいて検出された。本遺構の外側は表土下20cmで黄褐色ローム層となり、そのローム面と高さを同じくして、焼石が確認された。3cmから15cmのチャート为主体とする角礫約60個が、東西76cm南北65cmの長方形のプランを有する深さ15cmのピット内に遺存し、いずれも焼けてもろくなっている。石の間は炭片を含む黒色土で満たされ、ピットの底部・側壁には焼痕が残る。覆土中に遺物は見られなかった。

挿図39 第1号集石遺構実測図



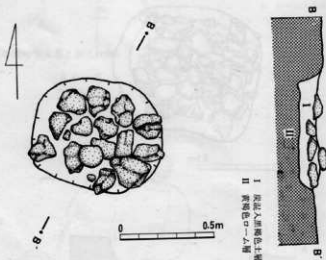
(第2号集石遺構) (挿図40)

本遺構はA区の第2号住居址の西方に位置し、A区26グリッドにかかる。表土下22cmのロー面に僅かに盛り上がり、17個の集石がほぼ円形に配列される。東西68cm、南北58cm、深さ5~10cmで、土地の傾斜に沿って南方では深くなる。石は11個が安山岩系、6個がチャートで円礫が大部分である。7個に焼痕が残り、ひび割れの状態のものが3個ある。石の間及び下部は、炭の小片を混じえる暗褐色土層で満たされるが、壁面・底面に焼けた面は観察されなかった。覆土中に遺物は見られなかった。

(第3号集石遺構) (挿図35)

本遺構はC区第6号土壌に隣接して検出され、C区31グリッドにかかる。径48cmの隅丸方形で深さ25cm、内部には約30個の安山岩製角礫が焼けた状態で詰まっている。覆土は褐色で、炭片の検出は見られず、また壁面にも焼けた痕跡は無く、ピットに焼石が投げ入れられた状況である。

挿図40 第2号集石遺構実測図



2. 溝状遺構

(A区の溝状遺構) (挿図6-41)

本遺構は、A区を分断する形で、土地の傾斜に沿って西から東に走る溝状の遺構である。A区12・21・22・23・31・32グリッドにかかる。ほぼ中央の22グリッド部分においては、巾90cm、深さ28cmのU字状に黄褐色ローム層を掘り込んでいるが、東方にゆくにつれ次第に細くなり、部分的に南方へふくらみをみせる部分も3箇所ある。深さも徐々に減少し、東端の32グリッドでは、掘り込みがかすかにみられるのみである。22～32グリッドにかけては、5箇所に等間隔で

径約50～70cmのピットが並び、うち3箇所で桑の根が検出されている。西端部では、第9号住居の壁を切って住居中央部分まで延びるが急に消滅する。

溝内の土壌は非粘質の漆黒土で、単一である。C区の溝状遺構で部分的に見られた砂利や砂の層は、ここでは全く検出されていない。

覆土中の遺物は、縄文土器片1点、須恵器片4点、鉄片(刀子?)1点で、須恵器片は溝の底部に接して出土した。

(C区の溝状遺構) (挿図42)

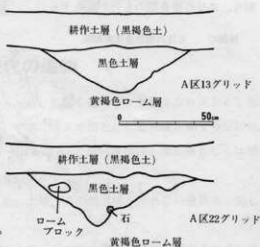
C区における溝状遺構は3箇所に分断されて残るが、本来は2本にまとめられると思われる。そのうち、1本はA区の溝状遺構につながる可能性がある。

最上部はC区108グリッドから始まり、第14号住居址を横断して西へ20m走り消える。巾は平均30cmで黄褐色ローム層に10～20cm掘り込まれる。断面はU字形に近く、水の流れた痕跡がある。

C区55グリッドに検出された溝は黄褐色ローム層が約30cm掘り込まれ、多量の川原石を伴って出現する。約20度の傾斜、約90cmの巾で西進する。石はよく水磨され、砂利の集積を伴っている。西方へ7m進んだところで直角に南進し、更に10m伸びて道路下に消える。断面の観察では、溝内は粘質黒色土で満たされ、底辺のピット状にくぼんだ部分では小砂利の堆積が見られる。

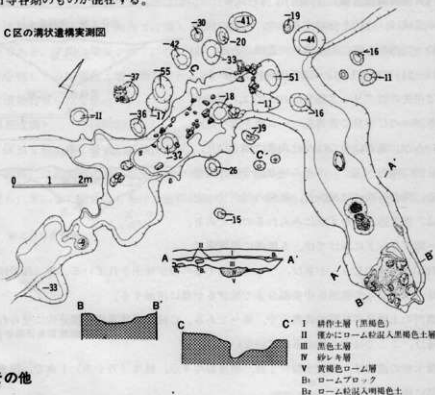
C区41、42、51、52グリッドに出現する溝は、前記の溝のいずれかの部分からの分岐と思われる。第11号住居址では南壁と西壁を、第10号住居址ではカマド部分を破壊して第12号住居址北

挿図41 A区の溝状遺構断面図



壁部で消える。恐らく、A区の溝に続くものと思われる。巾、深さとも一定でないが、内部は漆黒の粘質土で石の混入は少ない。溝内覆土中の遺物は、縄文土器片、土師器片、須恵器片、剥片、スリ石等各期のものが混在する。

挿図42 C区の溝状遺構実測図



3. C区その他

<1> C区の23グリッドの黄褐色ローム層上に11点の須恵器片が検出された。ピットは大小6箇所が南北に並列し、そのうち2箇所は2重ピットとなって深さ80cmに達する柱穴状のものであった。このピット内覆土はローム混じりの褐色土で、中央あたりの黒色のブロックが5cmの厚さで見られる。遺物は大部分が甕の胴部で、坏身と坏蓋が各1点ある。

<2> C区の34グリッドの地山面においても、床面状の硬化が認められたが、遺構は検出されなかった。遺物として、須恵器片8点、土師器片1点、フレーク2点がある。

また、C区43、44、53、54グリッドにかけて遺物の集中するところがあり、焼土も1箇所検出されたが、溝状遺構により破損が著しく、遺構は不明であった。遺物は、須恵器片35点、土師器片19点、土錘1点、スリ石2点、フレーク4点等がある。

<3> (挿図25) 第15号住居址の東部と南部において直交する2列のピット群が検出された。径70cm、深さ40cmを越えるものが6箇所ありその間に径50cm内外の浅いものが5箇所ある。

形状は円柱もしくはスリバチ状で、内部はロームを混じえる褐色の土層で満たされていた。遺物を伴うものは無く、いくつかのピットから桑の根が検出されたため、その性質については桑畑の痕跡であると考えるのが妥当であろう。

第3章 遺 物

第1節 縄文時代の遺物

今回の調査により縄文時代に属する遺物は、A、B、C区を総合すると約1,500点出土した。その内訳は表1に示した。これらのうち同時期の遺構に伴って出土した遺物は、第1号住居址、第9号住居址、第2号土壌、第5号土壌、大P₁~P₄が該当し、他の遺物は、攪乱層もしくは他の時期の遺構内に流れ込みの状態で見出されたものである。

従って、ここでは第1号住居址、第9号住居址、土壌、その他遺構を伴わない遺物を一括してその順に記述し、分類を試みることにする。

第1群に縄文早期の土器、第2群に縄文前期の土器、第3群に縄文中期の土器をそれぞれ分けた。さらに、各群をその文様形態から細分して類に分け、必要に応じてA、Bさらにa、bと細分した。

この表を基準として、今回の調査により出土した縄文時代に属する土器を分類することとし、文様の不鮮明な個体や、極小破片等識別不可能な遺物に関しては、不明・その他の類に包括した。

備考欄では、対比される型式名を記したが、確実なもの以外は省略した。第2群3類の突帯を有する土器群については、突帯上に刻目・爪形を持つ類と、突帯上に縄文が施される類を区分するの^(註1)がより妥当と思われるが、ここでは鳥浜貝塚報告書の区分に従った。第2群8類の丹彩土器については、赤色塗彩物の化学的分析をまだ行っていない現状では、それが酸化第二鉄(Fe₂O₃・ベンガラ)か、硫化水銀(HgS)あるいは朱漆であるかの決定は下せない。ただ大形列孔浅鉢の場合、「つやのある黒い皮膜」が火熱による鉄分の変成の結果であると考えられるならば、酸化鉄の可能性が強い。また8類の小片土器のいずれもが焼成前塗彩である。従って一応「丹彩」の表現を使用することにする。

数量に関しては、接合できたもの及び同一個体である事が確実なものを極力1点と数え、それ以外はすべて1片を1点と数えた。従って、それぞれの計は個体数に近くなるが、絶対数ではない。特に4類縄文、6類無文土器に関しては数値に変動がある。

(註1) 増子康真 「北白川下層式土器の再検討」 考古学研究 29-1 1982

(註2) 鳥浜貝塚 ——縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—— 福井県教育委員会 1979

表1. 縄文土器分類表

注: () は、不確定なもの

○は、個体数の増加する可能性のもの

○は、# 減少 #

群	類	土器の文様形態		備考	SB 1	SB 9	SK 2	SK 5	大 P ₂	P	A区 一括	B区 一括	C区 一括	計		
第1群土器 (縄文早期の土器)	1類	押型文土器	A. 山形文								2			2		
			B. 楕円文	a									1		1	
				b	(高山寺)			1						1		2
			C. 複合押型文											1		1
			D. 格子目文	a	(立野)									>3		>3
		b	(立野)									1		1		
		a	(立野)									>3		>3		
		b	(立野)									1		1		
	2類		撚糸文土器						1		2	1		4		
	3類		条痕文土器	茅山							1			1		
4類		沈線文土器					(2)					1	3			
5類		縄文土器	(茅山)	1			2					1	4			
第2群土器 (縄文前期の土器)	1類		条痕調整のある土器		3						5			8		
	2類	爪形文を施す土器	A. 連続爪形文	北白川下層IIa	4	5					8			17		
			B. 縄文と爪形文の併用	北白川下層IIb	5	2					2			9		
			C. 縄文のない爪形文		a	4					9			13		
		b	諸磯 b						3				3			
	3類	突帯を有する土器	A. 突帯と縄文の併用	(北白川下層IIc)	4	1					3			8		
		B. 無文地に突帯			1						7			8		
	4類	沈線文土器	A. 諸磯a式系 沈線文	諸磯 a	2	(1)					7			10		
		B. 諸磯b式系 沈線文	諸磯 b	2							1			3		
	5類	縄文のみ	A. 関西系 縄文		46)	19)						111)			176)	
			B. 関東系 縄文		18)	24)				2	61)	2	5	112)		
			C. 中間形 縄文		35)	2					50)			87)		
	6類		刺突文土器								2			2		
7類		無文土器		29)	6)					93)		8	136)			
8類		丹彩土器		3						4			7			
9類		底部・その他の土器	(十三坊台)	3	3					7			13			
第3群土器 (縄文中期の土器)	1類	撚糸文土器	A. 撚糸文									1	10)	11)		
	B. 沈線を伴う撚糸文		里木 II									2		2		
	2類	隆帯文土器	船元・加曾利E							1	1	20)	22)			
	3類	縄文土器										24)	24)			
	4類	無文土器										1	35)	36)		
5類		底部・その他の土器									2	7	9			
不明・その他の土器							10)			267)		22)	299)			

1. 第1号住居址の遺物

本住居址からは、完形土器2点を含む土器片168点、石器・剥片類約200点が出土した。出土状態については前章で述べたが、2個体の完形土器は本遺構の性格を知る上で注意すべき遺物である。

遺物は大部分が縄文前期中葉に属するものであるが、一部やや古い様相を持つ土器（第1群5類、第2群1類）の4点と、土師器・須恵器・近世陶器の5点は時期を異にする。その他の土器には顕著な時期差は認められないことから、覆土中の土器を一括して分類する。

土 器

第1群土器（縄文早期の土器）

5類 縄文土器（挿図44-1、図版11-2）

1点のみであるが、早期末と推定される土器である。1は厚さ15mmの極めて厚手の土器片で肥厚した部分に棒状工具による径5mmの連続刺突を伴う斜縄文が施される。色調は暗褐色、焼成は良く、胎土に微細な石英・雲母片を含む。

第2群土器（縄文前期の土器）

1類 条痕調整のある土器（挿図44-2~4、図版11-2）

条痕調整のある土器を一括して本類とした。ここでは表面に縄文、裏面に条痕のある土器3点が該当する。2は表面黒褐色、裏面明褐色で厚さ8mm、やや粗製の土器であるが焼成は普通である。巾広い沈線と、結節のある縄文がみられ、表面には水平方向に貝殻による条痕が走る。繊維も微量含んでいる。3は口縁部破片で暗褐色、厚さ6mm、表面にスガが付着する。口唇上に斜めの刻目が入り、表は粒の大きいRL縄文裏は斜めの条痕が残る。他の1点4は、3と同様の色調・厚さをもつ羽状縄文土器で表面の条痕が顕著である。

2類 爪形文を施す土器

爪形文を施す土器を一括して本類とした。A、B、Cの3種に分けられ、Cはさらにa、bに細分される。

A 連続爪形文（挿図44-5~8、図版11-2）

連続爪形文・シュロ状文とも呼ばれてきたもので、細くて巾の広い爪形文を密に連続させる。北白川下層II a式に比定されるものである。5は、左向きの浅い連続爪形が施される口縁部破片で、口唇内側に刻目を有し、裏面には僅かに条痕調整が残る。厚さ4mm、灰白色で焼成堅緻である。6は、竹管端部のみの圧痕による連続爪形が4段以上にわたって施される。口唇に刻目が入る浅い波状口縁である。厚さ4mm、暗灰色で堅い。7も同様の爪形文であるが、別種の

深い爪形が一例加わる。暗灰色，4mm。8は口縁部で，地床炉下底から出土したためやや風化が進んでいる。連続爪形の列が途中で下方に向きを変える。厚さ4mm，暗褐色。

B. 縄文と爪形文の併用 (挿図44-9~13, 図版11-2)

縄文と爪形文が併用されるもので，北白川下層II b式に対比される。9は口唇に竹管の押引文が施され，縄文地に相向いあう爪形が2列にわたって施文される特殊な爪形文である。暗褐色で厚さ4mm，焼成は良く，堅い。10は，口縁部に一列の左向き爪形文と羽状縄文の組み合わせで，口唇内側に深い刻みが入る。厚さ3mmで黒褐色，焼成普通。11・12はともに黄褐色を呈し，焼成堅緻な厚さ4mmの土器で，区画沈線のない爪形文の列が羽状縄文の間に施される。11の爪形は左上方からの刺突である。13は区画沈線のある爪形文と縄文の組み合わせで，赤褐色，胎土にセシイを多く混じえ厚さ6mm。B類ではこれのみ異質で，関東系あるいは地方色としてとらえられる土器であろう。

C. 縄文のない爪形文 (挿図44-14~17, 図版11-2)

縄文のない爪形文で，関西系をaに，関東系をbに分類する。本住居址のそれはaに含められ，無文地に爪形文が施される。14は褐色の地肌で1列の細かい刺突が並ぶ。厚さ4mm。15，16，17は同一個体に属し，褐色ないし暗灰色，厚さ4mm。口縁がやや反り加減に内傾する器形で，無文地に，区画沈線のある細かい爪形文が，特に頸部に集中して施される。

3類 突帯を有する土器

突帯を持つ一群の土器を一括して本類とした。A，Bの2種に分けられる。

A. 突帯と縄文の併用 (挿図44-18~21, 図版11-2)

18，19，20は同一個体である。口縁を外側に折り曲げて肥厚させ，その下に2条の突帯があり，以下縄文となる。褐色で表面にススが付着する。21は突帯上に長いジグザグの刻みが入る。暗褐色で厚さ5mm，焼成普通。北白川下層II c式に対比される。

B. 無文地に突帯 (挿図44-22, 図版11-2)

22は無文地に突帯があり，突帯には刻みを有しない。器形はやや内湾する鉢形，口唇は角ばり，口縁部に3条の突帯が並列する。突帯断面は三角，色調は褐色で厚さ6mm，焼成は良く堅い。

4類 沈線土器

沈線の施されている土器を一括して本類とした。A，Bの2種に分けられる。

A. 諸磯a式系沈線文 (挿図44-23, 24, 図版11-2)

23は半截竹管による平行沈線が，横→縦→斜めの順に施される。平行線の片側に，より重量がかけられている。赤褐色で厚さ8mm，焼成は良い。24は横と斜めの平行沈線で，色調・厚さとも同様である。

B. 諸磯b式系沈線文 (挿図44-25, 図版11-2, 挿図45)

挿図45は大型の列孔浅鉢土器である。37片にひび割れていたが欠落部分はほとんどない。最大径35cm, 口径21.5cm, 高さ9.2cm。器形は扁平な円盤状で、底部側は3段で構成される。最下底(底部)は径11.0cm, 2段目は径24.5cm。口縁部は胴部からの屈曲のままで立ち上らない。口縁に径4mmの円形の孔が40箇所巡る。器壁は厚さ9mm, 底部は厚く作られ17mm, 僅かに丸みを帯びるが安定は良い。胎土は精製されて焼成良好である。地肌は暗褐色ないし赤褐色で底部を除く表面全体に文様及び丹彩が認められる。文様は沈線による三角文とS字状文の組み合わせで構成される。便宜上、真上から見える部分(上半部)を第1文様帯、裏側(下半部)の外周を第2文様帯、その内部(2段目)を第3文様帯と呼称する。第1と第2文様帯は同じパターンを持ち、3つの三角文群と3つのS(2)字の組合わせである。S字状文は1つが小さく2つが間のびした形態で、空間に小さな三角が配置される。三角文の中央のものが、第1と第2文様帯で一致する位置にある部分が1箇所あり、恐らく正面であろう。第3文様帯は、3つの三角群と2つのS字の組み合わせである。沈線によって区切られた部分にはいずれも刻線が入る。また有孔部と、各文様帯の間には綾杉状の刻み目と点列が巡る。

丹彩は、第1文様帯は剥落が著しく部分的にしか残らないが、第2・第3文様帯は遺存状態が良く、あざやかな赤色が見られる。問題となるのは、つやのある黒い皮膜状の残る部分があることで、丹彩はこの皮膜の下にも見られる。特に刻文部ではそれが明瞭である。この黒い皮膜が、何であるかは、今後の分析の結果にゆだねたい。

25は、赤褐色、厚さ10mmの土器で雲母を含む。へら状工具による沈線の区画文が描かれた浅鉢土器である。

5類 縄文のみの土器

縄文のみで構成される土器を一括して本類とした。関西系をAに、関東系をBに、その中間形をCに分類した。分類基準は胎土を主とし、色調、厚さ、縄文原体の大きさ等をこれに加味したが、中間形の基準は必ずしも厳密ではなく、A、B類どちらとも分け難いものである。

A 関西系縄文 (挿図46-1~8, 図版11-3)

色調はおおむね暗褐色・黒褐色の土器である。厚さは3~5mm, 胎土は密で焼きしまりがあり、極めて堅い。半数が羽状となっている。胴部のややくびれる深鉢形が多い。1~3は口縁部破片で、1は口唇に竹管による刺突、2は口唇に縄の圧痕、3は口唇に刻目が入る。裏面において擦痕を残すものが1点、磨かれて潜沢のあるものが5点ある。4は羽状間が少し無文となり、2種類の原体を交互に施文する。5は原体巾(原体の長さ)が、1.5cmと小さい。6は表裏に縄文が施されている。

B. 関東系縄文 (挿図46-9, 10, 図版11-3)

色調は赤褐色で厚さ7～10mm、胎土に砂粒・雲母片を含み、僅かに纖維を含むものもある。焼成は普通かやや粗い。羽状はわずか1点でほとんどがRLの斜行縄文である。原体巾が3cmをこえるものが多い。9は口唇に刻目があり、口縁下に径1.5cmの孔がある。10は平底の底部に近い部分である。

C. 中間形縄文 (挿図46-11, 12, 図版11-3)

胎土・焼成とも良く厚さ4～5mmのものが10点ある。11は明褐色で、1本の原体で羽状を構成する。裏面にスカが付着する。一方、胎土が小石を混じえて極めて粗く、焼成の弱いものが26点ある。縄目も粗く、RLの斜行縄文が多い。厚さは6～7mmで、褐色ないし暗褐色を呈する。12の口唇には刻目が入る。

6類 刺突文土器

列点状の刺突文を施文する土器で、遺構外より数点出土しているが、本住居址からは検出されなかった。

7類 無文土器 (挿図46-13～17, 図版11-3, 挿図43, 図版11-1)

無文土器を一括して本類とした。挿図43は小型の列孔浅鉢土器で、大型の列孔浅鉢に比較して粗雑な作りである。26片にひび割れているが完形である。最大径20.8cm、口径12.3cm、高さ6.8cm。円盤状で底部側はやはり3段で構成されている。底部は丸底で径8.5cm。二段目の径は14.3cm、口縁部は1.5cmの高さで立ち上り、口唇は肥厚する。口縁部に沿って、頸部に径3mmの孔が21箇所穿たれている。色調は黒褐色で、胎土は精製され雲母を含む。焼成は良い。器厚8mm。上半部は器肌がざらつくが、底部側は良く磨かれて滑沢がある。

その他の無文土器には、薄手(3～4mm)・褐色・焼成の良い堅緻なもので表面に擦痕の残るもの7点(13)、擦痕のないもの10点(14, 15)、やや厚手(6～8mm)、赤褐色ないし明褐色・焼成は普通かやや悪く砂粒・雲母を含むもの9点(16)、さらに厚さ3mmで赤褐色・焼成の悪いもの2点(17)がある。器形の判明する個体はないが、15はわずかに内傾する鉢形であろう。

8類 丹彩土器 (挿図46-18～20, 図版11-3)

丹彩土器を一括して本類とした。第2群4類Bに分類した厚手の列孔浅鉢土器完形品以外は、薄手の小破片が3点みられるのみであった。18は細い沈線文のある表面のみに、19は表と裏に20は裏面のみにそれぞれ丹彩が見られる。色調は明褐色を呈し、厚さ3～5mm。胎土に小石を混じえるが、焼成は良い。

9類 底部 (挿図46-21～23, 図版11-3)

底部は3点が出土した。

21は、内外面ともよく磨かれて滑沢のある黒褐色の精製土器底部である。底部端は外方に突出し、あげ底気味になる。厚さ6mm。極めて大形で復元すれば径26cmの底部となる。22は粗製

の平底で、植物の葉の圧痕が残る。明褐色、厚さ9mm。23は薄手の平底で、褐色、厚さ4mmである。

石 器

石 錘 (挿図47-1~9, 図版12-1)

9点出土し、下呂石製6点、チャート製3点である。三角錘4点(1~4)、三角凹基錘4点(5~8)、長身凹基錘1点(9)に分類され、粗雑な作りが多い。

石 錘 (挿図47-10~15, 図版12-1)

つまみを有するもの4点(12~15)、両端が尖るもの2点(10, 11)、1点のみチャート製(12)、他は下呂石製である。15は剥片の一部に小さな錘部を作出したものである。

石 匙 (挿図47-16, 図版12-1)

横形下呂石製が1点出土した。裏面の加工は最小限にとどめてある。

削 器 (挿図47-17, 18, 図版12-1)

剥片の一部に部厚な調整を加えた外湾刃削器で、2点ある。下呂石製。

石 錘 (挿図47-19, 図版12-1)

流紋岩の自然礫両端に打撃を加えた石錘で、1点の出土である。

砥 石 (挿図47-20, 図版12-2)

板状の砂岩の一面に、斜位の擦痕と摩滅面が見られる。1点。

剥 片 (挿図47-21~23, 図版12-1)

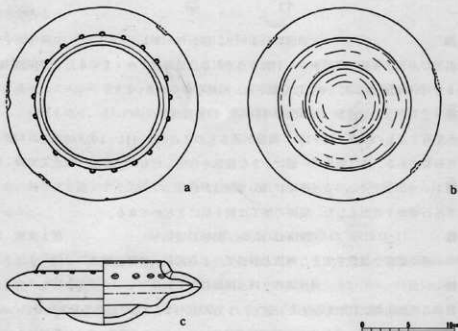
8点のうち、縦長剥片5点、横長剥片1点、不定形2点。1点のみ玉髓製で、他は下呂石製である。打面にハンチ痕を残すもの(22)、縁辺に使用痕のあるもの(21)、石核に転用したものの(23)各1点がある。

台 石

調理もしくは工作用の台石と思われる。流紋岩製の台形をなす自然石であり、床面上に置かれていた。

削 片

180点余りの削片が床面及びピット内に特に集中してみられた。数量は下呂石・チャート・玉髓の順。石器製作時の石くずであろう。



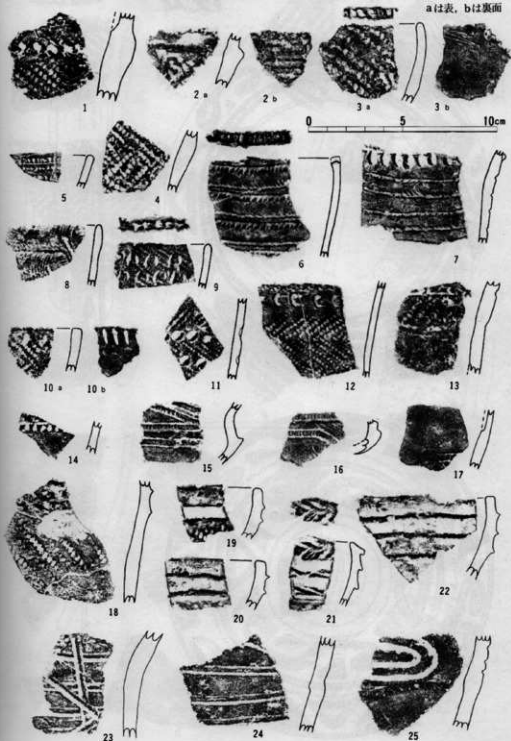
第1号 住居址出土の浅鉢



挿図44 第1号住居址出土遺物(土器)

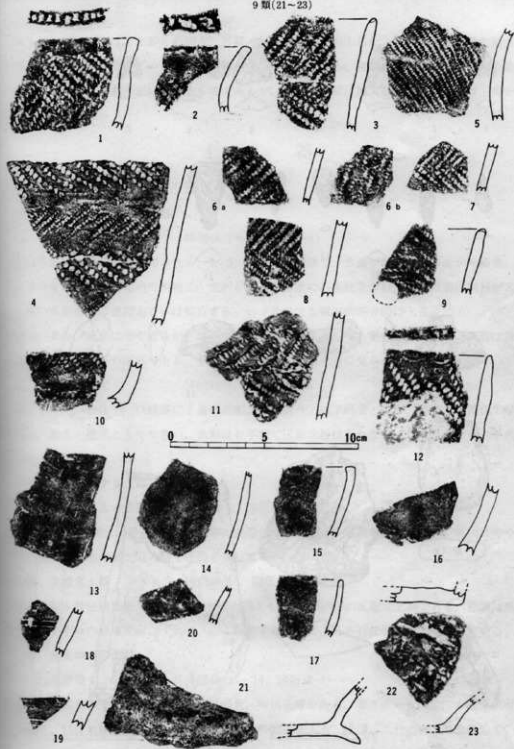
第1群・5類(1) 第2群・1類(2~4) 2類(5~17) 3類(18~22) 4類(23~25)

aは表, bは裏面

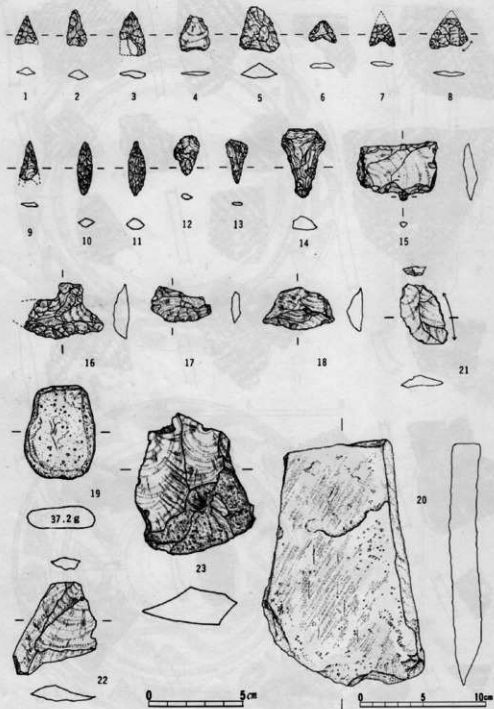




博图46 第1号住居址出土遺物(土器) 第2群・5類(1-12) 7類(13-17) 8類(18-20)
 9類(21-23)



神团47 第1号住居址出土遺物(石器)



2. 第9号住居址の遺物

第9号住居址からは、土器片約70点、石器・剥片類13点が出土した。住居址の西半部が過去の調査による攪乱を受けているため、遺物が少ないのであろう。遺物は、1点の須恵器片を除くほとんどが縄文前期中葉に属するものであるが、第2群9類に編入した撫糸文土器は、やや古い様相を持つ。

土 器

第2群土器（縄文前期の土器）

2類 爪形文を施す土器

A. 連続爪形文（挿図48-1～6, 図版12-3）

連続爪形文と刺突文が併用される。1, 2, 3は同一個体で、表面が暗褐色、裏面が明褐色、厚さ3～4mm。焼成は極めて堅緻で、光沢がある。胎土に石英粒を含む。口唇内側に刻目が入り、深い爪形の列は直行あるいは蛇行する。ヘラ先による刺突が部分的に入る。

4, 5, 6は、焼成はやや劣るが、厚さ3～5mmの暗褐色を呈する堅い土器である。爪形は浅く、6は両端部のみの圧痕である。D字状の刺突が2列逆方向に見られる。

B. 縄文と爪形文（挿図48-7, 8, 図版12-3）

7, 8は同一個体で、口縁部に2条の爪形文列があり、以下縄文となる。色調は暗褐色で厚さ4mm、胎土・焼成ともやや悪い。爪形はD字状で区画沈線はもたない。口唇は角張り、平坦である。

3類 突帯を有する土器

A. 突帯文と縄文の併用（挿図48-9, 図版12-3）

9はLRの縄文地に、断面がカマボコ形の突帯が付けられる。暗褐色、厚さ4mm、焼成はやや劣る。胎土中に木の葉が混入して圧痕を残している。

4類 沈線文土器（挿図48-10, 図版12-3）

10は、第1号住居址出土の諸磯a, b式土器とも異なる関西系の沈線文土器である。色調は黒褐色、厚さ4mmの焼成堅緻な土器で、巾4mmの半截竹管による平行沈線が数条引かれている。

5類 縄文のみの土器

A. 関西系縄文（挿図48-11～14, 図版12-3）

薄手の縄文土器で、色調は暗灰色、暗褐色、明褐色等がある。厚さ3～5mmで、大部分が羽状となる。11は口縁部破片で、口唇に真上からの刻みが入る。12は、これのみ繊維を含んでいる。13の内面には擦痕と指痕が残る。14は、内面にタール状のこびりつきが見られる。

B. 関東系縄文 (挿図48-15~17, 図版12-3)

色調が赤褐色, 暗褐色の厚手粗製土器である。3個体24片が検出された。15はRLの単一斜縄文で、ループ文が見られる。厚さ8mmで、焼成は良好であるが、柔らかい感じのする土器である。16は、LR 2.2cmの原体を並列して施文する焼成の良い土器で、厚さ7mmである。17は縄目が粗く、深い。

C. 中間形縄文 (挿図48-18, 19, 図版12-3)

18は口唇が平滑で、やや外側にはみ出す深鉢口縁部である。色調は赤褐色で、厚さ6mm。焼成は良く、胎土も精製されている。19は繊維の混入が顕著である。色調は暗灰色で厚さ6mm、焼成は良く、堅い。

7類 無文土器 (挿図48-20, 21, 図版12-3)

薄手無文土器は5点で、色調は明褐色・褐色を呈し、厚さは3~4mm。よく精製された堅い土器である。20の口唇部には刻目が入る。

厚手のもの(21)は1点で、色調は赤褐色、厚さ8mmで粗製である。

9類 底部及びその他の土器 (挿図48-22~25, 図版12-3)

底部は2点出土した。22は、赤褐色、9mmの平底で滑沢がある。23は胎土に3~5mm大の砂粒を多く含み、粗雑である。色調は褐色を呈し、厚さ5mmである。

その他の土器として、撚糸文の破片が2点ある。24、25は底部に近い部分で、恐らく丸底になると思われる。表面が暗灰色、裏面が黄灰色、厚さ4mmで焼成はよく胎土はきめが細かい。

石 器

石 鏃 (挿図49-1, 2, 図版12-4)

下呂石製長身凹基鏃(1)1点、チャート製長身鏃先端部(2)1点の計2点がある。

彫 器 (挿図49-3, 図版12-4)

3は青チャートの板状剥片先端に加工を加えて尖らせ、最終的に80°の角度で楯状剝離を行って彫刻刀面を作り出している。

剥 片 (挿図49-4, 5, 図版12-4)

8点で、頁岩製1点、他は下呂石製(4、5)である。不定形剥片が多く、縦長剥片は1点のみである。

石 核

下呂石製。石鏃コアの残核である。

插图48 第9号住居址出土文物(土器)

第2群·2類(1-8) 3類(9) 4類(10) 5類(11-19) 7類(20,21) 9類(22-25)

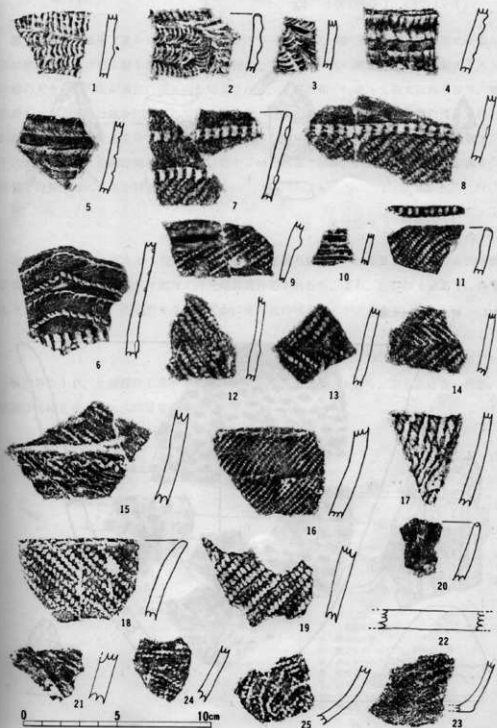


插图49 第9号住居址出土遗物(石器)

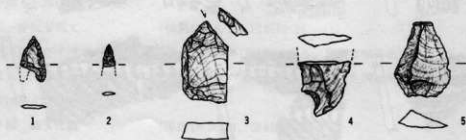
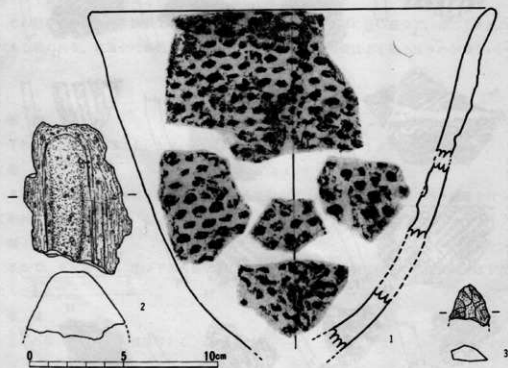


插图50 第2号土坑出土遗物



3. 第2号土壌の遺物

土 器 (挿図50-1, 図版13-1)

第2号土壌第III層下底から第IV層上部にかけて(-90cm), 礫の集積とともに押型文土器片17点が検出された(第1群1類B b)。7点が接合して11×8cm大の破片となった。最大8×5mmの粒の大きい楕円文が横位に深く回転施文される。下部にゆくに従って施文は浅くなり、無文部分もある。器形は僅かに外反して開く鉢形で、口径20cm, 推定高は20cm未満の浅いものと思われる。口縁部は丸みを帯び、手づくねの無雑作な造りである。胎土は砂粒を含む粗製で、若干の繊維も含む。色調は褐色。厚さは口唇で7mm, 胴部で12mm, 内面は荒れて凹凸がある。口縁部と口唇内面にススが附着する。

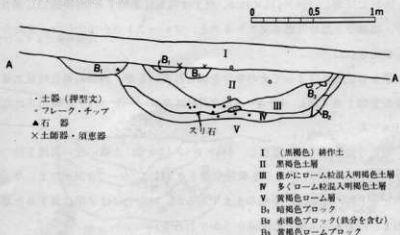
石 器 (挿図50-2, 3, 図版13-1)

流紋岩製スリ石の破片1 (2)がある。台形で長軸方向に擦られるII型, いわゆる特殊磨石に属する。石鎌 (3)は, 片面加工の先端部破片で下呂石製, 1点。剥片は4点あり, いずれも下呂石で縦長2点, 不定形2点, わずかに使用痕の残るものが2点ある。

そ の 他

須恵器片1点, 土師器片1点が本土壌覆土第I層下底より出土した。須恵器は甕の胴部, 土師器は沈線を伴い, ススの付着が顕著である。

挿図51 第2号土壌土層断面図



4. 第5号土壌の遺物

土 器 (挿図52-1~4, 図版13-2)

第5号土壌第Ⅶ層(深さ60cm)より出土した土器は28点で、うち6点が接合する。

1は絡糸体による条痕が浅く施文される厚さ11mmの深鉢土器破片で、色調は明褐色。胎土はやや粗であるが焼成は良く堅い。内面は滑沢があり繊維を含む。同一個体15片。第1群5類に分類される。2は羽状縄文の口縁部で、口唇は角ばる。色調は黒褐色、厚さ6mm、焼成は堅緻で繊維を混入する。3は口唇に刻目入りの刺突文土器、4も刺突文で、内径はわずか3mmの底部に近い破片である。その他不明の小片10点あるが、これらはいずれも早期に属するものであろう。

石 器 (挿図52-5~8, 図版13-3)

下呂石製石鏃が3点ある。5は有茎で先端を欠損する。6はごく小形の三角鏃で、7は先端が鈍く、製作途中の三角鏃であろう。削器(8)は横長剥片にリタッチを加えたもので、三角形の二辺が使用され、下呂石製である。その他下呂石削片28点、チャート削片2点、黒曜石削片1点、下呂石製残核1点が出土した。

5. 大ピット内の遺物

(挿図52-9~12, 挿図53, 図版13-3)

A区では、径1mから1.8mに達する大ピットが4箇所検出された。

大P₁は、東西90cm南北111cm、深さ16cmの浅い円柱状をなし、黒褐色土とロームの混入する褐色土で満たされていた。遺物は上部において下呂石製片脚鏃1点が出土した(9)。

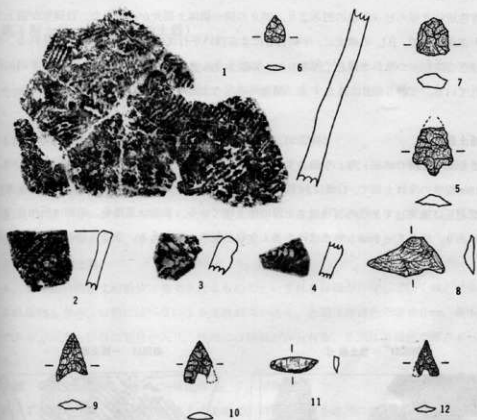
大P₂は、大P₁に隣接し、108×115×45cm、覆土は複雑に累積するが(挿図53)、第Ⅳ層粘質の褐色土層より、微細な土器片(撚糸文?)4点と、フレーク1点が出土した。また少量の炭と植物炭化物も検出された。

大P₃は、第4号住居址によってその半分を切られているが、内部の褐色粘質土層中より、青チャート製鋳型鏃1点(10)、赤チャート製半月形スクレパー1(11)が検出された。規模は、76×85×11cmであった。

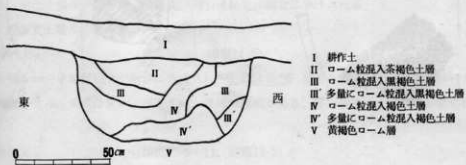
大P₄は、第2号建物址のP₃に重複し、184×176×42cmで、土壌に近い規模を持つ。硬質のローム混じり褐色土層中より、チャート製鋳型鏃1点(12)、フレーク1点が出土した。

これらのピット群の性格は、不明のままであるが、時期的には早期に属すると思われ、押型土器の出土した第2号土壌との関連がうかがわれる。

挿図52 第5号土墳出土遺物(1~8)
大ピット出土遺物(9~12)



挿図53 大ピット2土層断面図



6. その他の遺構の遺物

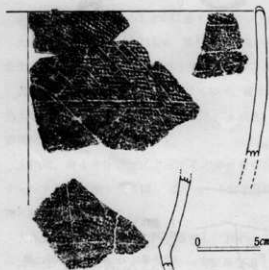
一括土器① (挿図54、図版13-4)

7号住居址北部のビット状の凹みより、35点の同一個体土器片が出土した。口縁部が直上する大形深鉢土器で、RLの縄文に、半截竹管による浅い平行沈線が横位・斜位に施される。口唇に小さな突起がつく。赤褐色で厚さ9mm、砂粒を多く含む焼成はやや弱い。裏面は平滑に研磨されている。2群5類Bに該当する。関東諸磯系土器であろう。

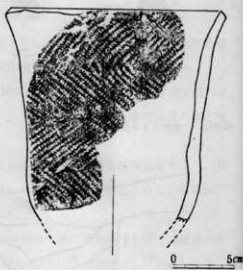
一括土器② (挿図55、図版13-5)

第1号建物址西のビット内より接合する5点の土器片が一括して出土した。推定高さ20cm、口径16cm程度の深鉢土器で、口縁はわずかに外反し、胴部が少しくびれる。撚りの異なる4cmの縄で交互に施文して2段の羽状縄文土器に仕上げている。表面は黒褐色、裏面は灰褐色で、凹凸があり、厚さ7~8mm、胎土は砂を多く含む粗製の土器である。やはり諸磯系と考えられる。

挿図54 一括土器①



挿図55 一括土器②



7. 遺構外の遺物

土 器

第1群土器（縄文早期の土器）

A区・B区において、早期に属する数種の土器の出土をみた。A区では第2号土壌で検出された押型文を除く押型文・燃糸文・条痕文土器が数点ある。

〈A 区〉

1類 押型文土器B 楕円文 （挿図57-1～3，図版14-2）

1，2は細身の山形文で、一山17mm，横位に回転施文されている。刻みの列は7段以上ある。色調は赤褐色で砂粒を含み，厚さ7mm，焼成は普通である。

3は，明瞭でないが5mmの楕円文が浅く施文されている。わずかに反りをみせる。色調は赤褐色で胎土に雲母を含み，厚さ7mmである。裏面に斜位の条線が見られる。

2類 燃糸文土器 （挿図57-4，5，図版14-2）

4，5は粗い燃糸文が斜位に施文されるもので，いずれも口縁が外反して開く器形である。

4は繊維を含み，口唇にはへらによる連続刺突が巡る。色調は赤褐色で厚さ8mm，焼成は良好である。5も口唇に刻目が入り，外面には擦痕がみられる。色調は茶褐色で厚さ6～8mmである。

3類 条痕文土器 （挿図57-6，7，図版14-2）

6，7は繊維を多く含む粗雑な胎土の土器で，口縁部(6)は小波状に突起し，表裏に粗い条痕が施文される。明褐色で厚さ8mm。茅山式に類似する。

〈B 区〉

B区では明瞭な遺構は確認されなかったが，小破片を含めて200点あまりの早期の土器片がかなりのまとまりをみせて出土している。この中には，当地方では類例の少ない押型文資料もみられる。出土土器は，押型文，燃糸文，押引沈線文，縄文に分けられる。

1類 押型文土器

B，楕円文a （挿図57-8，図版14-2）

8は長軸5mmの中粒穀粒文が横位に施文され，色調は褐色，長石を主体とする細かい砂粒と，僅かに繊維を含み，焼成は良い。厚さ7mm，裏面に擦痕がある。また輪積による痕跡が見られる。

B，楕円文b （挿図57-9～11，図版14-2）

9，10，11は2mmの極小穀粒文の横位施文で，口縁は直上し口唇は丸みをもつ。色調は赤褐

色。石英粒・雲母を多く含む粗雑な胎土で焼成は弱い。厚さ9mm、同一個体8片がある。

C、複合押型文 (挿図57-12, 図版14-2)

12は、一山7mmの綾杉に近い鋭い山形と、長軸8mmの細長い楕円文が並列して施文される。黄褐色厚さ6mm、長石粒を含み焼成普通。

D、格子目文a (挿図57-13~20, 図版14-2)

13~15, 19は、原体巾3.5cm、6列を1単位として横位に回転させており、刻みの列は70°の角度をなして斜行する。格子目は2×3mm角である。1cm巾の無文帯がある。色調は桃色^(註1)がかった褐色で、胎土中に赤褐色の風化した有色鉱物(紫蘇輝石、角閃石)を含む。焼成良好、厚さは4mm、同一個体17片が検出された。

同類の格子目文は他に21片がある(16~18, 20)。20は格子目が矢羽根状になる。

D、格子目文b (挿図57-21~23, 図版14-2)

21~23は格子目が2×3mm角の市松文様になるもので、同一個体23片の一括資料である。口径は推定32cmで、器形は僅かに外反する鉢形を呈し、口唇は角ばる。色調は赤味を帯びる褐色で厚さ6mm、砂粒を多く含み焼成は普通であるが、器面が荒れてもろくなっている。施文は口縁部から縦位に回転される。

E、スタレ状押型文a (挿図58-1~8, 11, 12, 図版14-3, 図1-1)

原体は図1-1の様に想定される。1~8は横位に2mm巾の平行刻線と、これを中央で切る一条の刻線が入るもので、2個体44片がある。1は、器形が僅かに外反する鉢形で口唇は尖り気味である。口縁から垂直に回転施文され、原体巾20mm1単位6列である。色調は褐色で厚さ7mm、砂粒を多く含み焼成は普通。2, 3は口縁部の外反がやや強く、口唇は丸みを帯びる。縦位にやや斜め方向に施文される。色調は明褐色で厚さ7mm、砂粒を含み焼成はやや悪い。

3は口縁下に径3mmの刺突がある。

11, 12は刻み目がより細長く、施文も浅い。色調は明褐色で焼成は良く、厚さ4mm、内面にススが付着する。

E、スタレ状押型文b (挿図58-9, 10, 図版14-3, 図1-2)

9, 10の原体は図1の2の様であると思われる。原体巾は3.5cmで段差のある刻みが斜めに施され、器体に対し斜位に回転施文される。aに比較して刻みの線が長く、aにみられる中央線も無い。表面は褐色でススが付着しやや荒れている。裏面は暗灰色で滑沢がある。胎土には微細な雲母片を含み、焼成は良い。厚さ6mm。同一個体7片がある。

2類 摺糸文土器 (挿図58-13, 14, 図版14-3)

13, 14は細かい網目状の摺糸文土器で色調は赤褐色、厚さ4mm。砂粒を含み焼成は悪い。口縁部は凹凸があり、口唇は丸みを帯びる。同一個体6片がある。

4類 押し沈線文土器 (挿図58-15、図版14-3)

15は横位に細い押し沈線が数条引かれ、表面全体に斜めの擦痕が走る。暗灰色で厚さ8mm、長石粒を多く含み、また繊維も微量に認められる。貝殻沈線文土器に伴う早期の土器である。^(註2)

5類 縄文土器 (挿図58-16~21、図版14-3)

斜行縄文42点の破片のうち、縄目の粗い羽状1点(16)、細かく厚手のもの4点(17、18)の前期土器以外は、全て同一個体に属する尖底土器である(19、20、21)。色調は赤褐色で厚さ5mm、石英等の砂粒を含み、焼成は悪い。表面にスガが付着する。口縁部は外反して開く。尖底部 21はほぼ90°で鋭く尖り末端まで縄文が施される。

B区ではこれらの早期土器の他に、隆起文、沈線文、撫糸文、無文の土器片が計16点あり、いずれも、縄文中期に属するものである。第3群の項で触れることにする。

第2群土器(前期土器)

〈A、C区〉

A区において、第1号、第9号住居址及びピット内から出土したもの以外の縄文前期土器は、他の時期の住居址の覆土内出土364点、その他のグリッド出土331点で、これにC区出土の40点を合わせて計735点が認められる。全て攪乱層に含まれていた破片であり、別の新しい時期の住居址構築の際に、混入したものと推定される。識別可能な土器413点について以下に分類を行った。

1類 条痕調整のある土器 (挿図58-22~26、図版14-3)

条痕調整のある土器をここに分類したが、資料は極めて微量であるため詳細は不明である。時期的には木島式あるいは北白川下層I式頃に該当する。一部条痕の不明瞭な無文土器は7類に編入した。22、23は表裏に浅い条痕を残す暗褐色の土器で、若干の繊維を混じえる。厚さ9~10mmで焼成は普通である。24は4mmの薄手灰色土器でわずかに条痕調整をみる。25は裏面に条痕があり、表面は方向の異なる縄文間に、縦位の押し縄文が2段に施文される。厚さは僅か3mm、褐色で焼成は堅緻である。26は表裏に細い条痕が走り、表には無雑作な沈線が数条引かれる。厚さ6mm、黄褐色で繊維を少量混じえ、焼成は良い。

2類 爪形文を施文する土器

A、連続爪形文 (挿図58-27~36、図版14-3)

連続する爪形の中の内側のもの(27、29)、両端のみの圧痕で中央が無文で残るもの(30、31、32、35、36)隆起帯を伴うもの(32、34)、爪形文間に逆向きの刺突が加わるもの(33)等がみられる。色調は褐色が主体で厚さ4~5mm、焼成は一般に良好であるが、胎土が赤褐色で薄手



図1 スダレ状押し文の原体の

のもの(35, 36)は地方色が感じられる。

B, 縄文と爪形文の併用 (挿図59-1~3, 図版14-4)

縄文を伴う突き刺し爪形文土器で、口縁の直上する鉢形土器である。1, 2は同一個体で上部に平行細線を伴う爪形文の直線状、連弧状の文様帯を構成し、下部は縄文(恐らく羽状)のみである。黄褐色で厚さ4mm, 砂粒を混じえ焼成はあまり良くない。3は暗褐色で厚さ3mm, 堅い焼きである。

C, 縄文のない爪形文土器

a (挿図59-4~15, 図版14-4)

5, 6, 7は細線を伴わない爪形文と平行沈線が施されるもので、5の爪形はD字状である。6には貫通孔がある。4, 8~15は細線を伴う小さな爪形の列が平行あるいは交差して施文される。色調は明褐色を主体とし、厚さ3~4mmで焼きしまりがある。

b, 縄文のない爪形文土器(関東系) (挿図59-16~18, 図版14-4)

縄文を伴わない爪形文土器であるが、6~7mmの厚手で雲母を含む諸磯系の土器である。16は口縁平滑で平行爪形文間に刻目と貫通孔を持つ。裏面は赤褐色でよく磨かれている。17は口唇に刻目が入り、その下に波状の浅い沈線、そして爪形が直線的に施される。18は爪形の列の何段おきかに斜めの沈線が入る。

3類 突帯を有する土器

A, 突帯と縄文の併用 (挿図59-19~22図版14-4)

突帯文と縄文の組み合わせを持つ土器で、北白川下層II C式に対比されるものである。19, 20は、口縁部文様帯に断面三角の突帯をハシゴ状に貼りつけ、胴部は縄文となる。突帯には刻目が入り縄文には結節がある。20の縄文は中央で方向を変更させてX字状の変化を出している。色調はおおむね暗褐色で厚さ5mm, 焼成堅緻な土器である。なお突帯上に縄目の入るものが1点のみあり、色調・胎土とも共通である(21)。22は突帯に刻目は入らず、明褐色、厚さ7mm, 砂粒を多く含む軟らかい感じの土器で、これのみ関東系であろう。

B, 無文地に突帯 (挿図59-23~30, 図版14-4)

突帯に爪形文や刻目が入り、素地は無文の類である。突帯はほぼ三角で、直線・曲線・弧状等がある。焼成は良好で滑沢のあるもの 23~27と、著しく不良で胎土の粗のもの 28~30とがみられるが、厚さはともに5mm前後である。24は口縁部破片で、口唇の一部に刻目をもつ鉢形の土器である。30は内湾する口縁部破片で口唇は平坦である。

4類 沈線文の施される土器

A, 諸磯a式系沈線文土器 (挿図59-31, 32, 図版14-4, 挿図60-1~6, 図版15-1)

竹管による平行沈線や刺突がみられる、諸磯a式類似の土器である。厚さ6~7mm, 赤褐色

で雲母片や長石粒を多く含む焼成は良い。挿図 59-31は櫛状工具による沈線と竹管円文の組み合わせ、32は沈線のみ、挿図60-1、2は幾何学文、3は貫通孔のある磨消縄文土器である。

4-6はへら先による数条の直線（ろっ骨文）あるいはコンパス文で文様帯を構成する。器形は波状口縁の深鉢土器で、口唇に刻目、口縁下に沈線と円形の刺突がみられる。暗褐色で厚さ7mm、雲母片を含む焼成の良い土器で、表面にススが附着する。

B、諸磯b式により近い沈線文土器（挿図60-7、図版15-1）

7は諸磯b式により近い沈線文土器である。へら先沈線による幾何学文と、刻みのある隆帯を持ち、厚さ10mm、雲母を含む焼成は良い。列孔浅鉢土器の一部かと思われる。

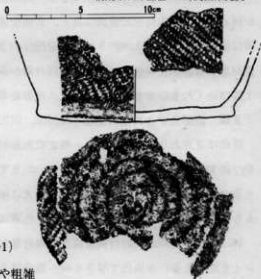
5類 縄文のみで構成される土器

全面に縄文をもつ土器を一括した。判別しうる限りにおいて、RL119点、LR66点、羽状68点が認められる。羽状縄文には原体を連結したものが少量ある。Aに関西系、Bに関東系、Cに中間形態を分類した。その量的比率はおおよそ5:3:2である。

A、関西系縄文（挿図60-8-14、図版15-1、挿図56、図版14-1）

北白川下層II式中に編年されるものである。器厚3-4mmの薄手で色調は褐色・暗褐色が多い。胎土は密で焼きしまりがある。縄目は細かく、原体内は1.5-2.5cmである。(8、9、10)口縁は平ら①①、もしくは刻目が入り①②、平底底部から単純に鉢形に開く器形が多い様である(挿図56)。13は裏面口縁下に、1条の爪形文帯がある。14は裏面にRLの縄文が施文される。

挿図56 遺構外の遺物5類縄文のみで構成される土器 A、関西系縄文



B、関東系縄文（挿図60-15、16、図版15-1）

器厚6-9mmの厚手で、砂粒の混入の多いやや粗雑な土器である。雲母を含むものも多い。色調は赤味を帯びた褐色を主体に、明褐色・暗褐色等がある。裏面が磨かれて滑沢のあるものが比較的多い。器形は、頸部がややくびれる深鉢であろう。縄目は一般に荒く、原体内は3cmを越えている。16は原体端部によるループが見られる。

C、中間形縄文（挿図60-17-22、図版15-1）

A・Bいずれにも分ち難い、いわば中間形態のものを一括した。厚さ5mm前後で、焼成の良い、縄の粒の粗いもの①①や、赤褐色を呈する焼成の弱い薄手の土器①①等があり、胎土であえ

て分ければ前者はA、後者はBにより近い。前者がやや優位を占める。19にはループが見られ、20は原体連結の羽状縄文である。

6類 刺突文土器 (挿図61-1~4, 図版15-2)

列点状の刺突文を施文する土器で、北白川下層IIa式に共存する様である。色調は明褐色ないし赤褐色を呈し、3~5mmの薄手で焼成は良い。口唇には刻目が入り、口縁下に横位の点列が1cm前後の巾で数条施される。(1~3)。4はこれらとは異質の刺突文土器である。黒褐色を呈し厚さ10mm、若干の繊維を混じえ内面には滑沢がある。口縁下に1列の刺突、その下に巾1cmの斜行沈線帯がありさらに3列の刺突がある。刺突は3~5mmの巾、深さをもち、ねじ込む様な形である。

7類 無文土器 (挿図61-5~8, 図版15-2)

無文の土器でいずれも小破片のため器形などは不明である。一般に薄手(3~4mm)で硬質であり、暗褐色・暗灰色が多い。擦痕・指痕・滑沢のあるもの等がある(7, 8)。口縁部破片(5, 6)には口唇に真上からの刻目が入る。

8類 丹彩土器 (挿図61-9~12, 図版15-2)

9は碗形土器口縁部で無文、厚さ4~6mm。口唇は内側に折り込まれ、内面にはヘラ削り痕が残る。胎土は赤褐色で焼成は良く、表面全体に塗彩される。10は2条の爪形文帯の間と口唇に塗彩がある厚さ3mmのきゃしゃな造りの土器である。11も口縁部破片で、口縁無文帯に塗彩される。厚さ6mm。12は表裏に丹彩がみられ、浅い沈線が入る。厚さ6mm。10~12の土器はいずれも胎土表面が白っぽく、丹彩効果を高めている。焼成も良い。

9類 底部及びその他の土器 (挿図56, 図版14-1, 挿図61-13~15, 図版15-2)

底部は3点あり、概して平坦・無文であるが、挿図56の土器底部は、渦巻の浅いナデ痕が残り、縄文が施される。底部からの立ち上がりで若干のくびれを有する。

その他の土器として、13は縄文の地文に粘土紐による浮隆線が幾本か平行に貼り付けられるもので、十三坊台式に対比されよう。色調は赤褐色、厚さ7mmで胎土・焼成ともやや悪い。

14はL摺りの細かい斜行縄文に波線の特異な縄文が組み合わされるもので、胎土に若干のセイを混じえる。赤褐色で厚さ6mm、焼成は良好で堅い。

15は頸部がくの字に折れて開く形の土器で、ループ文と縄の押圧がみられ他は無文である。表裏とも磨かれて滑沢がある。厚さ7mm、胎土は粗である。

第3群縄文中期の土器

A区より出土した縄文中期の土器は僅かに1点、B区からは16点であるが、C区第17号住居址からは100点あまりの土器が検出された。この地点はかつて、田中正太郎によつて調査され

た場所に近い(第1章参照)と思われる。恐らく中期の集落の主体となる地点は、今回の調査の区域外である糠塚の扇状地形最上部に存在するものと思われる。

〈A 区〉 (挿図61-16, 図版15-2)

A区の1点は把手付深鉢の破片で、粘土紐による突起が付けられ深い沈線が施される。表面は黒色、胎土は赤褐色の粗製の土器で、中期前葉に位置付けられる。

〈B 区〉 (挿図61-17~22, 図版15-2)

B区の土器は、無文地に刻目のある隆帯が垂下する波状口縁の土器で、口唇にも刻目が入るもの(17)、鋭い沈線が縦位にぎつりと刻まれる網代底の土器(18, 19)、沈線のみ土器(20)、横走LRの燃糸文土器(21, 22)及び無文土器で構成される。17は褐色で厚さ6mmの粗製土器、21, 22は明褐色で9mmの精製土器、他は赤褐色を呈する厚手(7~9mm)の粗製土器である。

〈C 区〉

C区第17号住居址に流れ込みの状態出土した中期土器は次の様に分類される。

1類 燃糸文土器

A 燃糸文 (挿図61-23, 24, 図版15-2)

燃糸文が斜め、あるいは縦に施文されるもので、10点ある。厚さ7~12mm、赤褐色、黒褐色、灰色等があり、焼成は普通、表面には滑沢がある。

B 沈線を伴う燃糸文 (挿図61-25~28, 図版15-2)

燃糸文を地文とし、これに半截竹管による弧状の細い平行沈線や刺突後押引の波状沈線が施文される里木II式の土器である。胎土には砂粒を多く含み、粗く、焼成はやや悪い。赤褐色、明褐色で口縁はキャリバー状を呈する。

2類 隆帯文土器 (挿図62-1~4, 図版15-3)

21点が出土し、船元式、加曾利EII式に類似する。キャリバー状器形で、波状口縁が隆帯で飾られ、竹管文が加わる(1, 2)。リボン状突帯(3)もあり、胴部以下は縄文あるいは沈線が施される。10~15mmの厚手で、胎土は粗く軟質である。

沈線のみ破片が1点(4)ある。色調は褐色で、厚さ8mmである。

3類 縄文土器 (挿図62-5, 6, 図版15-3)

縄文のみ破片が19点、これに沈線の加わるものが5点ある。口縁部に縄文の施されるものは2点で、他はすべて胴部である。厚さ7~10mm、赤褐色が主体で、焼成はあまり良好でない。

4類 無文土器 (挿図62-7, 8, 図版15-3)

35点のうち無文の口縁部破片が5点あり、7は口唇を折り曲げて肥厚させる。8は一条の沈線が入る。他の30点はいずれも胴部以下の部分である。1点のみ厚さ5mm、他は8~12mmで明褐色、暗灰色等があり、焼成は普通である。

5類 底部

(挿図62-9, 10, 図版15-3~5)

底部の破片は6片あり、いずれも平底で、9は擦痕、10には網代痕が見られる。

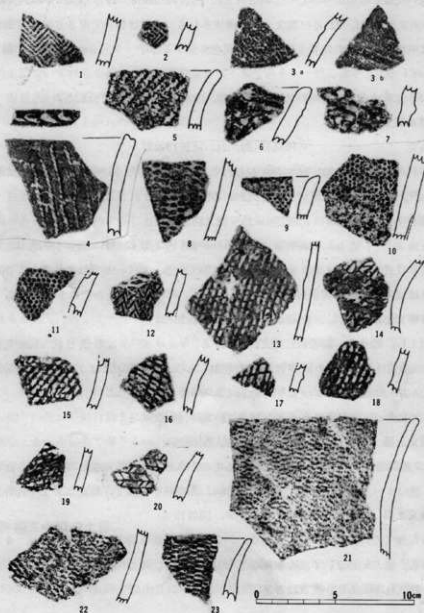
(註1) 石原哲弥の分析によれば、この風化産物は飛騨ローム層の広域軽石層に特徴的に含まれるものであり、従って、この土器が当地で焼かれた事を立証するものであろう。

(註2) 大江守 つばの遺跡出土土器 信濃19-1 1967

(註3) 鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—P33第11群土器
1979 福井県教育委員会

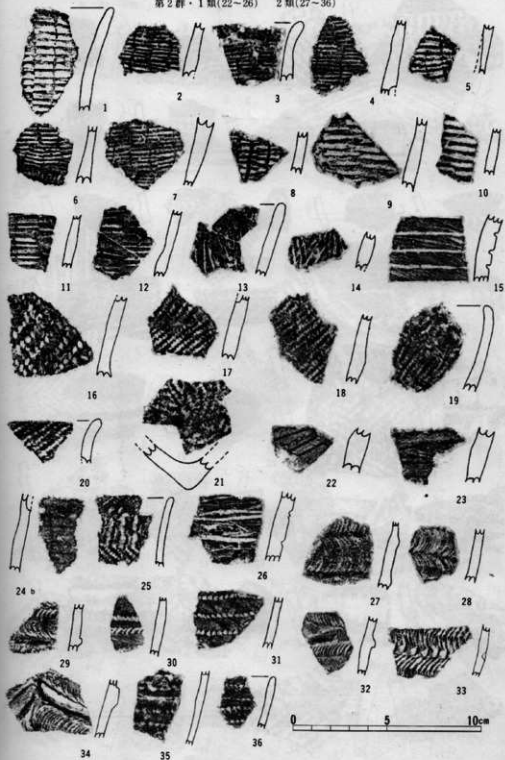
挿図57 遺構外の遺物(土器)

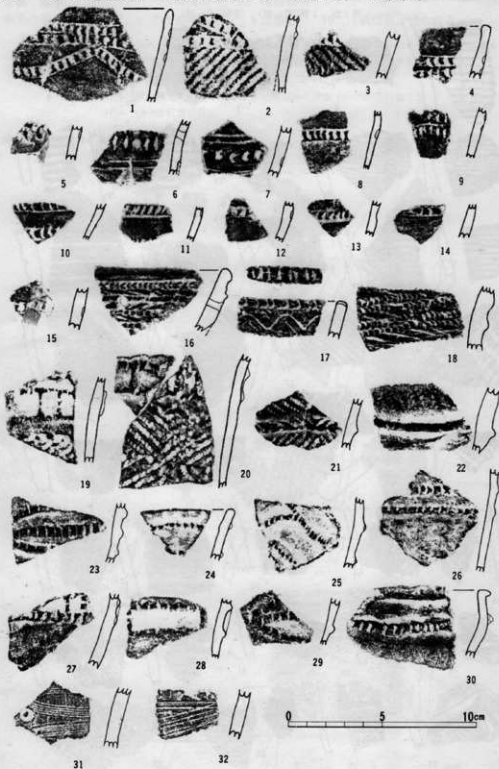
第1群・1類(1-3, 8-23) 2類(4, 5) 3類(6, 7)



挿図58 遺構外の遺物(土器) 第1群・1類(1~12) 2類(13,14) 4類(15) 5類(16~21)

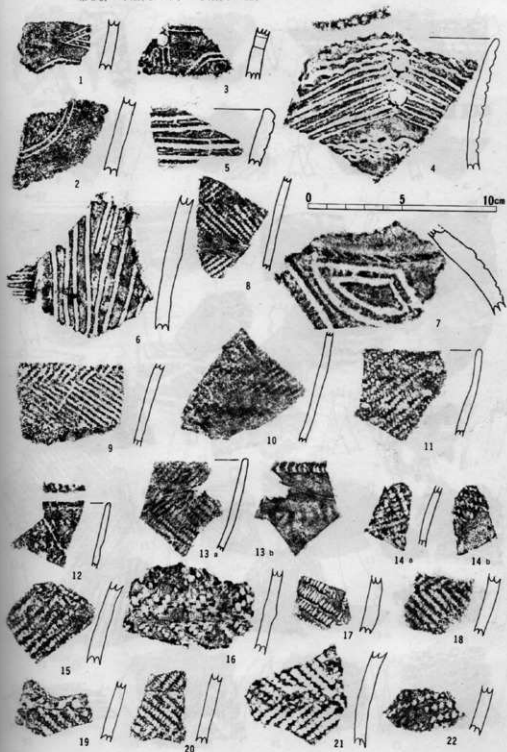
第2群・1類(22~26) 2類(27~36)





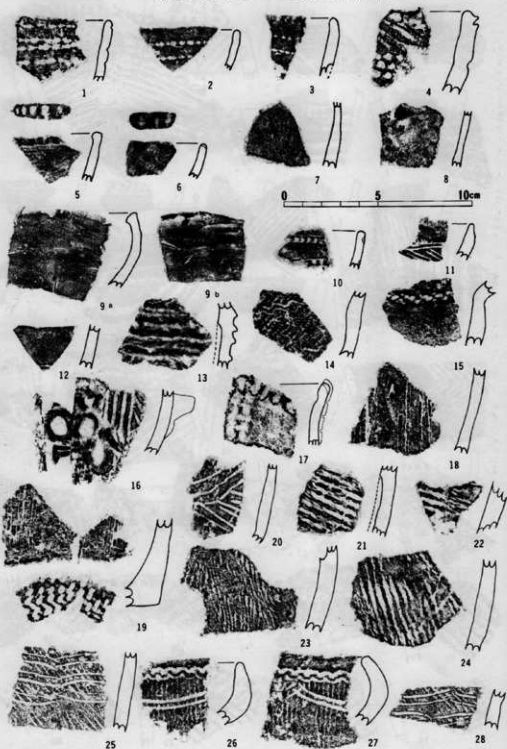
挿図60 遺構外の遺物(土器)

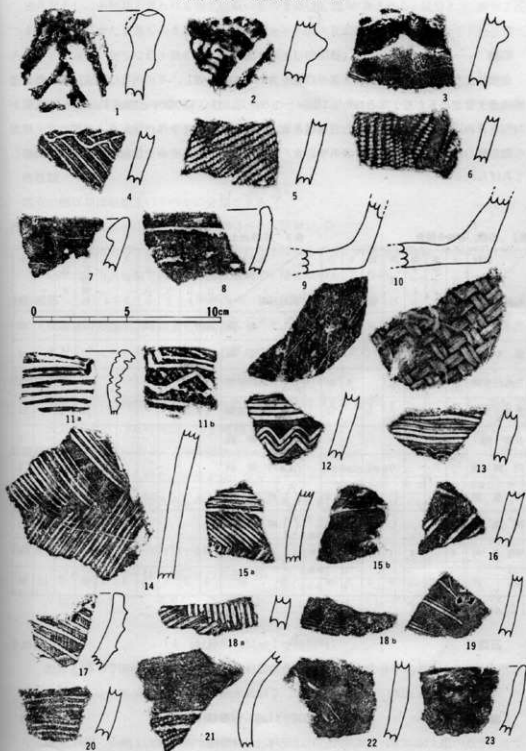
第2群・4類(1-7) 5類(8-22)



挿図61 遺構外の遺物(土器)

第2群・6類(1~4) 7類(5~8) 8類(9~12) 9類(13~15)
 第3群一括(16~22) 第3群・1類(23~28)





石 器

石鏃

(挿図63-1~64, 図版16-1, 2)

遺構外より出土した石鏃はA・B・C区を含めて83点に達し、その内容は別表に記した。遺構内出土を含めるとちょうど100点になるところから、百分率の数字と共通する。下呂石製が74%を占め、圧倒的に多い。また三角凹基鏃と長身凹基鏃とで全体の56%を占めている。片方の脚が短く作られる片脚鏃が8点あり、また鍔型鏃は全てチャートで作られる等が、特徴としてあげられる。

表2 石鏃、石材分類表

石鏃種類	下呂石	赤チャート	青チャート	黒曜石	頁岩	玉髓	小計
三角鏃	17		2	1			20
鍔型鏃			4				4
三角凹基鏃	23 (2)	1	2	3 (1)		3	32
長身凹基鏃	21 (4)		1	1 (1)	1		24
長脚鏃	4	2					6
凹脚鏃	2			1	1		4
有茎鏃	2						2
柳葉鏃	1				1		2
不明	4		1	1			6
合計	74	3	10	7	3	3	100

()は片脚鏃

石鏃

(挿図64-1~10, 図版16-3)

12点で、つまみを有するもの3点、その他は一端が尖る棒状のものである。

チャート製1点(2), 下呂石製11点で、7は長大精巧なものである。

磨製石斧

(挿図64-11, 12, 図版16-4)

2点の出土はいずれも破片で、12は定角、11は側縁が^{2.5}打₆のまま残る。蛇紋岩製。

表3 石鏃出土地点分類表

石鏃種類	S B	S B	S K	S K	大 P	大 P	A区 遺構外	B区 #	C区 #	小計
三角鏃	4			2			12		2	20
鍔型鏃					1	1	2			4
三角凹基鏃	4						24	1	3	32
長身凹基鏃	1	1					14	1	7	24
長脚鏃							6			6
凹脚鏃							4			4
有茎鏃				1			1			2
柳葉鏃							2			2
不明		1	1				4			6
合計	9	2	1	3	1	1	69	2	12	100

石匙

(挿図64-13~22, 図版16-4)

10点出土し、未製品と思われる加工の粗いもの3点(20, 22)が含まれる。縦型2点、横型2点、つまみが一方にかたよるもの6点で、材質はチャート20・頁岩04各1点以外は全て下呂石製である。13は薄い剥片に最小限の加工で石匙を作出している。

石槍

(挿図64-23~29, 図版16-3)

小型の石槍6点、大型の半欠品1点出土。チャート製は1点のみ27で他は下呂石製である。完形の個体25は、下ぶくれの木葉形石槍で中央が厚く作られ、先端部に再加工がみられる。

24は推定長10cmを越える両面調整の大型の槍で、両縁が平行し、弥生時代の石槍に類似する。

削器類

55点の削器類は形態上いくつかに分類できる。

円形削器

(挿図65-1~7, 図版17-1)

剥片のほぼ全周に剝離を加えて円形に仕上げたもので、両面加工5点、片面加工4点、いずれも下呂石製である。刃部は鋭利で、搔器状のものはない。

方形削器

(挿図65-8~10, 図版17-1)

直線状の刃部が二縁以上を構成するもので、形状は方形、平行四辺形になる。両刃3点、片刃2点。ピエス・エスキューと思われるものが1点00ある。

半月形削器

(挿図65-11~14, 図版17-1)

小さな剥片に湾曲した刃部を作り出し、形状が半月形をなすもので、いずれも片面加工。大P₃出土のもの(挿図52-11)と同類である。

不定形削器(外湾刃)

(挿図65-15~16, 図版17-1)

刃部が外湾するもので、片刃4点、両刃6点。片刃には搔器状のものが3点05ある。

不定形削器(直線刃)(挿図65-17~24, 図版17-1)

不定形の剥片の一縁に直線状の刃部が作り出されるもので、片刃が7点、両刃5点である。

その他

(挿図65-25~30, 図版17-1)

破片となって原形の不明なものあるいは加工部分がごく一部のものが計17点ある。削器、搔器、ノッチ等が含まれる。

打製石斧

(挿図66-1~19, 図版17-2)

A区18点、B区3点、C区9点の遺構外出土をみた。完形品14点、半欠品10点、破片6点で

表4 削器類石材分類表

	下呂石	チャート	頁岩	玉髄	黒曜石	計
円形削器	9					9
方形削器	2	3				5
半月形削器		1	1			2
不定形削器	外湾刃	7	1	2		10
	直線刃	11	1			12
	その他	8	5		2	17
計	37	11	3	2	2	55

形態の判明する個体に関しては、全て短冊型である。石質は安山岩11点、砂岩4点、緑色片岩13点、凝灰岩1点、玄武岩1点。最小6cm、最大16.5cm、平均長9.5cmであった。

すり石 (挿図67-1~11, 図版17-3)

20点のすり石は形態上3つに分類できる。

I型 円形、長円形で扁平な川原石の一面もしくは両面に磨耗痕のあるもの(1~6)

II型 細長い礫を素材とし、断面は台形でその上面に顕著な磨痕がみられるもの(特殊すり石)(7~10)

III型 長方形に6面を面取りした精巧なもの(11)

使用方法からみれば、I型は円運動、II型は前後の直線運動が考えられ、III型はその両者を兼備している。数量的には、I型12点、II型4点、III型1点、不明3点でI型が多い。使用石材は、I型が流紋岩11点、玄武岩1点、II型が流紋岩2点、砂岩、安山岩各1点。III型が安山岩。不明のものが流紋岩2点、砂岩1点である。

石皿 (挿図67-12, 図版17-3)

扁平楕円形の石皿の6分の1個体が1点出土した。石材は玄武岩で、一面がわずかにくぼみ、表裏面ともに磨痕をみる。

凹石 (挿図68-1~6, 図版17-4)

6点で、両面がくぼむもの1点(1)、他はすべて片面のみくぼむ(2~6)。すり石と兼用されるものが3点ある(2, 4, 6)。3が安山岩、4・6が砂岩、他はいずれも流紋岩の円礫を素材とする。

敲石 (挿図68-7~15, 図版17-4)

10点の出土はいずれも棒状の礫を素材とし、安山岩・凝灰岩・砂岩各1点、流紋岩7点である。加工痕は認められないが、ハンマーとして使用されたと考えられる。10のみ形態が異なり、両端に機能部があって使用痕が顕著である。いわゆる「トチムキ石」と呼称されるものと同類である。長方形で中央部がややくびれる形のもの(8, 9)は、「編物用おもり石」として使用された可能性もある。

石錘 (挿図69-1, 図版18-1)

流紋石の円礫の長軸両端部を打ち欠いた打製石錘が、1点のみ出土した。

块状耳飾 (挿図69-2, 図版18-2)

滑石製のあめ色を呈した块状耳飾片が1点出土した。切目に近い部分は厚さ5mmで薄く作られ、反対側は8mmで楕円形となる。推定形は直径3cmの円形で、孔の径は8mmである。

有孔石製品 (挿図69-3, 図版18-2)

蛇紋岩製の磨製石斧状によく磨かれた石製品で、両面から径7mmの孔が穿たれているが、位置

がずれて貫通はしていない。製作途中で折損して放棄された、垂飾品の一種であろう。

異形部分磨製石器 (挿図69-4, 図版18-3, 4)

A区 70 グリッドから完形の異形部分磨製石器(通称 トロトロ)が1点出土した。長さ7.6 cm, 最大巾は中央にあって3.1cm, 厚さ同じく0.9cmである。先端にはぶく丸みを帯び、僅かに巾を増しながら中央部で最大となり、再びすばまって独特な鋸型鋸状の脚部となる。くり込みの深さは0.8cm。完全両面調整で、正面右側縁からの剥離は2cmを越す見事な押圧剥離が斜位に並ぶ。石材はチャート製で、色調は灰白色の地に青灰色の縞が入る。左脚裏面を除く全体にロウの様な滑らかな感触を有するが、特に上半部は剥離痕が明確でないほど磨滅し、先端部に至っては完全に剥離面が失われて光沢を有する。重量は26.3g。

細石刃 (挿図69-5, 図版18-1)

第7号住居址の覆土中に1点のみ検出されたもので、頁岩製の細石刃と思われる。長さ3.6 cm巾0.5~0.8cmで、極めて薄く、湾曲する。打面は小さいが平坦で加撃点が残る。表面に大小3枚の、平行する剥離面を持っている。

剥片 (挿図69-6~17, 図版18-1)

内容は表5のとおりで、総数142点の70%を下呂石製が占める。次いでチャート製が19%、その他玉髓・頁岩・ジャスパー等が少量ずつある。黒曜石がほとんどみられないのは、入手困難な石材を石鏃等に十分に活用した結果であろう。

表5 剥片、削片石材分類表

	区	下呂石	チャート	黒曜石	玉 髓	頁 岩	ジャスパー	他	計
剥 片	A区	73(3)	24(6)	1(1)	2	2	2(2)	1 (黒ルンフェルス)	105
	B区	7	2(1)		3				12
	C区	23(3)	1					1 (燧石)	25
	計	103(6)	27(7)	1(1)	5	2	2(2)	2	142(8)
削 片	A区	154	52	17	13	2	1	2 (燧石)	241
	B区	11	5	3					19
	C区	31	13	4					48
	計	196	70	24	13	2	1	2	308

()内は、使用の痕跡のある個体

剥片の一部に使用の痕跡をとどめる個体が26点、20%ほどある。下呂石製の剥片で刃器状を呈するものは僅か4点(12, 13)で、ほとんどが不定形剥片である。石核の形状や、剥離技術にもよるものであろうが、むしろ、使用目的の相違が主要であろう。

削片

削片の石材比率は表のとおりであり、その率は剥片の場合と同様である。

石核

(挿図69-18, 図版18-1)

下呂石製10点, チャート製6点, 黒曜石製4点, 玉髓製2点で, 黒曜石・玉髓はいずれも残核である。チャート製のものには, 石質の良否を見るための打割を行ったと推定される個体がある。

(註1) 渡辺誠 飛騨白川村のトチムキ石 森井祐介君追悼記念考古学論叢 1980

(註2) ツルネ遺跡発掘調査報告書 P 25 高山市教育委員会 1978

第2節 弥生時代の遺物

弥生式土器の破片は約20片が検出されたが, いずれも他の時期の住居址内流れ込みの遺物に混じていたもので, 該当時期の遺構に伴う資料は無い。土師器との区分の明瞭でないものもあり, 確実な13点を図示した。A区1点, C区12点である。

(挿図62-11~23, 図版15-3)

11は表面に深い沈線, 表面にも沈線と縄文が施され, 黒褐色に入念に研磨されている。器形は口縁が大きく開く裏形で, 八角形になると思われる。

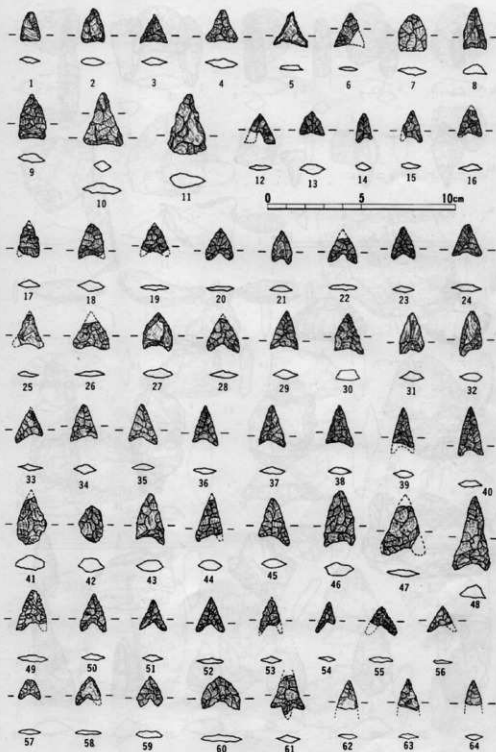
12, 13は, 直線と波状沈線, 14~18は羽状沈線を持つ。19, 20は条痕文, 21は壺頭部で下部に縄文が入る。22, 23は無文で, 以上いずれも明褐色を呈する。厚さは6~8mmで焼成, 胎土とも良好である。

これらの弥生式土器は, いずれも弥生中期に属するものである。11は大地式に類似するものであろう。

(吉 朝)

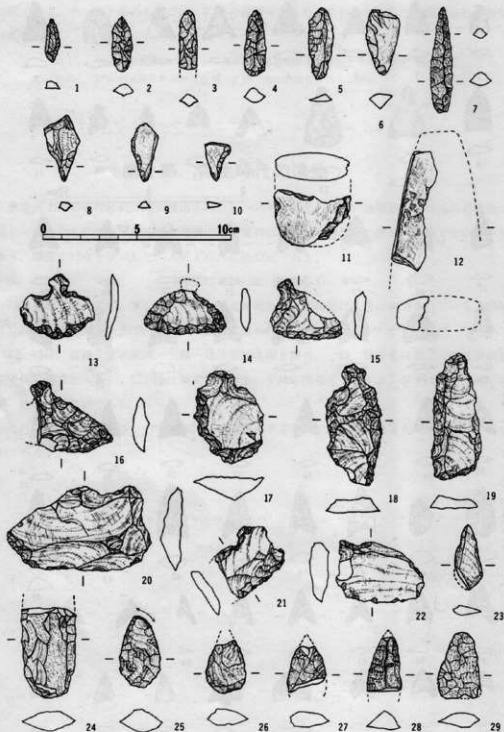
挿図63 遺構外の遺物(石器)

石鏢(1~64)



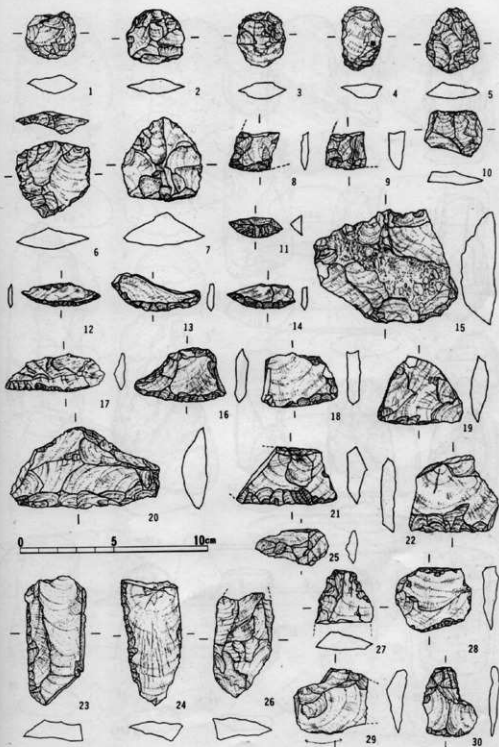
挿図64 遺構外の遺物(石器)

石錘(1-10) 磨製石斧(11,12) 石匙(13-22) 石槍(23-29)

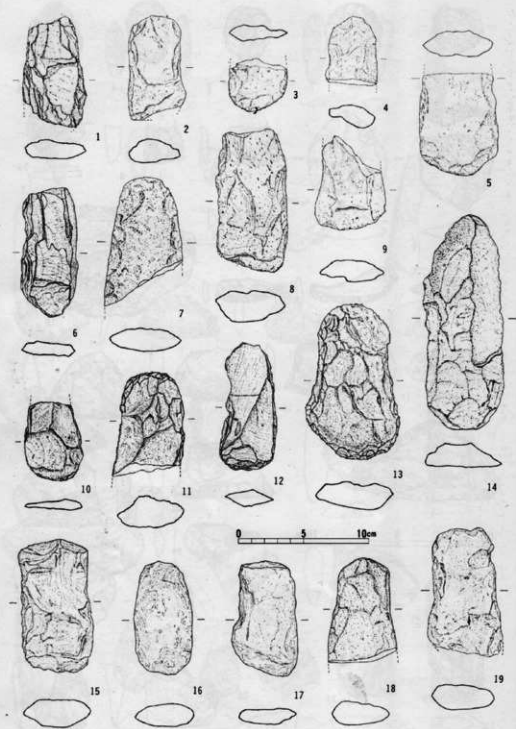


挿図65 遺構外の遺物(石器)

附図(1~30)

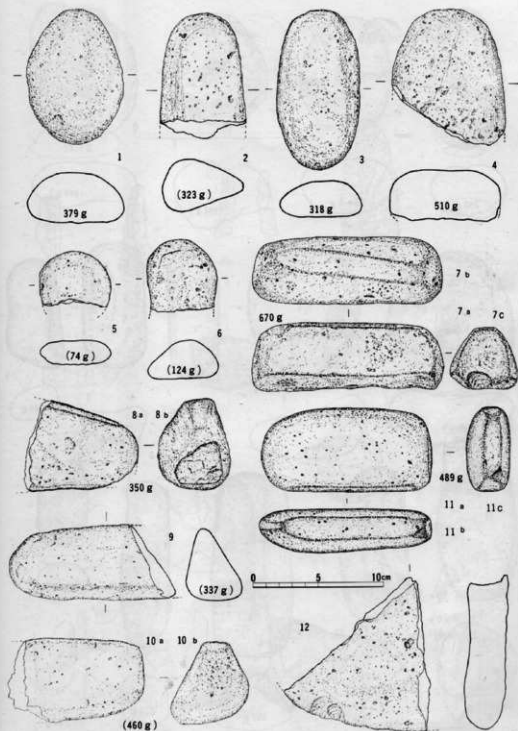


打製石片(1~19)



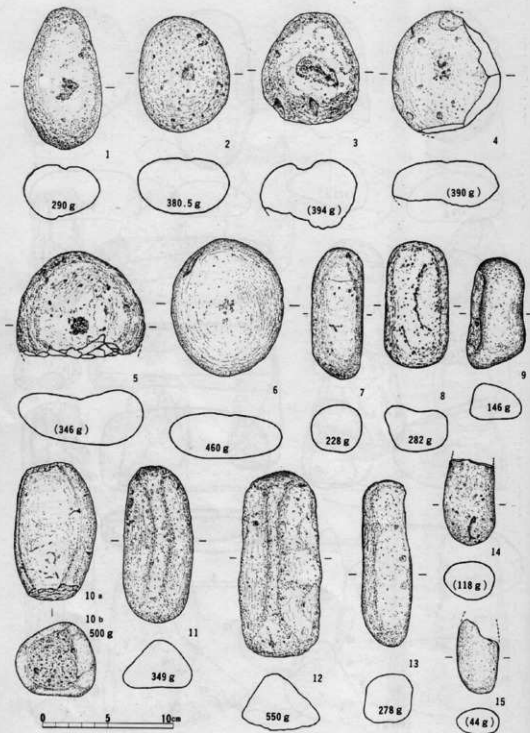
挿図67 遺構外の遺物(石器)

すり石(1-11) 石皿(12)

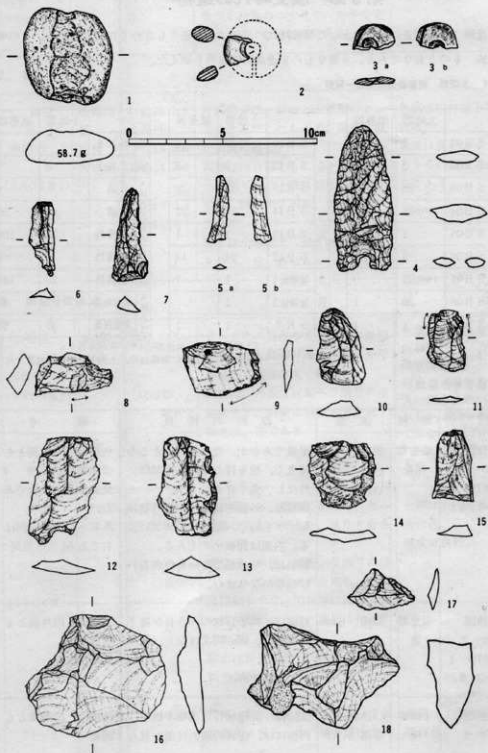


挿図68 遺構外の遺物(石器)

凹石(1~6) 敲石(7~15)



挿図69 遺構外の遺物(石器) 石鏃(1) 块状耳飾(2) 有孔製品(3) 異形部分磨製石器(4) 細石刃(5) 剥片(6-17) 石核(18)



第3節 歴史時代の遺物

本遺跡の発掘調査により出土した歴史時代の遺物は、小破片も含めて1060点である。その明細は表6のとおりである。主要なものを遺構別に説明を加えた。

表6 土師器、須恵器出土地点一覧表

		土師器	須恵器			土師器	須恵器			土師器	須恵器
A	S B 01	1	2	C	S B 10	17	6	C	S K 6		2
	S B 02	3	8		S B 12	8	3		区	S K 7	3
	S B 03	28			S B 13	33	28	A区	溝		4
	S B 04	2個体(5)			S B 14	26	22	C区	溝	44	95
	S B 05	1	(灰釉陶器, 1個体(7))	区	S B 15	1	1	A区	遺構外	25	159
	S B 06	9	3	A	S B 17	34	13	B区	遺構外	3	8
	S B 07	3個体(6)	9	区	建物址1	1	1	C区	遺構外	23	149
	S B 08	20	1	A区	建物址2	1		A区	表面採集	2	65
	S B 09	1	1	A区	S K 2	1	1	C区	表面採集	30	58

合計1060点 (土師器380片、須恵器654片、灰釉陶器7片
その外、表以外に陶器16片、土鍬1片、寛木通寶2片)

1. 第2号住居址

神宮寺号及び図版番号(出土地点)	器種	法量	器形の特長	備考
挿図 70-1 図版19-1 (S B 02覆土)	須恵器 坏身	器高 3.3cm (4分の1個) (体破片)	平底であるが、立ち上りのところは丸く、稜を持たない。端部は、外反し、丸く終る。 調整は、外面を回転ヘラ削り後回転ナデを施し、端部は指ナデによる。内面は回転ナデである。 胎土は、やや粗で2mm角粒の白い砂粒をかなり含む。	色調は、内外面とも淡灰褐色。 焼成は、やや軟である。 ろくろの回転方向は右である。
挿図 70-2 図版19-1 (S B 02覆土)	須恵器 甕	器肉 8mm (胴部小破片)	外面は、格子目状の叩き目が施され内面は、同心円文はなく、指押えである。 胎土は密である。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。
挿図 70-3	土師器 埴	口径10.8cm 器高 3.7cm	底には、炭化状自然遺物が残り、内面には、漆状の膜の付着が見ら	色調は、内外面とも乳褐色。

図版19-2 (SBO2P2内)		(4分の3個 体)	れる。内外面ともハケ目を持たず手づくね風のつくりで、やや安定性に欠く。胎土は密である。	焼成は良好。
---------------------	--	--------------	---	--------

2. 第5号住居址

挿図 70-17 挿図19-3 (SBO5覆土)	灰釉陶 器 台付 片口鉢	口径26.1cm 台部径 14.2cm 器高14.3cm (4分の1 個体破片)	片口部分は、親指と人差指によってつまみだしたもので、指頭圧痕が明瞭に残る。 調整は内外面ともに、下段は回転ヘラ削りで、上段は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。台部は指ナデ調整。 胎土はやや粗で、径1cm粒の小石を含み、白い砂粒もかなり含む。	色調は内外面とも淡灰褐色。 焼成は良好。 ろくろの回転方向は右である。
-----------------------------------	-----------------------	---	---	---

3. 第6号住居址

挿図 70-13 図版19-1 (SBO6覆土)	須恵器 坏身	口径 13cm (口縁部 破片)	立ち上りの胴部やや上から口縁部にかけて、にぶい稜を持ち、やや外反して端部は丸く終る。 調整は、外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ。内面は回転ナデを施す。 胎土は、密である。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。 内面の口縁部近くに丸い凹の痕跡がみられるが、意識した文様ではないと思われる。
-----------------------------------	-----------	----------------------------	--	---

4. 第7号住居址

挿図 71-1 図版20-1 (SBO7覆土)	須恵器 坏蓋	口径 9cm 器高 2.8cm (3分の1 個体)	天井部から、端部にかけて、丸みを帯びるものであり、返りを有さない。 調整は、外面は回転ヘラ削りの後ていねいな回転ナデを施し、内面は回転ナデで、天井部には指押さえ痕が認められる。端部は指ナデである。 胎土は密で、若干2mm角の白い砂粒を含む。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。
挿図 71-3	須恵器 把手付	口径10.8cm	胴部に最大径をもち、底部は平底であると思われる。把手は片方の	色調は、内外面とも灰白色。

図版21-2 (SB07覆土)	片口壺	(口縁部破片)	みか、両方に付くのか、破片の為不明である。 調整は、外面は回転ヘラ削りの後回転ナデであるが、器面にはかなり凹凸が見られる。内面は回転ナデで、片口部分は、指ナデ、把手部はヘラと指による。貼り付け痕を明瞭に残す。 胎土は、精密である。	焼成は良好。
挿図 71-2 (SB07覆土)	須恵器 甕	器内厚さ 6.5mm (胴部小破片)	外面は、叩き目が施され、内面には同心円文が残る。 胎土は密である。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。
挿図 71-4 図版20-2 (SB07 カマド付近)	土師器 甕	口径16.7cm (口縁部破片)	長胴の甕でなく、胴部に最大径をもつ丸底の甕と思われる。 口頸部を削ることによって、肩部との間に段差を持ち、口縁、端部はわずかに面をもち終る。 外面の調整は、口縁部はヘラ削りの後ナデ調整で、肩部分には短いハケ目を有し、その下には、横に走るハケ目が見られる。内面には口縁から肩部にかけての屈曲部に横にはしるハケ目が見られる。その他の部分はナデ調整である。 胎土は密である。	口縁外面にススの付着がみられる。 色調は、外面は暗褐色、内面は乳褐色。 焼成は良好。

5. 第8号住居址

挿図 71-7 図版20-3 (SB08覆土)	土師器 把手付 壺	口径 8.7cm 器高 6.3cm (2分の1 個体)	平底の底部から、丸みを帯びて立ち上り、口縁部は直上して丸く終る。 調整は、外面はやや短めの細かいハケ目を有し、把手部は、貼り付けた後指ナデで形を整え、その後、ハケ目を施す。内面は、ナデ調整である。両側に把手を持つかどうかは不明。 胎土は密である。	外面底部付近には、ススの付着が見られる。 色調は、内外面とも暗褐色。 焼成は良好。
----------------------------------	-----------------	--	---	---

6. 第10号住居址

<p>挿図 71-8 図版19-4 (SB10カマド)</p>	<p>須恵器 坏蓋</p>	<p>口径15.2cm 器高 2.8cm (6分の1 個体)</p>	<p>返りを有さず、端部をやや内方に 屈曲させ、坏身の外郭に固定させ る型式の坏蓋である。 調整は、内外面ともいいいな回 転ナデで、端部は指ナデによる。 胎土は密である。 偏平なツマミのつくものであると 思われる。</p>	<p>外面に灰の付着が見 られる。 色調は、外面は灰の 付着のため黒灰色、 内面は灰白色。 焼成は良好。 ろくろの回転方向は 右である。</p>
<p>挿図 71-9 図版20-4 (SB10覆土)</p>	<p>須恵器 坏身</p>	<p>口径12.7cm 器高 4.9cm (3分の2 個体)</p>	<p>器高のやや高い坏身であり、底部 から、斜め上方への立ち上りは丸 みを帯び、稜を持たない形式であ る。端部はやや外反し、丸く終る。 調整は、内外面ともへら削りの後 ていいいな回転ナデであるが、底 部はへらおこしの後、未調整のま まで、安定性を欠く。 胎土は密で若干2mm程の白い砂粒 を含む。</p>	<p>色調は、内外面とも 灰白色。 焼成は良好。 挿図71-8はセット とならない。</p>
<p>挿図 71-10 図版19-4 (SB10覆土)</p>	<p>須恵器 裏</p>	<p>器肉厚さ 0.6mm～ 0.8mm (胴部破片)</p>	<p>外面は叩き目を残し、内面は、同 心円文はなく、指ナデ調整が施さ れている。胎土は密である。</p>	<p>色調は、外面は灰色 で、内面は黒灰色。 焼成は良好。</p>

7. 第13号住居址

<p>挿図 71-11 図版20-5 (SB13覆土)</p>	<p>須恵器 坏蓋</p>	<p>口径10.4cm 器高 3cm (2分の1 個体)</p>	<p>肩部に稜をもたず、天井部から端 部にかけて、丸みを帯びて伸び、 端部はやや外反して、丸く終る。 調整は、外面は回転へら削りの後 ていいいな回転ナデで、端部は指 ナデを施し、内面はすべて回転ナ デである。 胎土は密である。</p>	<p>色調は、内面は灰白 色で、外面はやや黒 っぽい。 焼成は良好。 ろくろの回転方向は 右である。</p>
<p>挿図 71-12 図版20-6</p>	<p>須恵器 坏蓋</p>	<p>口径10.5cm 器高 2.8cm (完形)</p>	<p>返りを有さない坏蓋、特徴は肩部 に鈍い稜をもつ点である。端部は やや外反して丸く終る。</p>	<p>色調は、内外面とも 灰白色。 焼成は良好。</p>

(S B13 カマド壁)			調整は、肩部以下をミズヒキ手法によって引き出した後、回転ヘラ削りによって成形し、その後、ていねいな回転ナデを施す。内面は回転ナデである。 胎土は密である。	ろくろの回転方向は右である。
挿図 71-13 図版21-1 (S B13 カマド壁)	須恵器 坏蓋	口径 9.9cm 器高 3.4cm (完形)	宝珠ツマミと返りを有する坏蓋。宝珠ツマミは、やや鈍い稜を頂点とする断面三角形で、天井部との間に、2mm程の垂直な部分を有する。端部は、内方に丸く屈曲して終わる。返りは坏部内面よりひねり出されたもので、口縁端部を結ぶ線から下方へは張り出さない。調整は、ツマミ部分は器体に貼り付けた後、天井部との間を削り、他は指ナデである。外面は、回転ヘラ削りの後、ていねいな指ナデを施し、内面は、ていねいな回転ナデ。返り部分は指ナデである。胎土は密であるが、3mm角から1mm角ほどの白い砂粒をかなり含む。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。 ろくろの回転方向は右である。
挿図 71-14 図版19-4 (S B13覆土)	須恵器 坏身	口径 14cm 器高 4cm (4分の1 個体)	底部は平底で、かなり厚く、底部から斜め上方への立ち上りは、間に鈍い稜を有する。 調整は、底部は回転ヘラ削りの後回転ナデであり、立ち上りの部分は、2.5cmほどの間を櫛目状工具によって回転施文した調整が見られる。 この調整は、本遺跡はもちろん他遺跡においても、類例はみられない。 これは文様帯としての意味をもつものかどうか、あるいは調整なのかの判断はつげがたい。ろくろの回転方向は右である。 胎土は密で、2mm角の白い砂粒を	色調は、外面は灰白色、内面はやや暗い灰色。 焼成はやや軟。 (註) 大阪陶窯の場合も、他器種、たとえば高杯の脚部、あるいは壺の頸部及び胴部、甌の頸部には、同様の施文が見られるが、坏身においては、見出すことができない。陶色I~IV大阪府文化財調査報告書第28号~第31号 1980年大阪府教育委員会

<p>挿図 71-15 図版19-4</p> <p>(SB13 コマ付近)</p>	<p>須恵器 高坏</p>	<p>径 8 cm (脚部破片)</p>	<p>若干含む。</p> <p>大きく裾広がりに開き、端部が面をなすものである。上方にのびる脚部との境にみられる二本の沈線は文様ではなく、へら削り痕と考えられる。</p> <p>調整は、外面へら削りの後、ていねいな回転ナデを施し、内面は回転ナデ。端部は指ナデである。胎土は緻密である。</p>	<p>色調は、内外面とも淡白色。</p> <p>焼成は良好。</p>
<p>挿図 71-16 図版19-4</p> <p>(SB13覆土)</p>	<p>丸瓦</p>	<p>(小破片)</p>	<p>外面は格子に叩き目を有し、内面には、布目痕を残すため、おけまきづくりと考えられる。格子目は正方形を呈するもので、一辺2.5mm程である。</p> <p>8世紀前半頃のものと思われる。</p>	<p>本遺跡では唯一の出土例であり、近くに瓦葺きの建物がある可能性もあるが、混入の可能性の方が高いと思われる。</p>
<p>挿図 71-17 図版19-4</p> <p>(SB13 コマ付近)</p>	<p>土師器 甕</p>	<p>口径14.3cm (口縁部 破片)</p>	<p>口縁外面を削ることによって、肩部との間に1mm程の段差を有し、口縁端部は、面をなして終る。又外面の肩部には、ススの付着が見られる。</p> <p>調整は、外面は口縁部をへら削りし、肩部から胴部にかけては、細かいハケ目による。内面は全面ナデ調整である。</p> <p>胎土は密である。</p>	<p>色調は、外面は乳白色、内面は淡白色。</p> <p>焼成は良好。</p>
<p>挿図 72-1 図版21-3</p> <p>(SB13覆土)</p>	<p>土師器 甕</p>	<p>底部径 5 cm (底部破片)</p>	<p>外面には、広い範囲にススの付着が見られる。</p> <p>調整は、外面は短かめの細かいハケ目による。内面はナデ調整である。</p> <p>胎土は密である。</p>	<p>色調は、外面は黒褐色、内面は灰褐色。</p> <p>焼成は良好。</p>
<p>挿図72-2 図版21-4</p> <p>(SB13覆土)</p>	<p>土師器 甕</p>	<p>(胴部破片)</p>	<p>外面はやや荒めのハケ目調整である。ススの付着がかなり見られる。</p>	<p>色調は、外面が黒褐色、内面は灰褐色。</p>

8. 第14号住居址

<p>挿図 72-7 図版21-4 (SB14 床面直上)</p>	<p>須恵器 大甕</p>	<p>肩部径 28.4cm 頸部径 13.7cm (肩部破片)</p>	<p>肩部に最大径を持ち、底部は平底であろうと思われる。器内は他の出土遺物の甕より薄手である。調整は内面に同心円文を有し、肩部上部より頸部にかけては、回転ヘラ削りで、それ以下は格子目状の叩き目を有する。胎土は密で、3mm~1mm角の白い砂粒を若干含む。</p>	<p>色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。 ろくろの回転方向は右である。</p>
<p>挿図 72-5 図版19-4 (SB14 床面直上)</p>	<p>須恵器 坏身</p>	<p>底部径 10.2cm (底部破片)</p>	<p>二次焼成を受けたためか、かなりもろくなっている。口縁部を破損しているため、口径は不明。調整は、外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整を施すが、底部はヘラおこしの後未調整で安定性を欠く。胎土は緻密である。</p>	<p>色調は、内外面とも淡白色。 焼成は良好。</p>
<p>挿図 72-10 図版21-5 (SB14覆土)</p>	<p>土師器 甕</p>	<p>口径 11cm (口縁部 破片)</p>	<p>口縁部から、肩部にかけては明瞭な段差を有さず、口縁端部はやや外反し、僅かに面をもち終る。調整は、外面胴部には8本を一単位とするハケ目が、左右交互に施されている。口縁部はナデ調整。内面は口縁上部に横に走るハケ目が見られ、口縁下部から、肩部にかけてはナデ調整である。胎土は密である。</p>	<p>色調は、外面は淡白色、内面は乳褐色。 焼成は良好。</p>

9. A区溝状遺構

<p>挿図 72-11 図版21-5 (A区溝上遺構内12グリッド)</p>	<p>須恵器 埴</p>	<p>口径14.5cm</p>	<p>底部を欠くため明確ではないが、体部下方より丸味を持ちつつ膨らみをみせ、体部上方より内湾し、口縁部付近において、外反する。端部は丸く終わる。調整は、内外面とも、ていねいな回転ナデで、端部は指ナデである。</p>	<p>色調は、内外面とも灰白色、自然釉がかかった部分は黒味を帯びる。 焼成は良好。 胎土は密である。</p>
--	------------------	-----------------	---	--

			内外面の口縁部付近に自然釉の付着が見られる。	
--	--	--	------------------------	--

10. C区溝状遺構

挿図 73-24 図版22-1 (C区溝状遺構 構円53グリッド) 	須恵器 坏身	口径13.3cm 器高 3.5cm (3分の2 個体)	平底で、立ち上り部分に稜を有し一度外反してから端部付近において内湾し、端部は丸く終わる。やや偏平な感をうける。 調整は、底部は回転ヘラ削りで、立ち上りの部分の外側は、下から三段を回転ヘラ削りによって整形した後、全体に回転ナデを施す。内面はすべて回転ナデである。 胎土は密である。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。 底部裏面には、本遺跡で唯一の×印のヘラ記号を有する。
---	-----------	--	---	---

11. その他の出土遺物

挿図 73-1 図版22-2 (A区56グリッド三層)	須恵器 坏蓋	(口縁 小破片)	蓋の内面に、器体からひねり出されたと思われる断面三角形の形骸化した返りを有する。本遺跡においては唯一の例である。 胎土は密である。	色調は灰白色。 焼成は良好。
挿図 73-2 図版22-2 (B区22グリッド表土層)	須恵器 坏身	高台部径 7.6cm 高台の高さ 7mm (底部 小破片)	高台を有する坏身で、挿図73-10とは異なり、器内の厚い高台を有する。胴部が破損しているため、明確ではないが、台付の塊になるとも考えられる。 高台部の調整は回転ナデ。 胎土は緻密。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。
挿図73-3 図版22-2 (C区54グリッドII層)	須恵器 坏身		受部をもつ坏身であり、本遺跡では坏蓋の出土数に比べ出土が少ない。 胎土は密である。	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。
挿図 73-4 図版21-6	須恵器 坏蓋	口径14.6cm 器高 3.8cm ツマミ径 3.3cm	端部をやや内方に屈曲させ、坏身の外郭に固定させる型式。 調整は、外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ。内面は回転ナデを施し	色調は、内外面とも灰白色。 焼成は良好。 ろくろの回転方向は

(C区50グリ ッドII層)		ツマミの高 さ 4mm (2分の1 個体)	端部は指ナデを用いる。 ツマミ部分は、外面に貼り付け痕 を残し、貼り付けた後回転ナデ調 整によって整形されたものである。 胎土は密で、2mm～1mm角の白い砂 粒を若干含む。	右である。 SB10出土の挿図71 -8と同形式のもの と考えられる。
挿図 7355 図版22-2 (C区43グリ ッド表土層)	須恵器 坏身	口径 8.4cm (口縁 小破片)	受部を有する坏身である。 調整は、内外面ともいねいな回 転ナデが施されている。 胎土は緻密である。	色調は、内外面とも 灰白色。 焼成は良好。 ろくろの回転方向は 右である。
挿図73-6 図版22-2 (C区37グリッドII層)	須恵器 坏身	器内 1cm (胴部 小破片)	外面には、叩き目を旋し、内面には 同心円文を残す。 胎土は密である。	色調は、外面は灰色 内面は灰白色。 焼成は良好。
挿図73-7 図版22-2 (C区27グリッドII層)	須恵器 坏蓋の ツマミ	ツマミ径 3.5cm (ツマミ部分 の2分の1)	挿図73-4と同様蓋に付くもので あろう。調整は、ナデ調整。 胎土は密である。	色調は、灰白色。 焼成は良好。
挿図73-8 図版22-2 (C区26グリ ッドII層)	須恵器 高環	(高環の環 部の底部 片)	柱状の高台に伴うものと思われる。 外面に灰の付着が見られる。 調整は、内外面とも回転ヘラ削り の後、回転ナデである。 胎土は密である。	色調は、外面は淡白 色、内面は灰白色。 焼成は良好。
挿図73-9 図版22-2 (C区53グリ ッドII層)	須恵器 提瓶	(提瓶の 側面破片)	器体側面の一部で、側面の外側には ヘラ切痕を明瞭に残す。 中央部はかなり厚い。 調整は、内面に指頭圧痕が無数に 残り、胎土は密である。	色調は、内外面とも 灰白色。 焼成は良好。
挿図73-10 (C区44グリ ッドII層)	須恵器 坏身	高台の高さ 6mm (底部 小破片)	やや薄手のつくりで、C区で唯一 の高台を有する坏身である。 調整は、回転ナデで、高台の部分 は、指ナデによる整形が施されて	色調は、内外面とも 暗灰色。 焼成は良好。

いる。
胎土は、密である。

12. 鉄器類

本遺跡より出土した鉄器は、刀子2点である。両方とも住居址内の出土であるので、同遺構に伴うものと思われる。

(SB12出土刀子) (挿図73-26 図版22-3)

SB12の西南隅のP₁(挿図21)より、刀子が1点出土した。全長は11.7cmを測り、刃長は6.2cm、刃幅は鋒に近づくに従って狭まり、関部において最も幅広く、1.25cmを測る。厚さは棟で3.5mmを測り、断面は三角形を呈す。把部には木質はみられず、長さは5.5cm、厚さは4.0mmを測る。木質のない理由として、把部が長いために木柄をつける必要がなく、直接、把部を布か皮につつんで使用することも可能であったためと、想定される。又、鞘の存在も不明であるが、現在刃部に何にも遺存しないため、鞘の使用はなかったものと思われる。

(SB14出土刀子) (挿図, 73-25, 図版22-3)

SB14の床面直上より、刀子1点が出土した。全長は12.1cmを測り、刃幅は鋒に近づくに従って狭まり、関部において最も幅広く、1.4cmを測る。厚さは棟部で40mmを測り、断面は三角形を呈す。把部には木質がかなり厚く遺存し、木目は刀身の方向と一致する。鞘を着装していたかどうかは不明であるが、現在見るところでは、刀身の表面には何も遺存していない。

(徳田)



挿図74(土鍾)

13. 土鍾

(挿図74, 図版22-3)

管状土鍾の破片が1点出土した。現長3cm、径9mmで直径3.5mmの孔がある。色調は明褐色を呈し、胎土はきめが細かく、焼成は良い。

14. 古銭

(挿図75, 図版22-3)

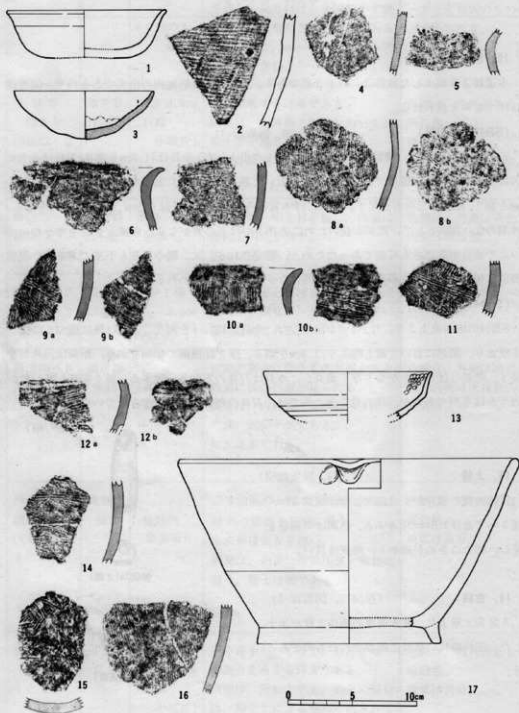
A区表土層より、寛永通寶の破片2枚が出土した。江戸時代の墓塚に副葬されたものであろう。



挿図75(寛永通寶)

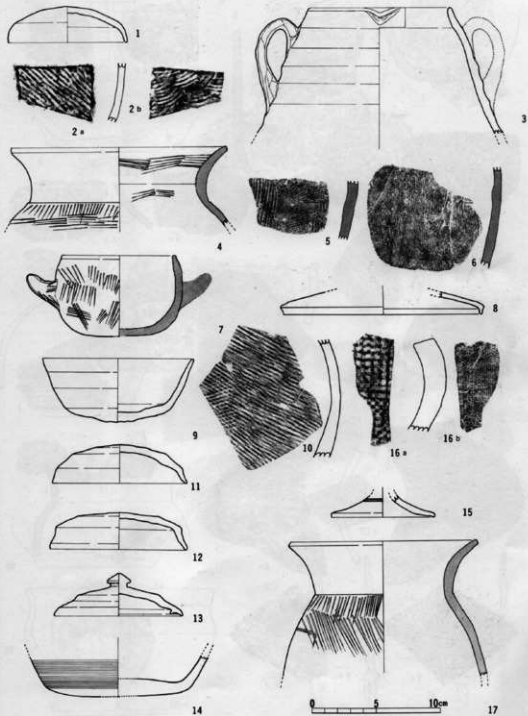
挿図70 歴史時代の遺物

第2号住居址出土(1~3) 第3号住居址出土(4~8) 第4号住居址出土(9~12, 14)
 第5号住居址出土(17) 第6号住居址出土(13, 15, 16)



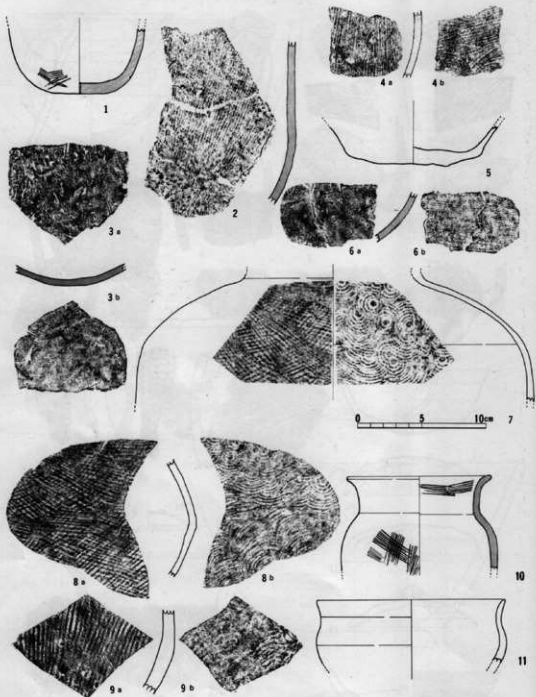
挿図71 歴史時代の遺物

第7号住居址出土(1~6) 第8号住居址出土(7) 第10号住居址出土(8~10)
 第13号住居址出土(11~17)



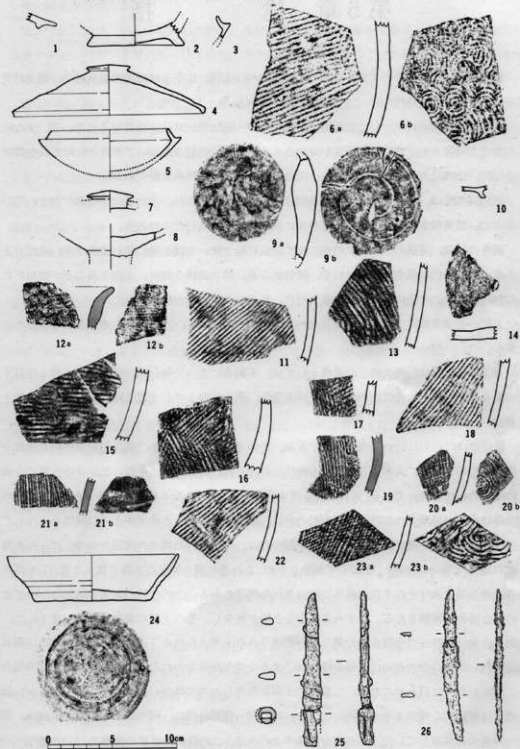
挿図72 歴史時代の遺物

第13号住居址出土(1~4) 第14号住居址出土(5~8, 10) A区溝(11) 道橋外(9)



挿図73 歴史時代の遺物

C区溝(24) 遺構外(1~23) 刀子(25,26)



第5章 総 括

糠塚遺跡は、高山市の北東に立地する大西山の、北西に広がる緩傾斜の扇状地に、縄文時代・弥生時代・歴史時代に亘って営まれた遺跡である。

本遺跡の範囲は点々として広範囲に亘る。その一部は明治時代より周知されている。また別の地点を昭和8年9月に発掘調査が実施されている。この調査において発見された土器を標式として、山内清男、江馬修などによって命名されたのが糠塚式土器である。

昭和54年度に、糠塚地区の土地改良総合整備事業が計画され、その中に本遺跡が含まれているので、整備事業に先だって昭和57年度に発掘調査を実施したのである。

調査の結果、遺構として縄文時代に属する住居址2基、土壌5基、集石遺構2基、大ピット4基、歴史時代に属する住居址15基、建物址2基、溝状遺構3箇所、土壌2基などが検出されたのである。この他に縄文時代、弥生時代、歴史時代の遺物が検出された。

上記の遺構遺物について特に注目すべきものについて、二、三総合的な考察を行なうことにする。

第1号住居址は、縄文時代の遺構としては、本調査によって知られた遺構の中で最も注目すべきものである。本住居址の時期は、伴出遺物、出土状態よりして縄文時代前期後半の時期と推定される。

住居はほぼ円形に近い竪穴住居址である。この床面に接して大小二個体の完形の列孔浅鉢が出土したのである。大形の方は文様も精巧に付けられ、諸磯式b式土器に比定する土器で全面に赤色物が塗彩されている。これに対して小形の方は、文様もなく粗雑な土器である。これ等の土器は住居が廃棄される段階で、大形の方は、床面中央部に当る地床炉上に口縁部を上にしてほぼ水平な状態で置かれている。また小形の方は、やや離れた地点の床面のややくぼんだ赤褐色に焼けた部分に、口縁を下にして検出された。これ等の同じ器形の土器を覆う土層は、木炭を含む第3層でありその木炭が棒状に検出された部分もある。この住居の廃棄の状態について次の様な場合が推察される。先ず火災により上屋が焼失し、その上屋の炭化した材が落下して、流土と共に堆積して木炭を含む第3層が形成されたと考えられる。次に廃棄された後に、儀式等の何らかの目的のために土器が置かれ、大きな焚火が行なわれたとも考えられる。この場合二度にわたって行われたため、二個体の土器が残存したのではないかとする意見もあるが、後者には積極的な確証を示す根拠に乏しい。然し同一住居址内に、同一器形の土器が二個体、同一地層内に残存していたことが何を意味するのかは、この器形の土器の機能及び分布圏などの

追求と、その他類例資料の検出などによって本遺跡の廃棄における段階の性格が究明されよう。今後の研究課題である。

第9号住居址は、かつて昭和の初期に江馬修によって発掘調査が実施された場所に該当する地点である。^(註1) 円形プランの竪穴住居址で、中央部に地床炉を持つことが確認された。本住居址の時期は覆土中の土器より推定して前期後半の時期と推定される。

以上の外に縄文時代の遺構として土壌、大ピット、集石遺構などが検出された。A区における第2号土壌は、柱穴は見られなかったがその規模、その他よりして茅野市棚畑遺跡第1号住居址などの類例に近く、本土壌も住居址的なものとも考えられる。また、B区の遺物包含層は、プランの状態は明瞭にされなかったが、遺物の出土状態及びその規模よりして早期の遺構と考えられる。第5号土壌、大P₁～大P₂においても早期の遺物を伴出している。また集石遺構は、時期を決定する様な伴出遺物を伴っていないが、出土状態と、集石は全て焼けている点より、石山貝塚などで知られる縄文早期の時期に見られる集石遺構に類似するものと推定される。^(註3)

早期の遺物は、土器、石器類である。早期の土器の中では押型文土器が主で、高山寺、立野遺跡などで出土のものに類似するものである。これ以外に摺糸文、条痕文、沈線文、縄文などの早期の土器が僅少であるが出土している。石器類も早期に属するものが僅かに出土している中で、特記すべきは異形部分磨製石器が1点出土している。発掘調査時の所見によるとこの石器の出土地点は、早期の遺物を出土した大ピットに近接し、その関連がうかがわれる。

前期の遺物は、早期同様、土器、石器類である。土器類は前述の列孔浅鉢以外は全て小破片であるがその他の土器は北白川下層II a, b, cなどの西日本系土器、諸磯a, bなどの東日本系の土器が主体であり、やや西日本系の土器が多い。前期後半の時期のものが多く出土している。石器類はこの時期に一般的に見られるものが出土している。

縄文中期の遺物は、A区、B区で僅かに出土した以外に、C区ではA、B区に比較して多く出土したのである。このC区は今回の調査区域外の隣接する地点に中期の集落の中心地域の存在が過去の調査によって推定される点より、その遺物包含層の一部の続きとして土器が出土したのである。これらのA、B、C区の資料はいずれも断片的であり、遺構等を伴っていない。

それ等の資料は、船元式、里木II式、加曾利E式土器などに比定、または類似する土器が知られる。

弥生時代に属する遺物は、僅かに散在して出土したのみである。時期は弥生式中期に属するものである。飛騨地方の弥生時代の資料は少ないので、現段階では少量であるがこの時期の研究には欠くことが出来ない資料と言えよう。

歴史時代の遺構として、住居址は、A区、C区で15基検出されたのである。いずれの住居址も基盤となる黄褐色ローム層を掘込んだ隅丸方形の竪穴住居址である。一つのパターンとして

住居の掘込みの北壁のほぼ中央部にカマドを構築している。これ等の中で第13号住居址は複式のカマドを持つものであった。各住居址の遺存状態は良好とは言えない。従ってカマドも崩壊してその位置を留める程度のもが多い。またカマドに使用されたと推定される石がその前面部に散在している例が多く見られた。床面も非常に硬化しているものと軟弱なものが見られた。

住居址の複合したものとして、第7号住居址と第8号住居址との先後関係であるが、これは第7号住居址の覆土中に貼床の痕跡が認められた点よりして、第7号住居址は第8号住居址に先行するものである。

次に歴史時代の住居址の時期についてである。伴出遺物が僅少であるのに加えて、小破片のものが多く、器形の判別できるものは約30点ほどである。更に器形を複元できるものは僅かに10点余りであり、これ等の資料によって時期の決定をすることは至難である。この少ない資料の中で比較的まとまった、第13号住居址は出土した須恵器より7世紀末～8世紀初頭に位置づけが可能であろう。

本遺跡の住居址内、及び発掘調査において出土した、須恵器、土師器よりして、第5号住居址外の遺物は7世紀後葉から8世紀代の範疇と推察される。

またこれらの資料の中には、飛騨地方の古窯の中でスイリン古窯跡出土の遺物ともっとも近い年代のものが出土している。^(註4)

本遺跡の須恵器を初め各住居址の位置づけは今後当地方の須恵器の編年の位置づけを待って稿を改めて検討せねばならない。

この他に建物址、土壌などの遺構と遺物として金属器が出土したのと、食物の残留物と推定されるものが杯身の中に見られた。これ等の資料は、飛騨地方の古代史を研究する上で、先年発掘調査された薬師野遺跡に続いて貴重な資料を提供したのである。

上述した様に本遺跡は、縄文時代より歴史時代に至る長い時代の中で、生活の場としての歴史を展開して来たことが知られた。

(大江)

(註1) 「江名子饗塚の土器」ひだびと3の3 昭和11年

(註2) 八幡一郎「日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究」上 昭和47年

(註3) 「石山貝塚」平安学園 昭和31年11月

大江 外「水口遺跡、ソラ遺跡」岐阜県教育委員会、小取町教育委員会 昭和53年5月

(註4) 大野政雄、亀山喜一「スイリン古窯」飛騨春秋第8号第二号 飛騨郷土学会 昭和38年



1. 糖塚道跡全景



3. 発掘状態(A区)



2. 糖塚道跡全景



4. 発掘状態(B区)



5. 発掘状態(C区)



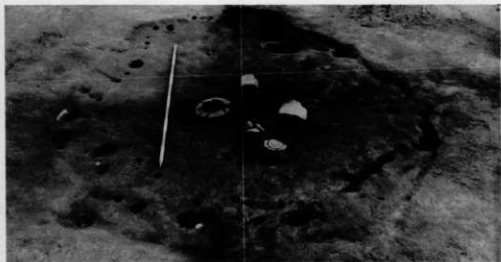
1. A区遗址全景



3. 聚族状况(C区)



2. 聚族状况(A区)



1. 第一号住居址



2. 第一号住居址出土列孔浅钵



3. 第一号住居址



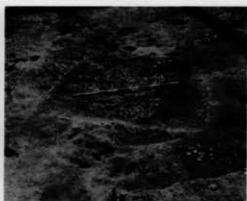
1. 第2号住居址



2. 第3号住居址



3. 第4号住居址



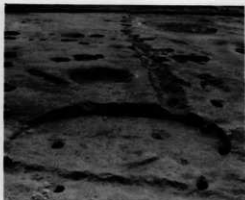
4. 第5号住居址



5. 第6号住居址



6. 第7, 8号住居址



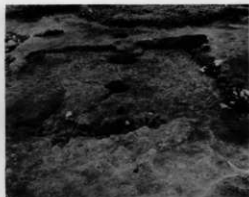
1. 第9号住居址



2. C区遺跡(第10~12, 15号住居址)



3. 第10号住居址



4. 第11号住居址



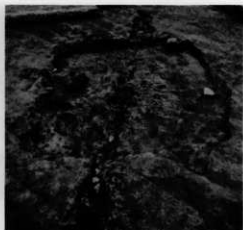
5. 第12号住居址



6. 第13号住居址



1. 第13号住居址カマド



2. 第14号住居址



3. 第15号住居址



4. 第16号住居址



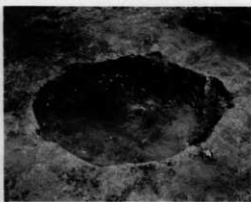
5. 第17号住居址



6. 第1号建物址



1. 第2号建物址



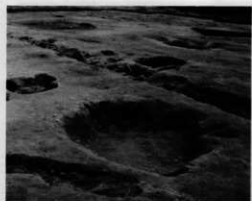
2. 第1号土坑



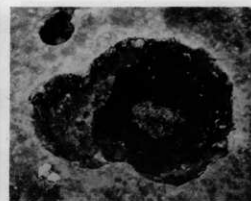
3. 第2号土坑



4. 第3号土坑



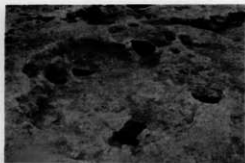
5. 第4号土坑



6. 第5号土坑



1. 第6号土壇



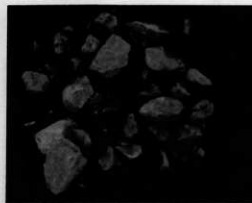
2. 第7号土壇



3. B区発掘状況



4. B区の遺物包含層



5. 第1号集石遺構



6. 第2号集石遺構



1. 第3号集石遺構



2. A区の溝状遺構



3. C区の溝状遺構



4. 発掘状況(C区第13号住居址)



5. 発掘状況(C区第13号住居址)



6. A区P内出土遺物



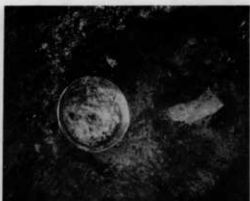
1. 第2号土壇出土押型文土器



2. 第13号住居址カマド付近出土土師器



3. B区のスグレ状押型文土器



4. 第13号住居址カマド付近出土須恵器



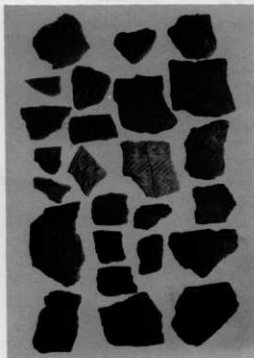
5. 第5号住居址出土陶器



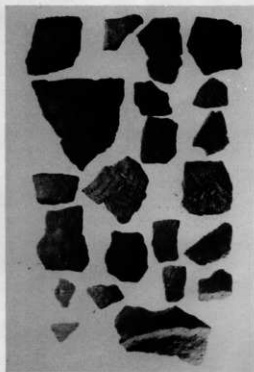
6. 第4号住居址出土土師器



1. 钵图 43 列孔浅钵



2. 钵图 44



3. 钵图 46



1

第1号住居址出土遗物 (捧图47)

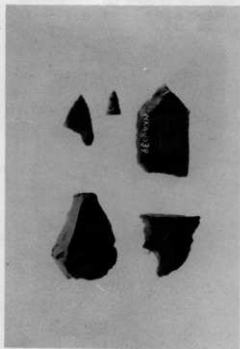


2

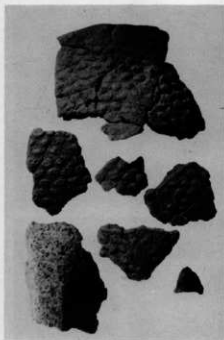


3

第9号住居址出土遗物 (捧图48, 49)



4



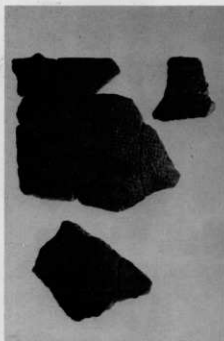
1. 第2号土壌出土遺物 (挿図50)



2. 第5号土壌, 出土遺物 (挿図52)



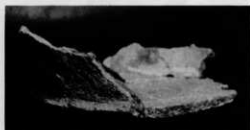
3. 第5号土壌, 大ビット出土遺物 (挿図52)



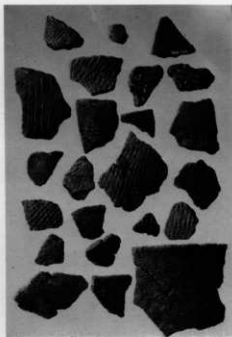
4. 一括土器① (挿図54)



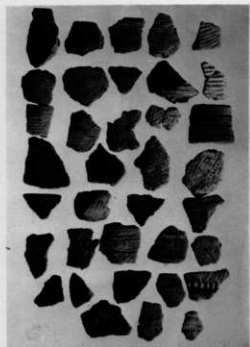
5. 一括土器② (挿図55)



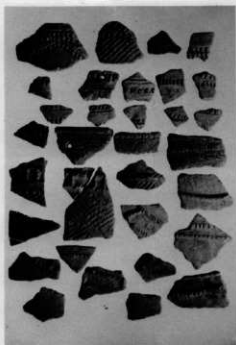
1. 挿図 56



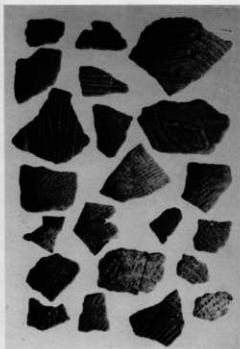
2. 挿図 57



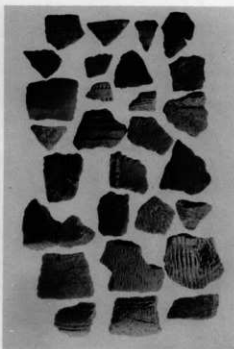
3. 挿図 58



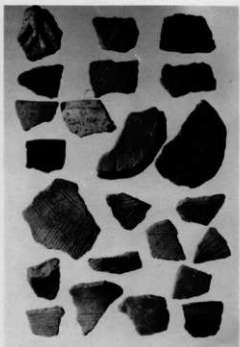
4. 挿図 59



1. 挿図 60



2. 挿図 61



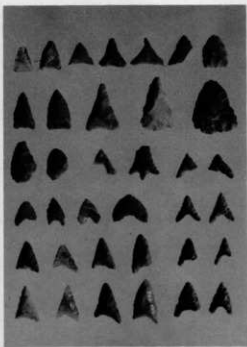
3. 挿図 62



4. 挿図 62-9

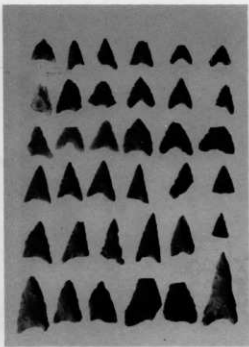


5. 挿図 62-10



1

挿図 63



2



3

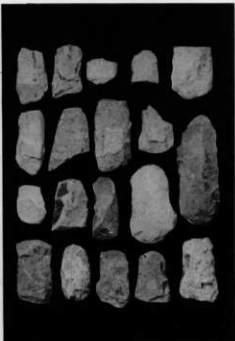
挿図 64



4



1. 挿図 65



2. 挿図 66



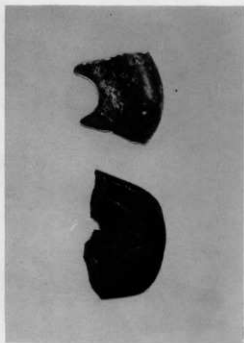
3. 挿図 67



4. 挿図 68



1. 挿図 69



2. 挿図69-2・3

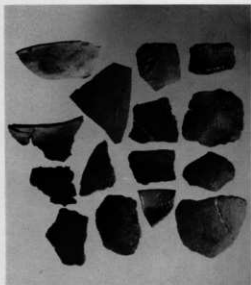


3

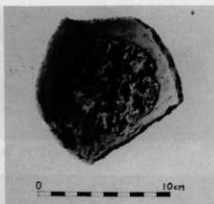
異形部分磨製石器 (挿図69-4)



4



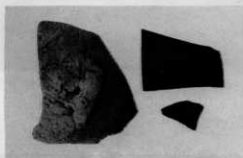
1. 挿図 70



2. 挿図 70-3



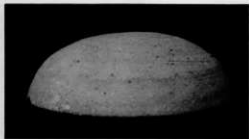
3. 挿図 70-17



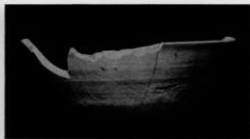
4. 挿図 71-2・72-7・73-10



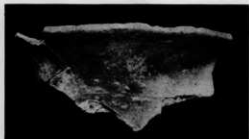
5. 挿図 71



1. 挿図 71-1



4. 挿図 71-9



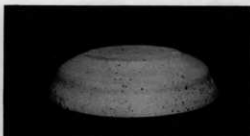
2. 挿図 71-4



5. 挿図 71-11

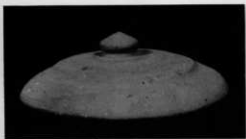


3. 挿図 71-7

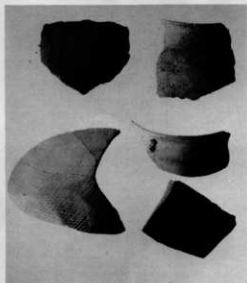


6. 挿図 71-12

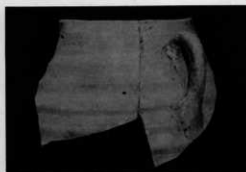




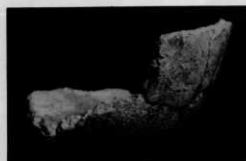
1. 挿図 71-13



4. 5. 挿図 72



2. 挿図 71-3



3. 挿図 72-1



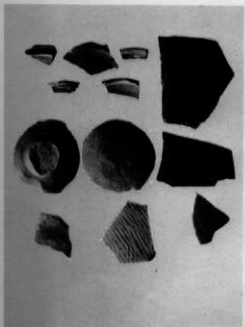
6. 挿図 73-4



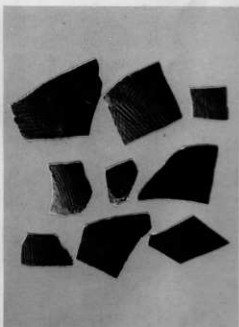
1. 挿図73-24



3. 挿図73-25・26 挿図74・75



2. 挿図 73



4. 挿図 73